# 月姫NTR短編集

七味胡椒

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

月姫ヒロインの寝取られシチュの短編集です。

登場済・『アルクェイド』『シエル先輩』『遠野秋葉』『翡翠』

# 目次

吸血姫の火遊び ―― 1
埋葬者の被食 ―― 12
鬼妹、孕む ―― 28
おまんこオナホメイド翡翠ちゃん ―― 57
孕ませ家政婦の琥珀さん ―― 117

# 吸血姫の火遊び

まだ外の暗い、明け方前の時間。
俺――――――遠野志貴は、恋人であるアルクェイド・ブリュンスタッドの部屋で、彼女を待っていた。
電気も点けず、部屋は暗く静まり返っている。空気が俺の肩に重く圧し掛かる。立ち上がる気力さえ起きなかった。
アルクェイドは今、他の男に抱かれに行っている。
理由は一つだ。俺が、彼女を満足させる事が出来なかった。
最初はアルクェイドも俺を慮ってくれていた。しかし、彼女はつい最近まで娯楽や快感というものを知らずに生きて来た身。そんな彼女が初めてセックスを知り、性感を貪欲に求め始めるのにそう時間は要らなかった。
今日から一週間ほど前。性行為の後に言われたのだ。本当に済まなそうな、しかし言わずにはいられないと言う顔で、
『……あのね、志貴。本当に言いにくいんだけど』
貴方とのセックスでは、満足出来ない。
いや。はっきり言ってしまえば、気持ち良くないのだと。
……思い出すだけで、喉が干上がる。目の前が真っ暗になったような気分だった。
俺との経験しかない彼女でも、セックスが本来快楽を伴うものであるという事は知識として持っている。なのに、愛する人との行為のはずなのに、何ら気持ち良くないのはおかしい。不思議だ。だから一度でいいから他の男に抱かれてみたい、とアルクェイドは言った。
それを、どうして拒否する事が出来るだろう。アルクェイドが俺を愛してくれている事は事実として分かっている。そんなパートナーに恋人公認の不貞を申し込まれて、尚彼女の苦悩を続けさせる事は、俺には出来なかった。
幸か不幸か、相手を探すのは簡単だった。かつてアルクェイドと共に俺の学校へ忍び込んだ時、とある教諭に目撃されていたらしい。大柄な体育教師の彼は、興味津々で俺の隣にいた金髪の美女の事を聞い

てきたものだ。以前その話をした事をアルクェイドは覚えていたらしい。お世辞にも生徒に好かれているとは言えない性格で女子にはセクハラ紛いの事をしているという噂の教諭だったが、アルクェイドにとってはその辺りの事は気にならないようだ。俺としても嫌だったのだが、元から自分に興味を持っている相手なら丁度いい、とアルクェイドに提案され、二人を引き合わせた。

唾を呑み込んで時計を見る。夕方から郊外のラブホテルで待ち合わせした二人、夜には帰って来る予定だったのが、もう既に空が白み始めそうな時間になっていた。

おかしい。一度、たった一度で戻ると彼女は言っていたはず。なのに何故、俺は何時間も待ちぼうけになっているのか。

いっそホテルへ出迎えに行ってみようか、と思う。もう何度目か分からない躊躇。しかし、今度こそ我慢の限界だ。決心してわずかに腰を浮かせた時。

「――――――ただいま」

俺の恋人が、ドアを開けて帰って来た。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「ゴメンね、志貴。すっかり遅くなっちゃった」

トコトコと、いつもと変わらぬ様子でアルクェイドは歩いて来る。

美しく流れる金髪も、セーターを盛り上げるふくらみも、翻るスカートも数時間前にここを出て行った時と変わらない。

「なに、ずっとそこに座ってたの？　全然位置が変わってないよ」

ぎしり、と彼女が俺の隣に腰かけた。

「ちょっと、顔真っ青だよ。大丈夫？　調子悪いの？　……また今度にしようか、『報告』は」

こちらを横目で見る。

その流し目に、いつもと少し違う色が混じっているように感じる。

俺と彼女、今まではどちらが上だという事はなかったが、どこか、見下されているような――――――、
と、彼女の唇に何か違和感を覚えた。薄暗い部屋の中、目を凝らすと、艶のある唇に何か糸のようなものが引っ掛かっているように見えた。
俺の視線にアルクェイドも気付いたらしい。指先で、ひょいとそれをつまむ。
「あ。くっついちゃってた」
ぱくり。赤い舌で絡め取るように、呑み下した。
「ぷは。……ちょっと、志貴ったら何その顔。もしかして……、彼女が他の男の人のチン毛を呑み込む所を見て興奮してる？　あは、じゃあおじさんとわたしのエッチ、『報告』しても大丈夫そうだね？」
昏い、嗜虐的な色に染まった瞳。唇を歪めて淫靡に笑う吸血姫。
震える声で問いかける。本当にあいつに抱かれたのか、と。
「くすっ。――――――うん、本当♥　志貴じゃない男の人に、たっぷり抱かれて来たよ。それじゃせっかくだし、最初から言っていこうか」
俺の腕を抱き締めて、アルクェイドは話し始めた。
「志貴も知ってると思うけど、彼とホテルの前で待ち合わせたの。彼には悪いけど、写真で見たよりもっと不細工だったかも。まあその方が分かり易いし、わたしよりずっと大きな体格で見つけ易かったから良いんだけどね。すぐに向こうも気付いたわ。最初は呆然としてるみたいだったな、まあわたしって結構美人みたいだから驚いたのかも」
結構、なんてもんじゃない。アルクェイドは人生で二度と出会えないようなレベルの美女だ。半信半疑で待ち合わせしてみたらそんな女が出て来たなんて、そりゃあ信じられないだろう。
「その場で自己紹介して、ホテルに入ったの。もうね、おじさんったらわたしの胸とかお尻とかガン見。中腰になって隠そうとしてたみたいだけど、部屋を選んでる時から勃起してるの丸わかりだったわ。二人用で一番上等な部屋を選んで、二人でエレベータに乗って。そこで

彼、どうしたと思う？」
　悪戯っぽく聞いてくる。想像はつく。俺が彼と同じ立場だったらきっと、
「そう♥　扉が閉まった瞬間にね、わたしのおっぱいを両手で掴んできて……そのまま壁に押し付けてディープキス♥　もうね、部屋に行くまで待ちきれないって感じにがっついて来たわ。ぱんっぱんに張ったズボンの前も腰に押し付けて。性欲しかないお猿さんですー、って感じ」
　くつくつと、楽しい出来事を思い出す様に喉の奥で笑う。
「そのままお尻を引っ掴まれて、部屋に直行。部屋に入ったらすぐこのセーターの下から腕を突っ込まれて、直接おっぱいを揉まれたわ。『下着を着けてないのか』って驚かれてね、まあわたしは付ける必要がないからなんだけど、出任せで『その方が興奮するでしょ？』って言ってあげたら凄く嬉しそうだったなあ。その間も唇とか頬とかべろべろ舐めて来て、ちょっと臭かったかも」
　アルクェイドが自分の胸を腕で押し上げる。初めて俺以外の男の指紋が付いた乳房がむにゅんと揺れた。
「おじさんが相変わらずへこへこ腰を押し付けて来るから、わたしも膝でぐりぐり撫でてあげたの。そしたらすっごく気持ち良さそうでね、ズボンの布越しにおちんちんがびくんびくんしてるのが分かったわ。おじさんが逃げるみたいに腰を引いたから、無理やり引き寄せて逃げられないようにして。わたしからも口に舌を捩じ入れて、容赦なく膝コキしてたら……、おじさんたら服も脱がずにあっけなく射精しちゃった♥」
　……それは、無理もないだろう。きっと彼女を抱けるという事で、精液を溜めて来たはずだ。そこにキスしながらの刺激を加えられては、一たまりもなかったに違いない。
「それでやっと、少し落ち着いたみたいでね、ベッドに座ったんだけど……、その前に、志貴？」
　俺の下半身を見てアルクェイドは言った。
　彼女の視線。俺の股間はもう、

「……志貴のおちんちん、勃っちゃってるね♥　今の話だけで勃起しちゃったんだ……♥　ねえねえ、せっかくだからさ」
　猫のように目を細めて、
「オナニー、しちゃおっか♥　スボンの上から分かるくらいもっこりしてるもん、志貴も吐き出したいんだよね？　いいよ、わたしが手でしてあげる♥」
　俺が頷かずとも答えは丸分かりだったらしい。
　カチャカチャと手早くベルトを外される。
「よっ、と……。おじさんのもね、こうやってわたしが脱がせてあげたんだ。ベルトを外して、ズボンを下ろして」
　腰を浮かせて、ズボンが引き抜かれる。
「それで、そうそう♥　こうやって膨らんで、おじさんのオスの匂いプンプンさせる下着が出てきて」
　下着のバンドに指を引っ掛けて。
「こうやって、ぐいーって下ろすと……、あは♥　出て来たあ……♥　やっぱり」
　拘束を解かれ、ぶるんと跳ね上がった肉棒。それは、
「やっぱり……ちっちゃいんだね♥　こうして見ると改めて分かるなぁ。おじさんのおちんちんとは比べものにならない、志貴の小さくて短いおちんちん……♥」
　きっと彼女がさっきまで見ていたものとは比較にならない、子供のような性器だった。
「おじさんのおちんちん見た時ね、びっくりしちゃったの。『これが志貴についてるのと同じモノ？』って……♥　わたしが呆然としてたらね、それでおじさんも色々と理解したみたい」
　ふるふると揺れる俺のチンポを見下ろしながら、
「志貴のこのおちんちんの……2倍？　3倍かなあ？　体積だったらもっと差があると思うけど。それをへたり込むわたしの顔に突き付けてね、『舐めろ』って♥　血管がばっきばきに浮いて、赤黒くて、先っぽから涎みたいに先走りを垂らして……♥　どんな魔術師や死徒と戦った時よりも迫力があって、威圧されちゃった♥」

……それを、舐めたのか。恐る恐る聞くと、
「うん、当然でしょ？　まずは、吸い寄せられるみたいに亀頭にチュッてキスしたわ。もうそれだけでひくひく揺れてね。裏筋とか、脈打ってる血管とか、金タマとか……♥　仁王立ちするおじさんに跪いて、おちんちん全体をちゅっちゅしたの。もうキスはいいから咥えろって言われたから、ぱくって咥えたら喉の奥まで突っ込まれてね。髪を掴まれて、ぐっぽ、ぐっぽって♥　そのまま、予告もなしにお口の中で盛大に射精♥　……今回の事はこっちから『抱いて下さい』って頼んでして貰ってるエッチでしょう？　だからおじさんも容赦なかったみたい。まるで道具みたいに使われちゃったなあ」
　れろ、と唇を舐めて彼女が言う。それに気付いているのかいないのか。アルクェイドは、彼とのセックスを思い出すのに夢中になっていた。
「胃の中におじさんの精液が流れ込んで来てね。イヤだったと思う？　思って欲しかった？　……ごめんね、全然イヤじゃなかったの♥　それどころか……、志貴のうっすい水みたいなザーメンよりずっと飲み応えがあって、濃厚だった♥　おちんちんの大きさって精液と関係あるのかな？　たぶん関係ないよね？　おちんちんでは負けてても、精液くらいでは勝って欲しかったけど……無理だったね♥」
　アルクェイドが俺のチンポを掴む。いや、それは掴むというより指先で摘まむと言った方が正しかった。
「じゃあ、しこしこしてあげようか。……うーん、おじさんと比べると本当にちっさいね。掌で握ったら亀頭が見えなくなるんじゃない？」
　親指と人差し指でちゅこちゅこと撫でながら、
「おじさんのおちんちんね、何発出しても萎えないの。わたしが頑張って飲み干したら間髪入れず、スカートと下着を引きずり下ろされてね。もうわたしのおまんこも発情しまくりで、ショーツに糸引いて笑われちゃって恥ずかしかった……。そのまま壁に押し付けられて、にゅるんって後ろから挿れられちゃったわ♥」
　以前一目見て下半身を疼かせていた金髪美女を、バックで犯す。それはたまらない快感だっただろう。恋人の性器を他人が味わったと

いう事に、頭がくらくらする。
「あ……志貴のおちんちん、また固くなった♥　まあ、おじさんに比べればまだ全然だけど……。ちなみにね、今の志貴のおちんちんの倍くらいが、おじさんのおちんちんの長さだよ。それ目指して頑張ってね？
――――――そうそう、長さって言えばさ。志貴っていつも正常位で、バックとか、おじさんにはして貰ったんだけど対面座位とか、してくれなかったよね。その理由、やっと分かったよ」
アルクェイドは心底おかしそうに笑いながら、
「それも、志貴が粗チンだったからなんだね♥　比べるとはっきり分かるよ。志貴の短小おちんちんじゃ、座った時に太ももからちょっとぴょこん♥　って顔を出すだけだし……バックでやろうにも、わたしの大きなお尻が邪魔になっておまんこに先っぽだけしか届かないからだったんだ♥　ごめんね、恋人なのに全然気付いてあげられなくって♥　いつも同じ体勢だなー、なんでかなーとは思ってたんだけど……ぷぷっ♥」
恋人からの嘲笑に、しかし俺のチンポは痙攣していた。盛んに先走りを吹き出し、彼女の手を汚す。
「うわぁ、先走り汁だけはおじさん並みかも？　ってか志貴、恋人のこういう話聞いて興奮しちゃうんだ？　……ふふ、ならわたしも抱かれて来た甲斐があったってものかなあ。……それじゃあ、恋人が浮気エッチして悦んじゃう志貴に続きを話そうか」
すっと俺の耳元へ口を寄せる。
囁くように彼女は言った。
「おじさんのバックね、凄かった……♥　腕を後ろに引かれて、上半身を壁に押し付けられて、ぱんっ、ぱんって♥　志貴じゃ到底届かなかったトコまで、おちんちんの先っぽが激突してくるの♥　子宮を突かれるのってあんなに気持ち良いんだね♥　志貴とのセックスじゃ出来ないから知らなかったよ♥　……わたしね、途中から泣いちゃってた♥　仕方ないよね、今まで受けたどんな刺激よりも強烈で、辛くて、気持ち良くって……♥　感覚神経がショートしちゃってたみたい

♥『駄目、駄目』って言いながら、おまんこぱこぱこされてたの♥」
真祖の吸血姫が人間との性交で泣かされたという屈辱を口にしながらも、アルクェイドの瞳は淫楽に染まっている。そこに嫌悪感は欠片もなかった。
「わたしが泣き喚いても腰をがっちり掴まれて、お尻を平手で叩かれて♥　勿論、力ずくで逃げようと思えばどうとでも出来たよ？　でもね、全然そんな気にならなくて……『ああ、わたし今、この人に食べられてるんだ』『わたしがどれだけ強い吸血鬼で、真祖の姫でも、この人はオスでわたしはメスなんだ』って思ったら、すっかり腰が抜けちゃって、もう白旗振っちゃってた♥」
アルクェイドの顔が、段々朱に染まっていく。力で捻じ伏せられる、というまず有り得ない体験をした事に、彼女も被虐的な快感を覚えているらしかった。
「しばらくやりたい放題犯されたあと、おじさんが出るぞっ、って言ったの。わたし、最初意味が分からなかったわ。でもね、おじさんがそれまで以上に腰を押し付けて、わたしの子宮とおじさんの亀頭がくっついた時に、『あ、来る』って察したの。彼がぶるって身体を震わせて、爪が食い込むくらいお尻を掴んで。そしたらおちんちんが……、びゅる～～っ、びゅるる～～～っ♥　って♥　わたしの膣から溢れそうなくらいの、大量の生の射精、されちゃった……♥」
アルクェイドが遠い目で腰を震わせる。思い出しただけで、軽く絶頂しているらしかった。
「それから5分……もっとかも？　その姿勢のまま、じっとしてたわ。動きたくない……っていうか、動けなかったのかな。わたしもおじさんも、ちょっと受け止められないくらい気持ち良かったんだと思う……♥」
もうアルクェイドは手淫をしてくれていなかった。どうでもよさそうに指先でくりくりと遊ぶだけで、思い出しアクメに酔っている。
「おじさんがおちんちんを抜いたら、ぼたぼたって精液が垂れて来て。それを見たおじさんにまたお尻を叩かれて、『勿体ないだろ』って怒られちゃった。いつもなら八つ裂きにするようなコトなのに、むしろ気

持ち良くって♥　頑張っておまんこを締めて、精液が落ちないようにしたわ」
ふと、アルクェイドが気付いたように手元を見る。
きっと彼女の記憶の中のそれとは同じ器官だとも思えない、粗末なそれ。
俺のチンポを見る視線は、今まで見た事もないような冷たいものだった。
「志貴、まだ続き聞く？　ごめんね、わたしちょっと行きたい所が……、え？　もうちょっとだけでいいから？　……ふうん。まあいいけど。じゃあ次のプレイね。次は、さっきも言った対面座位」
再びアルクェイドが指先だけで手コキを始めた。刺激に飢えていたチンポが悦ぶように跳ねる。
「ベッドに座ったおじさんに引き寄せられて、股を開かれて。おヘソに届きそうなおちんちんの上に跨って……ぴと、っておまんこの入口に亀頭をくっ付けて。初めてわたしの意志で、ずぷぷ～っておちんちんを挿入したわ♥　……だから、これが本当の最初の浮気セックスだったかも♥　あっさり子宮に届いちゃうんだけど、今度はわたしの意志で腰を振るわけでしょ。『ああ、本当に浮気してるんだ、セックスってこんなに気持ち良いコトなんだ』って幸せになりながらのエッチだった♥」
アルクェイドが、激しく俺のチンポを擦る。それは恋人に快楽を与えるというより、さっさと射精させて終わりにしたいという意志しか感じなかった。
「あ、志貴イキそう？　射精しそう？　……丁度いいか、わたしも飽きて来たし。
……そのエッチの何が凄かったかって言うと、そこから。おじさんがひょいってわたしを担ぎ上げて……、立ったままばこばこ腰を突き始めたの♥　駅弁って言うんだって。それがね、本当にやばかった♥
体重がかかるせいでおちんちんの突き上げが凄くってね、子宮の中にまで入って来ちゃった♥　人間の女なら苦しいのかも？　でもわたしはひたすら気持ち良いだけだったなあ……♥　でもね、気持ち良

すぎるっていうのも辛いの。わたしったら途中から泣き叫んでたわ。許して、狂っちゃうって。そこでおじさんがなんて言ったと思う？」

ぶちゅぶちゅと先走り塗れの俺のチンポを扱く音が鳴り響く。射精へ追い込もうと激しく擦られる。

「おじさんはね……、『オレのセフレになれば許してやる』『オレを好きだと言え』って言って来たの。ごめんね志貴。わたし、言っちゃった♥　部屋に響くぐらい絶叫しちゃったよ♥　それに合わせて、彼も射精したの♥　……ここで言ってあげようか？　そろそろ志貴も射精するよね？　……くす。じゃあいくよ？」

すう、とアルクェイドが息を吸う。

俺の耳元で囁くように、

「おじさん、大好きです♥　今日会ったばっかりだけど恋人より好きになっちゃいました♥　あなたのセフレでも肉便器でも愛人でも何でもなります♥　ラブホでも♥　学校でも♥　路地裏でも♥　わたしの部屋のベッドでもいいです♥　抱きたい時に呼んでください♥　おちんちん寂しくなったらパコリに来てください♥　精液溜まってコキ捨てたくなったらアルクェイドを呼んでください♥　あなたが好きです、志貴よりも愛してます♥　あんな恋人落第の粗チンの短小よりもおじさんの極太でかっこいいおちんちんの方が好き♥　好き好き♥　だ～～い好きっ♥♥♥」

――――その追い詰めに、耐えられない。

あっけなく、俺は射精していた。

「……うわ。射精してる、けど。なんかぴゅるぴゅる垂れ流しになるだけで、全然発射って感じじゃないし。量も少ないし、濃さも……。ああ、まあいいや。志貴も満足したよね？　……それじゃね、さっきも言いかけたけど」

ぴっぴっと汚れた手を振りながら、アルクェイドが立ち上がる。

「わたしね、これからおじさんとデートがあるんだ。いつでも呼んでください、って言ったら、じゃあ早速明日来いって♥　一応、志貴に了解を取っておこうと思ったんだけど……、その様子じゃオッケーみたいね♥　寝取られ報告射精、最高だったって顔に書いてあるよ♥」

息を荒くする俺を一瞥して、アルクェイドが出て行こうとする。
と、ドアを開ける直前で振り向いた。
「……あー、そうだ。あのね志貴、これは流石に謝っておかないといけないかなと思うんだけど」
済まなそうに笑いながら、俺の恋人が言う。
「実はね、おじさんに他の女の子たちのコトも喋っちゃったんだ。ほら、志貴って結構モテるでしょ？　あの娘たちのコト。それでね、じゃあそいつらもヤらせろ、って言われちゃって。わたしもう彼の頼みは断れないし、もしかしたら、ちょーっと力ずくで色々しちゃうかも知れないんだけど……」
彼女の言葉に、視界が黒くなる。
俺の甘美な暗闇は、まだ晴れないようだった。

# 埋葬者の被食

「――うん、美味しく点てられました。やっぱり一人でやるより相手がいた方が身が入りますね」

そう言ってシエル先輩は俺にお茶を差し出した。

昼過ぎの部屋に窓から日が差し込んでいる。

ここは先輩が生徒会やら先生やらに掛け合って整備して頂いた茶道部室だ。どうも噂に依れば先輩があくどい手を使ってここを手にいれたらしい。以前先輩に確かめてみたら『ただちょっと用途の分からない生徒会予算や先生方の不倫関係を突っついたらあちらからご用意してくれただけに過ぎません』とか何とか言っていた。

授業後、ここでお茶を点てるのが俺と先輩の日課になっていた。

畳のいぐさの匂いを嗅ぎながら、心を鎮めてお茶を点て、ゆっくり味わう。そうすると余計な雑念が消えていく気がする。この部室自体も、生徒の多い本校舎から少し離れた所にあるのでちょっとした隠れ家のようになっていた。

「あら遠野くん、もう飲んじゃったんですか。いける口ですね。でもお抹茶は少しずつ味わうものですよ？」

とは言いながらも、先輩は代わりの抹茶を俺のお椀に注いでくれる。

目を伏せ、お淑やかに茶筅で抹茶を混ぜる先輩に見とれてしまう。

実際、先輩はとんでもなくもてる。外国譲りの顔は目鼻立ちがくっきり整っていて視線を惹き付ける。手足も長いし、制服を押し上げる胸元は巨乳と言って差し支えないだろう。そしてその胸よりも大きなお尻。体育で体操着の時など、同じクラスはおろか校舎にいる男子生徒まで汗を散らして運動する先輩を見ようと窓際にへばりつくぐらいだ。

「あら、お茶請けがなくなっちゃいました。新しいの出しますね。ええっと」

後ろを向いて膝をつき、棚の中のお茶請けを探す先輩。

お尻が突き出される格好になって、ゆらゆら揺れるスカートが艶か

しい。ちらりと見えたショーツは先輩らしい純白。そこから延びる太股も、むっちりと肉付きよく男子生徒の目を釘付けにする。
先輩を恋人にしたい男はこの学校に数多いるだろう。告白を受けたことも何回もあるらしい。とはいえ一度も靡いたことはないようだったけれど。
俺は、といえば。先輩とは、何度か体を重ねた関係だ。ひょんなことから出会い、仲を深めた。そういう関係になるまでに時間はそう掛からなかった。
「はいっ、お待たせしました。今日はカステラにしましょうか。苦味の強い抹茶によく合うんですよ」
カットされたカステラを置いた小皿を差し出される。
礼を言って、抹茶を一口含んでからカステラを食べようとする――と。
「くすっ。せっかくですし、わたしが遠野くんに食べさせてあげますよ。ほら、あーん」
爪楊枝に刺さったカステラを突き出され、むぅ、と言葉に詰まる。
思いっきり年下扱いで、正直に言って恥ずかしい。恥ずかしいのだけど――これも役得、というやつかもしれない。甘んじて受けることにして、ぱくりと頬張る。
瞬間、甘味が口のなかに広がった。先輩の言う通り、確かに苦さと甘さがお互いを引き立てていてより美味しく感じる。以前はこの美味しさも知らなかった。先輩との交流のなかで知れたことの一つだ。
「美味しいですか？　もう、赤くなっちゃって。遠野くんてば可愛い所あるんですから」
からかうように言われてしまう。
むず痒い思いだが、やられっぱなしというのも悔しいので反撃してみる。
「ふぇ……っ、次はわたしに、ですか？　いえいえ、じぶんで食べられますので……え、お返し？
……もう。遠野くん、いじわるです」
頬を赤らめた先輩が、ぱかりと口を開ける。

目を閉じ口内を露にする格好は幼ささえ感じられるというのに、先輩がするとなるとそこはかとない淫靡さが滲み出てしまう。先輩が抜群のスタイルを備えた美少女だからか、はたまた俺の煩悩故か。そんなことを考えているうちに先輩が俺の差し出したカステラを咥えていた。

もぐもぐ、と咀嚼して味わう。恥ずかしげだった表情は甘さに蕩けた顔に。一息に飲み干して、ぷは、と恍惚のため息をついた。

「ん～っ、あまぁい……！　やっぱり苦いものと甘いものは合いますねっ。それに……ふふ、遠野くんが食べさせてくれたから、っていうのもあるかな？」

――いたずらっぽく言う先輩と顔を見合わせて笑う。

放課後の昼下がりは、そんな風にして過ぎていった。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「はい。どうぞごゆっくり」

茶道部室を出てお手洗いに行く遠野くんを、わたしは手を振って見送りました。

こくり、とお抹茶を一口。快い苦味が広がります。

茶道を始めたのは、死徒を追うためこの学校に潜入してからのこと。

最初はただ部室がありながら他に部員がおらず隠れ蓑に持ってこいだったからですが、体裁だけでも整えておこうと思い茶道の勉強をし始めたら嵌まってしまいました。最近はほとんど毎日、放課後はここに来ています。

最初は面食らったお抹茶の味もすっかり慣れ、今では飲むと落ち着くくらい。作法が決まっているのも心を落ち着かせるのに最適です。

「……こくり。はぁ……、落ち着く……」

わたしの故郷である仏国は珈琲がよく飲まれます。苦味には耐性があるので、お茶を受け入れられたのもそのせいかも知れません。そういうのを抜かしても、わたしはお抹茶が好みでした。もう珈琲より

もしっくり来るんじゃないかと思うくらい。
はふ、と一息ついてふと窓を見ると、プールで練習に励む水泳部員たちが目につきました。この茶道部室からは見下ろすようにしてプールの中が覗けます。そういえば、大会が近いとクラスメイトが話していたような。皆それぞれのフォームで泳いでいます。人数は30人前後でしょうか。男子と女子で半々といったところ。
「……」
少し、観察してしまいました。
最近、スクール水着の露出やデザインを抑えようという流れがあると聞きますが、うちの学校の水着はそれに反するように露出が多め。その理由は分かりませんが、発育のいい女子なら歩くたびに乳房が揺れてしまうくらい。なので、男子からは評判がよく、女子からはその逆だったりします。
とはいえ。もちろんわたしは女子の水着などに興味はありません。
ありませんが――
「……、いない」
ぼそり、と呟く。
わたしが見ているのは、否。探しているのは生徒ではありません。生徒以外であそこにいるべき人物。彼らを指導していて然るべきひと。
飛び込み台の近く。……いない。
監視員席。……いない。
もしかしてプールのなかに？　……やっぱりいない。
どう見たってプール場にはいません。
ならば――あそこにいなければ、『彼』はどこに行くでしょう。
そこまで思考が巡ったとき――
ガラリ、と。部室のドアが開きました。
「……っ、早かった、ですね、遠野くん――」
唾を飲み込みながら振り返ります。
心のどこかで、遠野くんではないと分かっていながら。

思った通り。それは、わたしの恋する少年ではありませんでした。

どすんどすんと、大柄な身体を揺らしながら彼は近付いて来ます。お世辞にも容姿に恵まれたとは言えない中年男。体育教師だというのにでっぷり膨らんだビール腹。

彼は、この学校の体育教師。ついさっきまでプールにいたのか、シャツの裾が少し濡れています。

そう。彼は、水泳部のコーチでもありました。

ちなみに評判は最悪。昔水泳をやっていたようで指導はそれなりらしいですが、男子の練習は手抜きする上、女子は厭らしい目付きで見回すやら胸や太股を触ってセクハラしてくるやらでどうしようもないらしいです。部員全員に嫌われているのに水泳部コーチにしがみついているのも水着姿の女子が見たいからというもっぱらの噂。とにかく良い話を聞かない男です。

「……あの、先生？　ここ、茶道部ですが。場所を間違えていませんか？　というか、いま部活動中ですよね？　早く帰られた方が」

どきんどきん。

心臓が早鐘を打つのを隠しながら、冷静なフリで彼に言います。

下卑た嗤い。今さらなに言ってるんだ、おまえ――とわたしの言葉など無視して。

先生は、自分のハーフパンツをずり下ろしました。

「――――っ、は」

どっっっ……くん、と。痛いくらいに激しい動悸。

脛も内腿も体毛にまみれた彼の下半身。

その中央。ボクサーパンツに包まれた股間が、もっこりと膨らんでいます。

なんて、汚ならしい。膨らんだその頂点は、内側から漏れた先走り汁でシミが広がっていました。

「なに、を……穢らわしい、この変態っ、近寄らないで……」

気丈に言おうとするのに、竦み上がった気管支が震えて声が掠れてしまいます。

こんな人間。わたしがその気になれば瞬きする前に殺してしまえるというのに、調教された犬が飼い主に逆らえないように、微動だに出来ません。

そのまま先生は歩みを進め、土足で畳を踏み荒し。

わたしの頭をつかんで――むぎゅうう、と、顔面を股間に押し当てました。

「――――っぐう、お!?　おおおお……ッッ」

パンツの中で。先生のモノは、しっかりと勃起していました。

布に押さえ付けられ上向きに反り上がったモノの幹の部分が、わたしの鼻面に擦り付けられます。熱く、硬い。ひどい熱で、眼鏡が曇ってしまいそう。

ぐりぐりと顔に股間をくっつけられながら、ゆっくりと下へずらされます。やがてわたしの鼻先が、彼の陰嚢――キンタマ袋に密着しました。

「ふぐぅぅぅぅ……っ!!　やめ、匂いすごっ……」

股間の中でももっとも淫臭が溜まった部分と鼻腔が密着し、布越しだというのに激烈な臭気が脳天に直撃しました。目が潤んで息が荒くなり、そのせいでまた臭いを吸い込んでしまいます。

――彼に初めて犯されたのは、一月ほど前のこと。

押し倒され、その剛直で一晩犯し抜かれ、気が付けば小便を漏らして失神していました。

その後も定期的に犯されたわたしは、いつの間にか彼に逆らうことが出来ないまでに躾けられてしまいました。

もちろん、彼のような一般人に手篭めにされるほど柔ではありません。ありません、が、彼どころか、わたしよりも遥かに格上の存在が味方に付いていたとなれば話は別。

アルクェイド・ブリュンスタッド。

真祖の姫君であり、この世で最上位に属する吸血姫。

誰が予想したでしょう。遠野くんの恋人でもあるはずの彼女が、こんな小物の情婦に堕しているだなんて。

わたしとアルクェイドはよく衝突し、まるで喧嘩友達のような間柄

になっていますが、それはじゃれあいのようなもの。一たび彼女が本気を出せば、わたしなど赤子の手を捻るが同然です。
彼との快楽の為、奉仕の為。新しい女を引き込もうとしたアルクェイドにとって最も手近な存在がわたしでした。アルクェイドに拘束され、何度も彼にレイプされたわたしは、いつしかアルクェイドなしでも彼に逆らえなくなっていたのです。
「なんで突然ここに……す、水泳部の女子を見て？　こ、この屑っ」
簡単な話。水着姿の女子が胸を揺らしているのを見て肉棒を甘勃起させた先生は、その股間を膨らませたまま、すぐ近くにいるわたしという便器で性欲を処理しに来たという訳です。
「なんでわたしに、アルクェイドを呼べば飛んでくるでしょう！　は、わたしで抜く気分だった？　さ、最低っ、最悪ですっ」
喚くわたしに先生は気を払いません。
そればかりか、ずるりとボクサーパンツも下ろしきり、完全に下半身を露出させました。
ぼろん、と跳ね出てきたモノ。勢いよく眼鏡にぶつかったそれは、ぶちゅりと先走りをレンズに引っ掛けました。
「お……っ、ひ……き、気持ち悪い気持ち悪いっ！　そんなモノわたしに見せないでくださいっ……」
ぴっとりと額に乗っけられたモノ。縦にすればわたしの顔より長さがあるだろう並外れた勃起。
さんざん調教され勃起を見ただけで反応する身体を抑え、振り払おうとします。
でも。ぺちんぺちんと勃起で顔面をはたかれ、わたしの威勢は一瞬で霧散してしまいました。
「わぷっ、ひゃ……！　え、言い方がちがう？　……っ、ち、ちんぽ……。先生のちんぽ、怖いからわたしの顔にくっつけないでください……っ」
勃起で――ちんぽで、馬に鞭を入れるみたいに躾けられます。
その効果は、さっきまでとは比較になりません。パンツの上からでも竦んでしまったのです。生ちんぽに顔面を叩かれてしまっては、腰

が抜けてしまうというもの。魔力を巡らせば人外の腕力を発揮できるはずの身体は、もう背筋を伸ばしているのも辛いほどです。
「ふぶぇっ、おぶっ！　嫌、わたしの顔でちんぽ擦らないで……！　水着の女の子たちを見て勃起したちんぽ、都合よく従順だからってわたしで発散しないでぇっ」
ずりずりと裏筋を顔に擦り付けられ、唇がめくれ上がってしまいます。
姿勢は正座のまま。がに股の先生に、好き勝手に生徒の水着で興奮したちんぽの性処理便器と化したわたしは、ろくな抵抗も出来ず受け入れるしかありません。
わたしの整った顔を蹂躙するのに昂ったか、ちんぽから先走り汁が溢れます。亀頭を使って汁を塗り広げられ、顔面はべたべた。乾けばがびがびの酷いことになるでしょう。
気の済むまで顔コキされたあと。先生がちんぽを離すと、ぬぽ、と顔と竿で糸が引きました。とろとろの粘液は、わたしの胸元に落ちて染みをつくります。
「はあっ、はあ……。つ、次は何を……え？　窓に……」
窓に手を当てて、背を向けろと命じられ、ふらふらと立ち上がります。言われた通りに手をつくと、さっき見下ろしていたプールが目に入りました。
腰を突き出す体勢になったわたしのスカートを先生がめくります。相変わらずデカいケツだな、と言いながら丸出しになったお尻を先生は執拗に揉みしだきました。
「す、好きで大きくなったんじゃありませんっ！　んんッ」
円形を捏ね回すように、手のひら全体でお尻を掴む先生。
自分で言うのも何ですが、確かにわたしのお尻は大きく、柔らかいです。今も先生の指が沈み込んでしまっているくらい。先生が指に力を入れるとむにゅりと潰れ、軽く持ち上げて落とすとぶるんと揺れます。
その様子が興奮を誘うのでしょう。先生は息を荒げながらわたしのお尻を滅茶苦茶にします。

「やめてください、遠野くんが帰って来ちゃいます。見られちゃいますから……」
わたしと先生の関係は、遠野くんには秘密。たぶんアルクェイドのことなどから勘づかれてはいるのでしょうが、とにかくわたしは秘密にしています。
だから、こんな所を見られる訳にはいきません。もし見られてしまえば、遠野くんとの関係は終わってしまうでしょう。
だと言うのに、先生はわたしの言葉を聞き入れてはくれません。それどころか、ショーツをずり下ろしてわたしの股間を露にします。
性器が外気に触れ、ひんやりとした感触。
いや、涼しさはそれだけではなく。愛液が糸を引いているぞと、先生に笑われました。
「う……っ、うるさいっ……！　これはっ、生理現象です。貴方に触れられたから……ひゃぁっ」
ぱちぃん、という打擲音。
口答えしたのが燗に触ったのでしょう。先生は隠すもののなくなったわたしの下半身を平手打ちしました。
ひとつ打つたびにぶるんと揺れる脂肪の塊。それが面白かったのか、興奮を誘ったのか。左右の尻たぶを何度も張られます。
「あぁっ♥？　嫌ぁ♥？　叩かないでっ♥？　そんなに強く叩かれたらっ、あそこに響いちゃいますっ♥？」
声に甘い色が混じるのを隠せません。先生に叩かれると振動が股間に伝わり、ただでさえ発情した性器が目を覚ましてしまいます。
ねっとりした粘液が股間から垂れ、内腿を濡らして膝裏のあたりまで。先生に敗北済の身体は、こんな暴力的な行為でも興奮してしまうようでした。
ひとしきり叩いた先生が手を止めても、お尻は熱いまま。自分からでは見えませんが、きっと真っ赤に腫れてしまったことでしょう。
「はーっ♥？　はぁーっ♥？　も、もうこれで満足……っひ!?」
勿論。これで先生からのセクハラが終わるはずもありません。
秘裂にぬちゅりとした感触。女陰をこじ開ける、力強い太さ。わた

しを屈服させた肉槍。
気付いた時にはもう手遅れ。先生のちんぽが、侵入を開始しました。
ずぶぶぅぅ……っ♥？　ぐぐぐぐぐっ♥？
「う〝、お〝、お〝、お〝、お〝、……っ!?♥？♥？　おっぎぃっ♥？♥？
あそこ広げられてっ……♥？♥？　先生ちんぽ挿ってくるっ♥？♥？」
――規格外の、先生のちんぽ。
遠野くんとは格の違う、カリ高ごん太の巨根ちんぽ……♥？♥？♥？
遠野くんと身体を重ねた時には一回だって感じたことのない、マンコを無理やり拡張されて膣壁を抉られ、奥まで蹂躙される快感♥？♥？　魔術師だろうが埋葬者だろうが関係なく、わたしは子宮を備えたメスなんだと自覚させられてしまう挿入……♥？♥？
「ほぉぉぉ〜〜っ♥？　おっ奥っ、遠野くんじゃ届かなかったとこっ♥？　先生のちんぽで潰されてるぅ♥？♥？」
メスの一番弱いところ、子宮口♥？　わたしのポルチオ♥？
遠野くんのちんぽじゃ先っぽが掠りもしなかった所を押し上げられて、滑稽なメス声が漏れてしまいます♥？
「あっ♥？　あっ♥？　あっ♥？　あっ♥？　先生のちんぽ強すぎますっ♥？」
そのまま、ぱんっ♥？　ぱんっ♥？　とピストンを喰らわされます。
その動きは、明らかに自分の射精だけを見定めたもの。わたしのことなんて何も考えないバックハメ♥？　自分の指導する女生徒たちを見て勃起したちんぽをただわたしでスッキリさせたいというだけの、わたしのマンコを使った膣コキオナニーのようなもの……♥？
なんて酷いのでしょう。でも、こんな便器扱いだというのに♥？
わたしは遠野くんとの優しい性交より遥かに強い快感を味わってしまっています♥？
ああ、アルクェイドの気持ちも分かります……♥？　こんなことを

体感させられてしまったら、誰だって思ってしまいます♥？
『遠野くんでいいのかな』って♥？
『女として満たしてくれる相手が他にいるのに、本当にいいのかな』って♥？♥？
「あんっ♥？　あっ♥？　あ゛っ♥？　あぁぁぁっっ♥？♥？」
ごっちゅん♥？　ごっちゅん♥？
ぐりぐり～っ♥？　ぐっぐっ♥？
身体が浮きそうなくらいに子宮を突き上げるエグいピストン♥？
わたしの体重を使った子宮口抉り♥？　出来るだけちんぽで膣を味わおうという腰使い♥？
ぜんぶぜんぶ、遠野くんのちんぽじゃ出来ない性技♥？　先生のちんぽだから出来る、わたしのマンコの虐待……♥？
「やっぱぁっ……♥？　こうやってアルクェイドも堕としたんですかっ♥？　そりゃわたしなんて一溜まりもないに決まってますっ♥？　あの真祖が惚れちゃうちんぽなんて、わたしが敵うはずないですもの……♥？♥？」
べちん、べちんと先生の弛んだ腹が叩きつけられます♥？　校内一の女子の嫌われもの、風俗に行ったって嬢が顔をしかめそうな先生♥？　なのにちんぽが優れてるってだけで真祖の吸血姫と埋葬者を喰えるんですから、どれだけちんぽがオスにとって大事か分かります♥？　わたしたちと遠野くんの出会いとか、積み重ねとか……♥？　そんなのこのちんぽでお腹をほじられる感覚に比べればどうでもいいことなんだって分かってしまいます♥？♥？
「おっ♥？　おっ♥？　し、潮吹くなって……無理言わないでください♥？　じゃあ先生もちょっとちんぽ手加減してくださいっ♥？　ちんぽで虐めすぎなんですよぅ♥？♥？」
手を伸ばした先生にたぷたぷと胸を揉まれながら、洪水みたいになったマンコを笑われます。でも仕方ありません。そんなこと言われたって、勝手に吹き出しちゃうんですから♥？
「……え？　遠野くん帰って来ないなって……？　あ、そう言えば忘れてました♥？　きょ、今日は遠野くんとお茶してたんでしたっけ

……♥？」
言われてみれば、もうとっくに帰ってきてもいいはず。でも一向に戻ってくる気配はありません。
――でも、まあ、
「そんなの今はどうでも良いですから♥？　ぶっちゃけ今来られたら邪魔ですもん♥？　いいから先生のちんぽスッキリさせちゃってください♥？　たぶんどこかで道草くってるんです♥？　溜まった先生の精液、早くくださぁい♥？」
こんなこと、最初は言えませんでした。ただセックスが強いだけの相手に、遠野くんへの想いが壊されるとも思っていませんでした。
だけど、ゆっくり、着実に……♥？　先生に犯されるたびに、遠野くんじゃ届かない所を潰されるたびに♥？　少しずつ、変わっていくのが分かります♥？　気が合うとか……恋愛感情とか……♥？　そんなのとは別次元のものに塗り潰されていくのが……♥？
「っあ♥？　あぅっ♥？　先生のピストン強い～っ♥？」
先生も射精が近いのでしょう。膣コキの速度が上がっていきます。
どちゅっっ♥？♥？
「おごっ♥？」
ぶちゅん♥？♥？
「あっぎぃぃ♥？」
ばちゅっ♥？ずちゅっ♥？ぶちゅっ♥？
「おっほぉぉっ♥？♥？」
窓に映るわたしは、二目と見れない間抜け面。寄り目で唇を尖らせ涎を垂れ流しにした、死徒との戦いでも晒したとこのない無様で気の抜けた敗北顔です。
「先生のちんぽ♥？♥？　わたしの子宮口こじ開けて中まで入っちゃってる～っ♥？♥？　孕ませる気なんですか♥？　戦いが仕事のわたしのこと♥？　腹ボテにして女として支配して♥？♥？　子供を産むのがメスの仕事だって教え込むつもりなんですかぁ♥？♥？」
先生のことです。実際は犯すついでに孕ませるのもありだな、とい

う感じなんでしょう。
だけど、それなのに。先生の子を孕むかもと思うと、恐怖と嫌悪と、それを上回るくらいの興奮で膝が震えてしまいます。
先生がわたしのお尻をがっちりと掴みました。跡が残りそうなほど爪を立てて、絶対に逃がさないとわたしを捕まえます。
わたしの柔らかなお尻と、先生の下腹部。肉と肉がぴったり密着して。
――びゅる、びゅるるるるっ♥？♥？
「っひあああぁぁぁ♥？♥？　奥で出てるっ♥？　先生の精液、わたしのおまんこに生で出されちゃってる♥？♥？」
ぶびゅっ♥？♥？　どぴゅどぴゅっ♥？♥？
「っっお゛!??　♥？♥？」
どぷっ♥？　どぷどぷどぷっ♥？
「あぐぅぅぅ!?♥？♥？　ま、まだっ♥？♥？」
ぶびゅぅぅぅっ♥？　びゅっびゅっ♥？　びゅるる～～っ♥？♥？
「ひぎぃぃぃぃっっ♥？♥？　そんなに出されたらっ♥？　イク♥？　イクイク♥？　イッグゥぅぅぅぅ♥？♥？　精液あっついぃ♥？♥？　お腹たぷたぷになっちゃいます♥？♥？　ぐぅぉおおお～～っ……♥？♥？」
遠野くんの何倍も粘っこい……♥？　量も質も遥かに上の特濃ザーメン♥？　どろどろでゼリーみたいで♥？　子宮に詰め込まれたらもう出てきません♥？　わたしの卵子を好き勝手レイプし尽くすまで居座りっぱなしの白濁粘液……♥？
先生の射精は長く、一分以上続きます♥？　女生徒へのセクハラで勃起したちんぽのイライラを、制服姿のわたしで解消するのはさぞかし快感なのでしょう……♥？　わたしの首筋をべろべろと唾液で汚して髪の匂いを嗅ぎながら、先生は腰を揺すって最後の一滴までわたしの膣内へコキ捨てます……♥？　ぬぱ♥？　ぬぱ♥？　と軽くピストンされるだけでも甘イキに喘ぐわたしを満足げに見下ろして、オスとしての優越感に満たされた射精……♥？

最後はぴっぴっと、立ちションの最後みたいに精液を吐き捨てて♥？　先生はわたしのレイプを終えました……♥？♥？
「はっ♥？　はっ♥？　はっ♥？　こっ、腰抜けちゃう……♥？　え……お、お礼っ……♥？」
先生は、犯してやったお礼を言え、と言います。
強姦した相手に礼をさせるなんて、信じられない鬼畜です。
でも、言わざるを得ません……♥？　わたしはすっかり先生に躾けられてしまいましたし……♥？
なにより♥？　先生のレイプでイキ狂わされたのも本当なんですから♥？
「先生、今日は……水着の女の子でムラムラしてしまった性欲、このシエルにぶつけてくださってありがとうございました♥？♥？　さ、最初は生意気な態度を取ってしまい、申し訳ありません♥？♥？　……え？　そのおかげでレイプに身が入った？　そ、それは良かったです……♥？♥？　これからもきっと、先生に敵わないクセに楯突くかも知れませんので♥？♥？　その時は今日みたいに、ちんぽで負かしちゃってくださいね♥？♥？♥？」
にっこり、と。先生のちんぽに詰まった残り汁を眼鏡で拭われながら。
わたしは蕩けた顔で、ちんぽに媚っ媚の敗北宣言を述べました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「あっ、おかえりなさい遠野くん。ずいぶんと遅かったですね」
俺が部室に戻ると、出た時と変わらない様子で先輩が出迎えてくれた。
時計を見れば、あれから一時間近く経っている。もう日差しは傾いて、夕暮れ時だった。
もう帰ってしまったかもと思ったのだが、そこは優しいシエル先輩のこと。ずっと待ってくれていたらしい。
「何かあったんですか？　……ああ、有彦くんに捕まって。それは災

難でしたね」
くすくす、と笑う先輩。
……何故だろう。ふと、違和感があった。
よく見れば――変わらないと思った先輩の制服の胸元に、薄く染みがあるような気がする。
「さて、そろそろお開きにしましょうか。……あ、ごめんなさい。そういえば、後でこれを飲めと言われてたんでした」
言って、先輩は茶碗を手に取る。
先輩とは少し距離がある。だから、その中に何が入っているか、はっきりとは見えなかったが――何故か、さっきまでの抹茶ではない気がした。
「まずはカステラを食べて……と。もぐ、むぐ……ごくん。
では、次は……こ、こちら……♥？」
頬を赤らめている――ように見える先輩が、茶碗を口許に当てる。
そして、ゆっくりと傾けた。
「ず……ずずずずっ♥？　ずずっ♥？　ずず～～っ♥？
けほ、こほっ♥？　すご……粘っこくて飲み下せない……♥？」
熱いから、だろうか。先輩は、少し下品なくらいに啜りながら、液体を飲んでいく。
「じゅるるるる♥？　ずびっ♥？　くちゅくちゅ……♥？　なにこれ、ダマになってるし、味も……♥？　カステラのせいで……♥？
苦さも生臭さも余計にっ……♥？」
先輩は苦戦しながら嚥下していく。
眉を潜めっぱなしの表情だが、それは決して不味いという訳ではなく――その液体のクセが強すぎるから、のように見える。
「こく、こくっ……ぶはぁっ♥？　はーっ、はーっ♥？　あれだけ、わたしに……たのに……、なんでまだこんなに出せるんですか……♥？
ほんとに……底無しの、ちん……♥？」
どうにか全てを胃に納めた先輩が、ぶつぶつと何かを呟く。
唇をぺろりと舐めてから、茶碗を下ろした。
「ふは……♥？　お待たせしました遠野くん。それでは帰りま

……、っぷ、ぁ、ごめんなさい。ちょっとさっき飲んだのが……上って来ちゃっ……、んぐぇっぷ♥？　……ぐぶっ、ごぇぇぇぇぇッ♥？　ごげぇぇぇッ♥？　げふっ♥？　……あ、あは、すいません、はしたないところ見せちゃって。今日はいっぱいお茶飲んじゃったからかな？　じゃあ、今度こそ帰りましょうか。そうだ、良かったらわたしの部屋に寄っていきます？　昨日作ったカレーがまだ残ってまして、自信作だからどうかなーって。お野菜が多めに入ったカレーで、遠野くんの不安定な身体にも良いかなって」

いつもと同じ笑顔。

だけど夕陽に照らされた先輩は、明らかに以前とは違っていた。

# 鬼妹、孕む

「――――はあ。本当に兄さんと乾さんは仲がよろしいんですね」

私は、悪友のように言い争う兄さんと乾さんにそう言った。

お昼時、午前の授業が終わった昼休みである。他のクラスメイトがそうであるように、私も仲の良い方たちと昼食を摂っていた。私、兄さん、兄さんのお友達の乾さん。恒例になった、いつも学園の中庭で昼食をとる面子だ。

私――遠野秋葉は、とある理由で浅上女学院からこの学校へ転入してきた。

理由、と言っても込み入ったものじゃない。ただ単に、私の想い人である兄さんと、少しでも長く一緒の時間を過ごしたいと思ったからだ。

どうせ一緒の家に住んでいるじゃないか――などという反駁は通用しない。

なぜなら、兄さんはもてる。それもとびっきりの魅力的な女の子たちに。

だから、これは監視の意味合いもある。兄さんを一人でふらふらさせていたらどこへ行くか分かったものじゃない。ならば私が直々にお目付け役になってしまおう、という訳だ。

そういう事情で、学校にいる間は出来るだけ兄さんと行動を共にしている。お昼を一緒するのもその一環。授業中ならいざ知らず、お昼休みはアルクェイドさんなんかが寄って来ないとも限らないし、その予防をしているのである。

「まったく……。食事中なのに騒がしいんですから」

呆れたように言って、溜め息。

少し、気分が重い。

以前なら兄さんと食事を取れるっていうだけで心が弾んでいたのに、今は胸の中にしこりがある。素直に団欒を楽しめない厄介な事情が。

なぜかと言うと――

「ああ、秋葉さん。やっぱりここにいらっしゃいましたか」
「っ……シエル先輩」
とんとん、と肩を叩かれる。
振り向くと、そこには今は私の先輩でもある、シエル先輩がいた。
思わず目を細めて睨み付ける私に対し、先輩は微笑みを崩さない。
ちょいちょい、と指先で招かれる。二人で話したいということだろう。
兄さんと乾さんからは物陰になっていてシエル先輩の姿は見えない。二人に先に教室へ戻ると断ってから、私は先輩の背中を追った。

「……ちょっと、どこまで行くんです？」
「もうすぐ着きますよ」
シエル先輩は校舎に入り、廊下を歩いて階段を上っていく。
先輩の教室とか、職員室とかじゃない。校舎の外れ、特別教室ばかりであまり人気がない辺りだ。
数分歩いて、先輩は一つのドアの前で立ち止まった。ドアの上の掛札には『茶道部』とある。
「はい、ここです。茶道部室。今日はここでよろしくお願いします。今か今かと秋葉さんをお待ちですよ」
「――――、っ……！」
言われ、息が詰まる。
そうだろうと思ってはいたけど、実際に扉一枚隔てた前へ来ると足がすくんでしまう。
逃げ出したい。いや、そもそも嫌ならこんな所まで従順に着いて来なければ良いのだ。
でも出来ない。頭で嫌がっても体が言うことを聞かない。そういう風にさせられてしまった。
そしてまた、今日も。
「それじゃあ恒例の『あれ』、掛けておきましょうか。秋葉さんの不安を失くして差し上げます。ほら、わたしの眼を見て」

「あ――――」
きぃぃん、という音。
頬を手で包まれ、至近距離で合わせられた先輩の眼が妖しく光る。
それと同時に、私の心の不安が取り払われていく。罪悪感とか、嫌悪感といったものが薄くなって。
どきどき、と。まるで期待しているかのように、鼓動が早くなっていく――。
「はあっ……は、ぁ……」
「ふふっ。可愛い顔になっちゃいましたね、秋葉さん。
さて、それじゃあわたしの仕事はここまでです。後は二人で、ゆっくり……ね？」
軽く背中を押され、ドアの前へ押し出される。
震え、汗ばんだ手でドアノブを回す。
室内に入り、後ろ手にドアを閉め、俯いた視線を上げる――と。
「んぶ、んんっ!? ちゅっ、ぶちゅぶちゅぶちゅ♡♡ むちゅっ♡♡
れろぉ……っ♡♡」
――私を待ち構えていた、豚のような男に唇を貪られた。
私より一回り、いや二回りは大柄な男に抱き着かれる。がっちり回された両腕は背中に。二の腕が汗ばんだ彼のシャツに触れて気持ち悪い。少しでも私と密着したいとでも言いたげな、みっともない抱擁。
がたん、と勢い余って私の背中をドアに押さえ付けても彼は口付けをやめない。むしろ力ずくで乱暴しているのを楽しむかのように両腕に込めた力を強くする。
彼は、この学校の教員。生徒を守り、指導する立場にあるはずの男だ。
とはいえどんな職業にも犯罪者はいるように、教員がみな清廉潔白な人格というわけじゃない。
まあ、それでもここまでの汚物はそうはいないだろう。なんせ、自分が落とした女生徒に糸を引かせ、私という新たな獲物を喰らおうというのだから。

「じゅるるる……ぶはあっ！　はぁっ……ひ!?　やめっ、ひゃぁぁんっ!?♡♡」
唇を離したのも束の間、今度は制服の上から身体に手を這わせられる。
おぞましいはずの感触。だと言うのに私の口から甘い声が漏れてしまう。
これは……シエル先輩のせいだ。
一週間ほど前。まだ何も知らなかった私は、同じようにシエル先輩に誘われ連れて行かれた。その時は人の寄り付かない校舎裏だった。
そこで、さっきやられたように何らかの術をかけられたのだ。
あれは、おそらく『魅了』。
先輩は魔術師だ。それも、とびきり秀でた力量の。
魔術には詳しくないけれど、中には人の心を操り誘導させるものもあると聞く。先輩は、私にそれをかけたのだろう。
「あっ♡　はぁっ♡　くっ、この汚物……！　手を離しなさいっ、あ♡」
『魅了』の効果は覿面だ。この男に触られるだけて、身体が熱を持つ。鼻を摘まみたくなるような中年男の体臭に下腹がきゅんきゅんと反応し、唾液を飲ませられれば内臓が酒精を取り込んだように熱くなる。
私の『略奪』の能力でこの男を、と思っても一歩を踏み出せない。躊躇している間に心と身体を手玉に取られてしまう。
ふぅふぅ、と生臭い息が首筋にかかる。お嬢様学校から転校してきた財閥の娘にセクハラするのに興奮しているのか。仮にも聖職に携わる者とは思えない性欲剥き出しの様子だ。
くたくたになってしまった私を彼は部屋の奥へと連れていく。畳の上の座椅子に彼が座った。
「う、ぁ……♡　ちょっと、何でもうこんな……♡」
手を取られ、彼の股間に押し当てられる。
そこは、はっきり見て分かるほどに盛り上がっていた。もっこり隆起した膨らみを触るとより実感出来る、暴力的な大きさ。指先に触れ

ただけで身が竦みそうになる、オスの威圧感。
――取り出してみろ、と言われ、私はろくに抵抗もせず、ジッパーを摘まんだ。
嫌悪感を抑え反抗心を削り、従順にする。これも『魅了』の効果。私を縛る鎖だ。
ジジジジ……と下ろしていって。下着の間から、醜悪な肉塊が顔を覗かせた。
「お……、ふっ……♡」
咄嗟に口許を押さえる。
それでも止めることが出来ずに。分泌された唾液の塊がぼたぼたと溢れ落ちた。
彼のモノはどす黒く淫水焼けして、その２０センチを超えようという長身を黒光りさせている。反り返った刀身には蔦が巻くように血管が走る。赤子の拳かと見間違えんばかりに膨れた亀頭。その傘はおぞましく開き、『膣を掘削する』という原始的な役目を十分過ぎるほど果たすだろう。太い幹の根本、最下部には巾着のような玉袋が二つ。一体どれほどの精子が詰まっているのか分からないほど。
目が、皿のようだ。瞳孔が開ききって視線を外せない。
……そう、初めての日。私がシエル先輩の罠に嵌まり、この男に最初に襲われた日。
『魅了』をかけられ、まず眼前に突き出されたのがこの性器だった。それも『魅了』の効果の内だったのだろう、私は一目でコレに魅入られてしまったのだ。ばくばくと跳ね回る心臓――それこそ兄さんとの行為のときより遥かに上の、異常な興奮を得た私は、コレで喉奥まで貫かれた。頭を掴まれ口を犯され、最後には夥しい量のザーメンを飲まされた。
それが、私の中に楔を打ってしまったようだ。
舌が焼けそうな熱さ。喉を拡げる太さ。そしてずっしり胃を重くしたザーメン。
思い出すまでもなく甦る、身体に刻み付けられた感触。到底忘れることの出来ないオスの暴力。

今では、コレを見せられただけで腰が抜けるほど。私の女としての部分は、初回のイラマチオですっかり叩き潰されてしまったのだ。

「はっ♡　はっ♡　はっ……♡　どっ、どうせ舐めさせるん、でしょう♡　分かってる、分かってるんだから……っ♡」

彼が足を投げ出して座っている座椅子は低く、私が膝立ちになっても上手くモノを舐められない。

必然、地面に這いつくばるような格好になる。性行為を迫られている側なのにこれではまるで私ががっついているかのようだ。つくづく、『魅了』とは恐ろしい――などと思いながら、舌を伸ばす。

「べちゃ……っ♡♡　ねろ、ぬるるるっ♡♡　は、熱……♡♡　れろぉ～～っ♡♡」

舌に――どころか、顔面にむわりとした熱気を感じる。

文字通り怒り狂っているような怒張を、鎮まってくださいと願うように柔らかな舌で舐め上げていく。でも逆効果だ。私の舌が触れた途端、勃起はより熱さ硬さを増し、更に反り返っていくのだから。

「ち、ちょっといい加減に……♡♡　これ以上大きくしないでっ♡♡　限度ってものがあるでしょうが……♡♡」

口では文句を言いながらも身体の芯が怯えている。本能的に、分かる。コレは規格外のオスの持ち物であり、私というメスを捻り潰すモノだと。

何より――私は比較対象を知っている。……いや、知ってしまっている。

だからより、コレの偉容さが理解出来てしまう。

「えっ……に、兄さんとどっちが大きいか……♡　何よそれ、そんなの答える義理は……、ひぃっ♡♡　わ、分かったっ、分かりましたっ♡♡　答えるからっ♡♡」

ぐりぐりと鼻面にモノを押し当てられる。私の反抗を一瞬で抑える、彼にだけ出来る力業。

「あ、貴方のモノです……♡　貴方のほうが……、わぷっ♡　お、おじさまです♡♡　おじさまのちんぽのほうが兄さんのより、ずっとずっと逞しいですっ♡♡♡」

酷いことを言わせられる、だけじゃない。
彼への呼び方、性器の呼び名も矯正される。彼好みの下品な言い方に。
「そうです、おじさまのちんぽですっ♡♡　太さも長さも硬さも、ザーメンの量だって♡♡　兄さんとは比較にならない格上ちんぽ♡♡　おじさまの方がオスとして優良なちんぽをお持ちです♡♡　かっこいいイケメンちんぽですっ♡♡」
……ごめんなさい、兄さん。
こんなの、本当は言いたくないんです。ただおかしな術で、本心とは違うことを言わされているだけで。
だから許して。今だけ、今だけですから。
屋敷に帰ったら、ちゃんと兄さんの妹の秋葉に戻りますから――
「お願いします♡♡　兄さんのちっこいおちんちんじゃ満たせない私の喉♡♡　おじさまの極太ちんぽで貫いて、内側から広げて♡♡　ザーメンタンクにしてください♡♡　遠慮はいらないですから♡♡　ばきばきになっちゃったおじさまのちんぽ、秋葉の喉でお慰めいたします……♡♡」
ちんぽの亀頭から、びゅるっと先走りが噴いた。
オスとしての性能を讃えられ興奮したのだろう。その先走りだけで、たぶん兄さんのザーメンよりも濃い。ねっとりしたそれは私の額に引っ掛かってだらりと垂れた。
それが、顎まで伝わる前に――
「がぼ、ごぶっっっ!?　ぐぶぉ、ごぼごぶっっ♡♡♡」
喉の奥。口蓋垂の向こう、柔らかい肉の場所まで、おじさまのちんぽが捩じ込まれていた。
今にも顎が外れそうだ。もともとそう大きくない口を懸命に開いてちんぽを受け入れる。おじさまはそれが当然だと言うように突っ伏した私の後頭部を掴み、股間へ打ち付けた。
「ぐっっぶ♡♡　ぶじゅっ♡♡　じゅっぶっ♡♡　ぶぷっ♡♡」
激しく顔を上下させられる。まるでオナホールのような扱い。性行というより、おじさまのちんぽを扱く穴として使われているみた

い。
一突きごとに喉を抉られ、唇がめくれて唾液が飛び散る。
喉奥を突かれるなんて普通なら嘔吐してしまうだろう。だけど私は違った。涙と鼻水を垂れ流しにしながらも、オスの性具に成りきる。
「ずるるっ♡♡　じゅるるる〜〜っ♡♡　おぶっ♡♡　ぐぷぷぷ……♡♡」
上目遣いで私を支配しているおじさまを見上げる。
脂肪の付いたお腹の向こうにおじさまの顔が見える。口を半開きにして、鼻を膨らませて。女子高生の口を使ったちんぽ扱きを堪能している不細工な顔。
それを見て、私の心が充たされてしまう。
こんな立派なちんぽを持った規格外のオス。人間としてはクズでも、生殖機能は人並外れて秀でたオス。それを悦ばせているということに私のメスの部分が勝手に歓喜してしまっているのだ。
「ぶちゅっ♡　ぶちゅっ♡　ぶちゅっ♡　ぶちゅっ♡」
唇を締め喉を締め、出来る限りの快楽をちんぽに与える。唾液は勝手に溢れていて潤滑液には困らない。どす黒いちんぽは私の涎が絡んで官能的にぬらついている。
「おっっぐ!?♡♡　ぶごぉ……っっ♡♡　」
ピストンを止めて、おじさまが私の髪を掴む。
そうして、私の顔面を腰にくっ付けた。
「ぐぶ〜〜っ♡♡　ごぇっっ♡♡　おぼっ♡♡」
ぐりぐり、と押さえ付けられる。
喉はおろか、食道の入り口にまでちんぽが入り込む。外から見たら喉が亀頭でぽっこり膨らんでいるのが分かるだろう。鼻が陰毛に突っ込んで、濃厚な精臭に目が眩む。
「ぶふーっ♡♡　ふぅっ♡♡　ふぐぅぅぅぅ……♡♡」
びっくんびっくん跳ねるちんぽが喉を揺らす。喉肉の柔らかさを堪能しているのだろう。窒息しそうな私に構わずおじさまはしばらくそのまま私の喉オナホをちんぽで味わった。

やがて、亀頭がぶくりと膨らむ。
更に喉が広がり、胃までの直通路が開かれて。
予告もなく、ザーメンが弾けた。
「むぐっ……んぐぅ〜〜っっ!!???♡♡♡」
飲む、とは言えないだろう。ちんぽが突っ込まれて喉を収縮出来ず、嚥下出来ない。
大量のザーメンを、開かれた食道へ流し込まれる。舌を伝わらないから味もよく分からない。ただ多くて、ねばっこくて、どろどろに張り付く液体と分かるだけ。
なのに、胃は反応して熱を持っていく。水やお茶を飲んだ時とはまるで違う。とびきり強い酒を飲んで酩酊するみたいに、内臓は燃えて頭にまで熱が回っていく。
「んごぉっ♡♡　ごぶ、ごぶっ♡♡　おぶっ♡♡　ごぉぉおおお……♡♡」
睾丸がカラになるまで注がれる。
数回ちんぽが痙攣して漏らすだけの兄さんの射精とは違う。おじさまの射精はさながら排泄だ。限界まで溜めた小便より多そうなザーメンが、私の胃に直接吐き出された。
射精が終わり、萎えてもまだ大きいちんぽが喉から引き抜かれる。ぐぼぉ、と酷い音を立てて太いザーメンの橋が亀頭と唇の間に架かった。
「おぶぇ……っっ♡♡　かはっ♡♡　だ、だ、出しすぎ♡♡　おしっこじゃないんだから……♡　どれだけだすの、信じられないっ♡♡」
涎やらザーメンやらでべたべたになった口を拭う。袖が汚れてしまうけど、いちいち気にしていられない。
身を起こしただけでも胃の中がたぽたぽ揺れているのが分かる。今、走りでもしたら間違いなく吐いてしまうだろう。
おじさまは嘔吐感を抑えて四苦八苦している私の髪でちんぽを拭っていた。自慢の黒髪にべちゃべちゃとザーメンが付着していく。髪がきしむから止めて欲しいのだけど、それを言い出すことも出来なかった。

「はあっ……はーっ……!!　最悪っ……貴方なんて、『魅了』さえなければっ、こんなコト絶対に許さないのに……!!　わ、ひゃあっ」
キッと睨み付ける私をおじさまが抱き締めた。
緩んでぶよぶよの胸元に顔が押し付けられる。ザーメンとはまた違う、濃厚な臭い。中年男性の、おじさまのオスくさい臭い。
それを間近で吸い込んで、くらくらした。
良かったよ秋葉ちゃん。また呼び出すからね。
なでなで、と髪を撫でられながら囁かれる。
威勢は簡単に消し飛んで耳の先まで熱い。
上がった息を、おじさまの胸元で隠しつつ。
「……♡♡♡」
私は何も言わず、こくりと頷く。
おじさまの体臭で、頭が痺れていた。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

琥珀、少し出掛けてくるわ。いえ、一人でいいわよ。ただ忘れ物をしちゃって学校に行ってくるだけ。すぐに戻るから心配しないで頂戴。
「――あむ、んちゅ♡　むちゅ～っ♡　どうですか、私のキス手コキ……♡　ちんぽに効く？　ふぅん、それじゃあもっと、舌出して……♡　あー、んっ♡　ちゅるっ♡　むちゅるる～～っ♡♡」
ん……最近疲れてるんじゃないかって？　たまに膝が震えてる……？　言ってくれるじゃない。なんて、心配してくれてありがとう翡翠。でも大丈夫よ。学校が楽しくてね、色々頑張っちゃってるだけ。
「――あんっ♡　あっあっあっ♡♡　おまんこイッちゃいますっ♡♡　おじさまの指マン、えっぐい♡♡　またクタクタになっちゃう♡♡

もう許して♡♡　この前イキ疲れて帰ったら、うちのメイドに怪しまれちゃったんですから♡♡」

あ、兄さん。あの、今日は……っ。す、すいません。今日は先に帰って貰えますか？　っぅ♡　ち、ちょっと呼び出しがありまして……終わったらすぐに帰りますので……♡

「――やだぁ♡♡　おじさまのいじわる♡♡　兄さんの前でおまんこにバイブ突っ込んで挨拶して来いとか……♡♡　しかも丁度リモコンで動かしたりして、んあっ♡♡　また奥で震えてっ♡♡　ダメダメっ、そんなに激しくしたらまたアクメしちゃいます～っ♡♡」

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

――まずい。このままでは、本当におかしくなってしまう。

そう危機感を覚えたのは、彼に対する反抗が薄れるようになってからだ。

以前は形だけでも彼からの呼び出しを嫌がり、行為を拒んでいたというのに、最近はやりたい放題……もとい、やられたい放題。休日でも彼に呼び出されたら学校まで飛んでいって相手をして、フェラチオのみならず指でおまんこを弄られるようになって。取り繕えていた行為の残滓を、翡翠や琥珀に怪しまれるようになって。

そしておまんこに仕込まれたローターを兄さんの前で震わされるようになった頃。このままでは本当に犯されてしまうと自覚した。

思えば、よくこれまで手篭めにされなかったものだ。女子高生にセクハラするというシチュエーションで満足していたのか、シエル先輩という相手がいるからなのか。あくまで彼は私の口を犯すだけで、挿入することはなかった。身体をまさぐりおまんこを弄ることはあってもちんぽを突っ込もうとはしなかったのだ。

あの性欲しか頭になさそうな男が何故、とは思う。けれど理由なん

てどうでもいいだろう。私はまだこの身を汚されていない。少なくとも姦通はしていない、ということが大事なのだ。
そう……まだ戻れる。シエル先輩とは違う。堕ちて彼に法悦を覚えさせられてしまったあの人とは違う。
まだ私は戻れるはずだ、兄さんの元に。
私の好きな人の妹に。

「――あら、秋葉さんこんにちは。珍しいですね、わたしに会いに来るなんて。今はわたししかいませんよ？」
「分かっています。話があるんです、シエル先輩」
ドアを開けて入る私を、先輩は快く招き入れた。
やはり、先輩はここにいた。畳敷きの茶道部室。……何度かここでも暴行された、余り思い出したくない場所だ。
「お話、ですか。ではこちらへどうぞ。あ、正座でも足を崩して貰っても大丈夫ですからね。お茶飲みます？　これでも腕を磨いてるんですよ、わたし」
「けっこうです。それよりも今日は先輩にお願いがあって来ました」
「お願いですか？　秋葉さんがわたしにお願いなんて、なかなか珍しい」
正座の先輩の前へ、自分も正座で相対した。
……ああ、こうして見ると。先輩が、ほんの少し前とは違うことが分かる。
彼に開発されたのだろう。身体は若干丸みを帯びて、元々スタイルの良かった先輩が更に色気を増している。胸も尻も一回り大きくなったのではないだろうか。
何よりも、その雰囲気。
兄さんも乾さんも、他の男子生徒も気付いていないかもしれない。私が同じ彼と肉体接触をした女だから分かるのかもしれない。
先輩は、メスの匂いをプンプン発していた。オスと番になったからこそ分泌するフェロモンを存分に撒き散らしていた。

そしてこれは、あの男を惹き付ける為の匂いなのだろう。
「……先輩。まず聞きたいんですけど。先輩は、あの方の恋人なんですか」
「わたしが先生の？　うーん、どうなんでしょう。アルクェイドもいますしね。まあ、二人揃って性処理便器って所が妥当でしょうか」
「っ……」
予想はしていたけど、やっぱりアルクェイドさんも。
にわかには信じがたいけれど、先輩が嘘をついているようには見えない。……それに、アルクェイドさんだって女だ。何かのきっかけで彼に抱かれるようなことがあれば、堕ちてしまうのも有り得なくはない。
「先輩も、アルクェイドさんも。その……兄さんのコトは、どうなんですか。あれだけ好きだったでしょうに」
「ん～？　それ、秋葉さんが言います？」
「……？」
発言の意味が分からない。
怪訝そうにしている私に、先輩が笑った。
「まあいいですけど。うん、わたしもアルクェイドも、遠野くんのコトは好きですよ？　別に遠野くんへの想いが大きくなったわけでも小さくなったわけでもないです。
……でも、ねえ？　秋葉さんも実感しましたよね？　あ、まだ本番えっちはしてないんでしたっけ？　それでも分かるでしょう、遠野くんと先生のオスとしての格の差。今まで最高の男の子で、オスとしても絶倫だと思ってた相手が、実はその子のコトしか知らないからそう思い込んでただけって事実を叩き付けられちゃったら、ね。井の中の蛙大海を知らずってやつですよ。海に放り出されちゃったようなものですね。あっぷあっぷしながら順応した結果がこれ、って感じです」
さらり、と何の苦もなく先輩は言い切った。
……余りに酷い告白だった。兄さんと先輩の問題なのに、私が一言物申したくなるくらいの。

なのに、なんでだろう。
反論が湧いてこない。付ける文句がない。
むしろ――胸に染み込むように、先輩の言葉が響いた。
……何か、おかしい。
そういえば――そもそも、ヘンじゃないだろうか。
いくら『魅了』をかけられているからって、根っこから洗脳されているわけじゃない。あんな風に校内で性暴力を振るわれていたら証拠を掴もうとすればいくらでも掴めるだろう。別にシエル先輩だって万能じゃない、警察にでも駆け込めばあんな男、一発で懲戒免職だ。隠しきることなんて出来やしない。
いや、そもそも。
なんで私は、兄さんに助けを求めなかったんだろう――――？
「秋葉さん、髪キレイですね。艶がかっててて、黒い絹みたい」
いつの間にか隣にいた先輩に、ぎゅ、と抱き締められた。
柔らかく、母性的な感触。女の私でさえ心地いいと思うような。
「ぁ……せ、先輩、何を……」
「秋葉さん、前から思ってましたけど、すっごく美人ですよね。女のわたしも見惚れちゃうくらいに」
「あっ……あ!?♡　なに、そんなところっ」
くち、という音。
するりと延びた先輩の手が、私のスカートの中へ入り込んでいた。
「大丈夫、痛くしないですから。……うーん、やっぱりまだまだ狭いんですね。遠野くんのしか挿れたことないから当然か」
「あっ♡　せんぱ、んんっ♡」
にちゅ♡　くちゅっ♡　にゅるるっ♡
くの字に曲がった指先でおまんこの入り口を引っ掻かれる。あっさり濡れた膣は簡単に先輩の指を受け入れてしまった。荒々しいあの男と違って先輩の手付きは優しい。痺れるような快感が腰を蕩けさせていく。
「まっ、待ってください先輩っ……♡　こんなことしに来たんじゃないんですっ。私、あの人のことで先輩に頼みがあってっ」

「あら、先生のことで？」
応じながらも先輩は手を止めない。むしろ、指先で私のおまんこを開いて更に刺激を強められてしまう。
「んんっ♡　ひぃっ♡」
「うふ、秋葉さん可愛い。いつもは凛々しいのに、感じるとそういう顔になっちゃうんですね。……それで、何ですか？　頼みって」
「それはっ、み、『魅了』ですっ♡　先輩が私にかけた『魅了』を解いて欲しくてっ」
「――――はい？」
先輩は、キョトンとした。私が何を言っているのか分からないような様子だ。
もしや、もう私も自分のように堕ち切ってこのまま籠絡されるばかりとでも思ったのだろうか。
だがお生憎様だ。私はそんな風にはならない。
だって私は――兄さんへの想いを貫くのだから。
「分かってるんですよ、毎回先輩がかけてるあれ、『魅了』でしょう？
無理やり私の心を捻じ曲げてる。だからいつもあんな人に良いようにされてるんです。あれのせいで、あの人を見ただけで動悸がして、股間を見せられて息が荒くなって、兄さんに酷いことを言わされて……。でももう止めてください。私は兄さんと添い遂げるんです。これ以上、あんな人に弄ばれる気はありません」
きっぱりと告げる。
問題は先輩がどう出るか。いざとなれば実力行使も辞さない、と瞳に力を入れるけれど――
「……ああ、はい。なるほどなるほど。そういうことでしたか」
「……？」
くすり、と。何かに思い当たったらしい先輩が頬を緩めた。
そうして、私の耳元へ唇を寄せて、囁く。
「秋葉さん。ごめんなさい、勘違いさせちゃったみたいですね。まあ、はっきり言っておかなかったわたしも悪かったです」
「はい……？　先輩、どういう……」

「端的に言いますとね。わたし、秋葉さんに魅了なんてかけてないですよ。いえ、かけられない、と言った方が正しいでしょうか」

……。

……え？

「魅了っていうのはそう便利なことじゃありません。他人を洗脳したり性格を書き換えたりなんてことは出来ません。アルクェイドくらいの魔眼ならそれに近いことも出来るかも知れませんけど、わたしが目を見ただけで、なんて到底無理ですね。

あれはですね、別に大したことじゃないです。気付けって言うのかな。ちょっと意地っ張りな秋葉さんを素直にさせるくらいのもので、あくまで秋葉さんの本心を表に出させてるだけなんです」

「え……え？　は……？」

ちょっと待って。

先輩の言っていることがよく分からない。

「だから秋葉さんが先生とのえっちで思ったこと、感じたこと、言ったこと全部、秋葉さんの本心ですよ。とっくに分かってると思ってましたけど、そういうことでしたかぁ。だからさっき、自分は違うみたいな顔でわたしやアルクェイドは遠野くんが好きなんじゃなかったのか～、なんて言ってたんですね。先生に一目惚れしちゃった秋葉さんが何言ってるんだろうって思っちゃいました」

「ひっ、ひと……一目惚れっ??」

「そうでしょう？　初めて先生と秋葉さんを引き合わせた後、隠れて観察してたんですけど。欲望を解放された状態の秋葉さんが先生を……というか、先生のちんぽを見て、一瞬でメスの顔になっちゃったの、バッチリ見てましたからね？」

「――、――――」

これまでのあの男との行為が、脳裏に甦る。

一目見て、ちんぽに魅入られて。その場で口を犯された。その体験が忘れられず、彼と彼のちんぽの言いなりになった。何度も呼び出され、その度に心臓をばくばくさせながら彼にすがり付いて。兄さんを彼と比較して貶すような、酷いことを言って。

あれが全部、私の本心……？

「そうです♥？　秋葉さん、先生に恋しちゃったんですね♥？　先生とえっちしてドキドキしました？　凄いオスだー、って惚れ惚れしちゃいました？　それぜーんぶ、秋葉さんが感じたことそのままです♥？　だからあ、秋葉さんが本気でイヤだったなら普通に逃げられたんですよ？　他人に相談するなり、遠野くんに助けを求めるなり。まあそうなればわたしやアルクェイドが止めてたでしょうけれど、秋葉さんはそうしようともしなかったですよね♥？　だってそんなことしたら、もう先生にセクハラして貰えなくなっちゃいますもんね♥？」

「ち……違う、ちが……」

「あっさり惚れちゃったのは、たぶん遠野くんが原因でしょうねー。秋葉さん、ここだけの話……遠野くんのえっちって、『しょぼい』ですよね♥？　きっと秋葉さんも、本能のどこかで不満が溜まってたんだと思いますよ。わたしもそうでしたから♥？　そこに欲望の歯止めがない状態で先生の規格外ちんぽを見せられて即堕ち、ってとこでしょうか♥？　うーん、ちんぽ見ただけで一目惚れとか、わたしやアルクェイドよりもガードが緩いですねえ……♥？」

「っ……が、ぁ……!?」

反論を、絞り出そうとする。何か言わなくてはいけない。このままでは、先輩の言い分を認めることになると。

……なのに、何も出て来ない。

言い返せない。

その通り過ぎて。

はい、先輩の言う通りです――としか、浮かんで来ない。

「で、でも……でもわたしは、兄さんが好きで……」

……ああ、そうか。

さっき先輩の話を聞いて、しっくり来た理由が分かった。

――遠野くんを嫌いになったわけじゃない。ただ遥かに上の比較対象を知ってしまっただけ。

酷いと思いつつも、何故か府に落ちた論理。

しっくり来るのも当然だ。
だってそれは、私が心の底で思っていたことと、全く同一だったんだから――――。
「秋葉さん、嘆く必要はないですよ♥？　良かったじゃないですか、本当の恋が見つけられて♥？　先生を見ただけでドキドキして、ちんぽを見たら息が荒くなる……でしたっけ♥？　すっかりべた惚れになっちゃったんですねえ♥？」
「あっ♡　んぅっ♡」
また、おまんこを弄られる。
硬いメス肉をほぐすように掻き回される。
「くす……♥？　秋葉さん、気付いてます？　ここ、わたしが触る前から濡れちゃってましたよ♥？　遠野くんとのえっちが不満で、先生にもセクハラされるだけで挿入はして貰えない……ずっと焦らされてたんですから当然ですか♥？」
「はっ♡　ああっ♡」
「どうします？　選択肢は3つです。一つは、ここままわたしが慰めてあげる。わたしはこれでも良いですけどね、秋葉さんの可愛い所が見れますし。もう一つは遠野くんとえっちする。これはあんまりおすすめ出来ませんねえ。たぶん不満がより溜まっちゃうだけでしょう」
「くぅっ……♡」
「そして最後の一つは……♥？　先生に犯して貰う、です♥？　先生のえっち、凄いんですよ♥？　おっきなちんぽで、おまんこを掘り返されて♥？　ゴンゴン子宮を押し潰されて♥？　先生が満足するまで泣いても許して貰えない蹂躙セックス……♥？」
ぎゅううう……っと、子宮が竦み上がる。
怯えている。先生に犯されるのを想像して。一方的に嬲られるのを予見して。
でも、同時に。ごぽり、と粘っこい愛液を噴き出している。先生のちんぽを受け入れる準備をしている。
期待……している……♡

「もちろん最後は、子宮の中までちんぽを捩じ込まれて、妊娠確実の子宮内射精♥？　秋葉さんも知ってますよね？　先生の精液の多さ、濃厚さ……♥？　あれをおまんこの中で、びゅーっ♥？　びゅるるーっ♥？　って♥？　ああ、秋葉さんにも体験して欲しいなあ……♥？　気持ちいいですよ♥？　天国ですよ♥？　女に生まれて良かったーって、しあわせ噛み締めちゃいますよ♥？」

「はぁっ……♡　はっ……♡♡」

「どうします？　秋葉さんが決めていいんですよ？　秋葉さんが頼んでくれれば、すぐにその通りにしてあげます。一つめでも二つめでも……最後のでも。

……あ、一応言っておくと。同じ女として一番おすすめなのは、最後のやつですね……♥？♥？」

「はっ♡　はっ♡」

はーっ♡　はぁーっ♡

はっ♡　あ……♡

は……♡

…………♡♡

♡♡♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「おかえりなさいませ。秋葉さま」

「ただいま、翡翠」
遠野邸の扉を開けると、いつものように翡翠が出迎えてくれた。
しずしずと頭を下げる翡翠は毎日代わり映えのしないメイド服だというのに、やっぱり美人だ。もしこの子が学校に行くようなことがあったら男子は放っておかないだろうな。
「お一人ですか？　志貴さまは」
「兄さんはまだ学校。補習だとか言ってたからしばらく帰って来ないと思うわ。いつになるか分からないから、一足先に帰ってきたの」
「そうでしたか。学校、お疲れ様でした」
「ん、ありがと。そういえば琥珀は？」
「買い物に行っております。出たばかりなので、まだかかるかと」
「……そう」
まあ、好都合だ。何かと鋭い子だし。
「そうだ翡翠。ちょっとね……お客様がいて」
「はい？　お客様、ですか……あ」
翡翠の視線が私の背後へ移動する。
ぬるりと扉の影から身を出した、大柄な男性に。
「ええと……？　そちらの方は……」
「学校の先生なの。担任ではないんだけれど、お世話になっていて。今日は……その……そう、家庭訪問に来てくださったのよ」
「はあ、そうでしたか」
流石、遠野家のメイドである。とても私が家に招くのに相応しくないおじさまの姿を見て、わずかに眉をひそめるだけで流して見せた。
……とはいえ、平常心とはいかなそうだ。
翡翠が居心地悪げに身じろぎする。理由は簡単、おじさまの舐め回すような視線だ。整った顔から首筋、緩やかに膨らんだ胸元、メイド服のスカートまで。じっくり品定めするように視線が這う。
なんだか不愉快。
それは家族の一員と言ってもいい彼女への不躾な振る舞いのせい、というより――。
「部屋で少し話をするわ。翡翠は仕事に戻っていいわよ」

「かしこまりました。宜しければお茶など持っていきますが」
「いいからいいから。気を使わないで頂戴」
「……分かりました」
一礼して翡翠は持ち場へ戻っていく。
ちょっと強めにおじさまの手を握って、部屋へ連れ込んだ。

部屋に入るなり、おじさまは深々と深呼吸した。
カチャカチャとズボンを下ろすとちんぽはもう半勃ちだった。女子高生の部屋に入って興奮したのだろう。まったく、デリカシーの欠片もない変態である。
「この屋敷ですか？　ええ、親の遺産です。もう両親は他界しましたので、私のものですが」
ベッドに腰を下ろしたおじさまが私の布団をまさぐる。正直、汚れるのであまり触って欲しくはないのだが。
それにしても奇妙な光景だ。自室へこんな中年男を上げることになるなんて、ほんの一ヶ月前には想像もしなかった。
おじさまの前に立つ。
しばし見詰め合う。そうして、おじさまの唇に、自分の唇をくっ付けた。
「はぁむ、ん……♡　ちゅっ……♡」
前屈みになってキスをする。さらり、と長髪がおじさまの膝にかかった。
「ちゅっちゅぅぅっ……♡　ぶちゅちゅっ♡　ぢゅるるるっ♡♡」
舌を絡めていると、甘い痺れが腰に伝う。
下半身が気怠い。仕方ないので、おじさまの膝上に跨がった。
ぎしり、と二人ぶんの体重でベッドが軋む。
「ちゅ～っ♡　おじさま、さっき翡翠のことジロジロ見てましたね……♡　駄目ですよ、うちの大事なメイドなんですから♡　手を出しては駄目♡」
首に腕を回しておじさまに囁く。

さっきの視線は、明らかに新たな女を品定めする視線だった。いたいけで繊細な翡翠を、おじさまみたいな男性の自由にさせては壊れてしまうだろう。雇い主としてそんなことは許す訳にいかない。
それに――。
「それに、今日は私とエッチしに来たんですから♡♡　他の女の子に目移りするのは無しです♡♡　しっかり私をおじさまのモノにしてくださらないと……♡♡」
そう……♡
もう誤魔化すことは出来ない。先輩の言った通りだ。
私は、おじさまに惚れ込んでしまった……♡　どうしようもないクズだし、人間として好きになれる所は欠片もないけど……
ちんぽが強くて♡　エッチが上手いから好き♡　兄さんとは逆……♡　人間として落第でも、オスとしては百点満点♡
私が認めなかっただけで、初対面でおじさまのちんぽに魅入られた時点で惚れちゃってたんだ……♡　おじさまが私にセクハラはしても無理やり本番エッチを迫らなかったのも当然だった♡
目の前のメスは自分にぞっこんなのだから♡　あとは痺れを切らして自分でちんぽを求めてくるまで焦らしておけばいいって、お見通しだったんだ♡♡
「おじさまぁ……♡　今日お呼び立てした理由、お分かりですよね？
そうです♡　抱いて欲しくて……♡　おじさまに犯されたくって来て頂いたんです♡　このおっきなちんぽでハメて欲しいんです♡♡」
おじさまのちんぽが、むくりと鎌首をもたげていく。
メスを犯す為に臨戦態勢を整えていく……♡
「……はい♡　おじさまのことお慕いしてます♡　ええ、兄さんよりも、ですよ♡　だからおじさまのモノにして欲しいんです……♡　おじさまを部屋に連れ込んだだけでぐしょ濡れになってるおまんこを貫いて♡　いちばん奥でぴゅっぴゅして頂いて……♡」
おじさまの耳たぶに唇をくっ付けながら、吐息混じりで囁く……♡
「秋葉に♡♡　おじさまの赤ちゃんを孕ませて頂きたいのです♡♡」

びきり――と、音がしたような錯覚。
私が煽ったちんぽが、本格的に屹立した。兄さんの倍くらいある、ヘソまで届くフル勃起……♡
こうなったら睾丸がからっぽになるまで射精しないと収まらない♡　オナニーじゃ駄目♡　アルクェイドさんやシエル先輩といった美女を経験したおじさまちんぽは、もう自分の右手じゃ満足出来ない♡
そして今……♡　おじさまの相手を出来る女は一人だけ……♡
「あっ♡♡　やだぁ、おじさま重っ……♡♡　もうちょっと痩せてくださいっ♡♡」
肩を掴まれ、ベッドに押し倒される。
ぼすん、と枕に頭を乗せた私へおじさまがのし掛かる。はふはふ、と犬みたいに浅い息で私の匂いを吸い込もうと私の首筋に鼻を突っ込む。
へこへこっ♡　こすこすこす♡
おじさまのちんぽが太股に当たってる……♡　もう先走り垂らしてベトベト♡　女の中に入り込みたいーって、おねだりするみたいに擦り付けてる♡♡
私の肌に押し付けるだけで快感を得ているようで、ちんぽがぴくぴくと震える。内股の私のデルタゾーンにちんぽが差し込まれる。ぬるぬる、ねとねと。先走りまみれになった亀頭を私のショーツで拭われてしまう。
でも逆効果だ。そこはとっくに、内側からの愛液でぐっしょりなんだから……♡
「おじさま♡　素股なんかで射精したら勿体ないですよ♡　おじさまみたいに優れた男性は、女の子を満足させる義務があります♡　だからちゃんと役目を果たして貰わないと♡」
ショーツを脱ぎ捨て、膝裏を手で抱える。
かぱり、と下品に股を開けば、スカートの中のびしょ濡れおまんこが丸見え♡　ぴっちり閉じた割れ目がひくひくと震えているのが分かる♡　先輩にほぐされ、おじさまで発情した性器はもう準備万端

……♡

「どうぞ♡　おじさまをお待ちしてる秋葉のおまんこです……♡　ちんぽが楽しみ過ぎてこんなに濡れちゃってるんです♡　早くちんぽを……っぅほおおぉぉぉぉっっ!!?♡♡♡」

ぶっちゅうううう♡♡♡

一息に私のおまんこがちんぽで貫かれた♡♡　容赦ない即ハメ♡

膣をぞりぞり削って、そのまま子宮口まで叩き潰す挿入……♡♡

あまりの快感で息が詰まる♡♡

駄目だ……♡　比べ物にならない♡　兄さんの落第ちんぽとは格が違う♡　これが私が一目惚れしたちんぽ♡　私が添い遂げるべき運命の相手だって確信してしまう……♡

「〜〜っぐぅお゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛っ♡♡　お゛ぉ゛っお゛ぉ゛♡♡　っっっ♡　おじさまっ♡　そんなにゴリゴリ抉ったら♡♡　おじさまの形になって戻らなくなっちゃいますっ♡♡　ほぉおお〜っっ♡♡」

叩き付けるようなピストン♡　おじさまの体重も掛けた過負荷のハメ潰し♡♡　降りた子宮を亀頭で刺激して、口を開け、孕ませろって脅迫してくる♡　おじさま完全に私を堕とす気だ♡　もう赤ちゃん欲しいって言わせる所まで追い詰めてるのに♡　本当に妊娠させるまで許さない気なんだ……♡

「おっごぉっ♡　そんな腰ぐりぐり回してぇっ……♡　おまんこ広がっちゃう♡　おじさまちんぽじゃないと埋まらなくなっちゃうぅ♡」

改造、されてく……♡　おじさま専用になってく……♡

兄さんのしょぼちんぽしか知らなかったぴっちりおまんこがガバガバにされる♡　外はめくれて、中は膣道が拡張される♡　これじゃもし兄さんのちんぽを挿れても締めてあげられなくなっちゃう♡

緩すぎて、兄さんちんぽがずり抜けるようになってしまう♡♡

ずぷっ♡　ずぷっ♡　ずぷっ♡　ずぷっ♡

私の大股開きの爪先がふらふらと揺れる。端から見れば肥えた中年男性が女子高生をレイプしているように見えるだろう。

でも実際は……♡　私の胸はドキドキして、興奮に包まれてる♡

番に見定めたオスに抱かれる幸せに満ちている……♡
今となれば……『魅了』なんてされてなくて良かったのかも知れない♡
だって、この気持ちが本当だって分かるから♡　おじさまの子種で孕みたいって気持ちが本当だって思えるから♡
「おじさま、アルクェイドさんやシエル先輩は孕ませたんですか？……まだ？　じゃあ、私が一号です♡　おじさまの子供を妊娠する一番乗り♡　おじさまの種で膨らまされたお腹で学校行っちゃいますから♡　登校する私を見て、あのお腹は自分が孕ませたんだって優越感に浸れちゃいますよ♡」
私が言うと、むくり……とおじさまのちんぽが更に硬くなった♡
もう鉄の棒みたい♡　メスの私の身体にはない硬さと熱さに惚れ惚れしてしまう♡
おじさまが私を抱えて、体勢を入れ替えた。今度はおじさまが下で私が上。騎乗位の格好だ。
「ひ、ぎゅうううう……♡　この体勢っ♡　ちんぽがもっと奥に……っ♡」
ぴっちり腰と腰が密着する。さっきまで以上に私の胎内までちんぽが侵入していく。
「あ〝っ……あ〝ぁ〝っ!?　子宮の中まで、入って……っ!?♡♡♡」
ぐぷっ……♡　ぐりゅん♡♡
おじさまのちんぽを迎えるため、降りきった子宮が貫かれる……♡
亀頭が中まで入り込んでしまった♡　バチバチと危険な快楽信号が頭の中でスパークする♡♡　神経が焼き切れてしまいそう……♡
こんなの……兄さんとしてたのは性交なんかじゃない♡　あんなのちょっと粘膜と粘膜を擦ってただけ♡　子供の遊びみたいなもの♡
これが本当のセックス♡　まるで捕食されているみたい♡　オスがメスを屈服させて赤ちゃんを孕ませる為の肉のぶつけ合い……♡
「おぶっ♡　お〝っ♡　お〝っ♡　お〝っ♡　お〝っ♡」
足腰が立たなくなってしまった私を見かねたのか、おじさまが下か

ら突き上げてくる……♡　私の腰を持ち上げ、カリが子宮口を削りながら抜け出て、膣を擦って♡　また私の体重ごと下ろして、勢いよく子宮口を貫く♡

「待っでっ♡♡　ちんぽで子宮ボコボコにするのやめてぇっ♡　気持ち良すぎてバカになるっっ♡♡　いつでもおじさまのちんぽをお腹に入れておきたくなっちゃいますっ♡♡　私のおまんこぶっ壊れちゃいますからっ♡♡　おじさま♡♡　おじさまぁ♡♡♡」

もちろんメスが泣き喚いたっておじさまは手加減なんてしない♡

むしろ泣き声がちんぽに効くみたいでビクビクっと跳ねる♡　自分のちんぽで女を泣くまで責め抜いたって実感したちんぽが喜んでる♡

「あっ♡　あぁんっ♡　出すんですか♡　射精したいんですかおじさま♡♡　分かりますよ、お腹の中で跳ねてますもの♡♡　ちんぽしゃくり上げるたびに私の子宮も揺らされちゃってます♡♡」

来る……♡　本能で分かる……♡

ちんぽが張り詰めて♡　カリがぐっと開いて子宮口に噛みついて固定して♡　睾丸が持ち上がって……♡

私の子宮に♡♡　種付けくるっ♡♡

「来てっ♡♡　精子くださいおじさま♡♡　跳ねるおじさまのザーメンで私のお腹、孕ませて♡♡　兄さんじゃ嫌♡♡　おじさまがいいんです♡♡　おじさまの赤ちゃんがいいっ♡♡　兄さんの精子じゃきっとちんぽも小さくて病弱な子しか作れないですもん♡♡　そんなの私の卵子がかわいそう♡♡♡　どうせ作るなら強いオスの精子の方がいいですっ♡♡♡　来て来てっ♡♡　精子来て〜〜っっ♡♡♡♡」

ぶぴゅっ♡♡　どびゅるるるる〜っ♡♡

ぶっびゅ♡　ぶびゅぅうううう♡♡　びゅるるるるっっ♡♡♡

びゅる〜〜っ♡♡♡

「――ひぁあああ♡♡　ぅ〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝っっっ♡♡　子宮焼けるっ♡♡♡　どぷどぷ出てるぅ♡♡　お腹満たされちゃってる♡♡　こんなのぜったい妊娠するっ……♡♡　子

宮の中で卵子溺れてるっ♡♡」
快楽神経を飽和させる程のアクメ……♡　気持ち良すぎて苦しい♡
身体の快感だけじゃない♡　これ確実に受精した……♡　愛しいオスに孕まされたって幸せで脳が溶けそう♡
兄さんとのエッチじゃ一回たりとも経験したことのない……♡
深い深い幸せ孕みアクメ……♡♡♡
おじさまも気持ち良さそう……♡♡　涎を垂らして、間抜けな射精顔♡♡　ずっと狙ってた私に念願の中出し、しかも私からのおねだりエッチ♡♡　彼氏持ちの良家の女子高生に孕ませ射精する快楽に浸ってる征服欲一杯の顔だ……♡♡
まあ、これからはいつだって、何度だって抱いて貰うけれど……♡
「ちゅっちゅっ♡　むちゅ～っ♡♡　おじさま、まだちんぽに精子残ってるでしょう♡　もったいないから射精しておかないと♡　おじさまのザーメンは、一滴残らず秋葉が貰いますからね……♡♡」
ぴゅるっ♡　ぷちゅ♡　とぷとぷっ……♡♡
身体を倒して、おじさまとねっとり舌を絡める。腰を揺すってあげて、ちんぽが最後まで気持ち良いままお射精が終わるよう気を使う。
晴れて番になった私とおじさまは、気の済むまで余韻に浸ったのだった。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「私のおまんこ、どうでしたか？　……アルクェイドさんやシエル先輩よりも良い？　本当かなぁ……♡　あの二人にも同じこと言うつもりでしょう♡」
ベッドの上で、私はおじさまと添い寝していた。
二人とも裸。汗も拭いていない状態だ。正直、汗臭くなりそうで嫌

なのだけど……おじさまはどうやら女子高生の汗の匂いも好きらしい。まったく救いようのない変態だ。
「はぁ……。これで私も、先輩たちと同じおじさまのメス奴隷ですね。え、嫌かって？　冗談言わないでください♡　さっきまでの私の姿、見てたでしょう……♡」
騎乗位で一発出しただけでおじさまのちんぽが萎えるはずもない。駅弁で、正常位で、後背位で。私の子宮では収まらず溢れ出るほどの精液を流し込まれてしまった。
最後の方では、咽び泣いて半分失神しながらおじさまに許しを乞うていたくらいだ。……もちろんそんなことでおじさまが私を解放する訳がない、どころかより激しく犯されたけれど。
「……」
――そっか。なぜ先輩が私をおじさまに貢いだか、私が同じ立場になって良く分かった。
それはおじさまに可愛がって貰うためとか、中々身が持たないからとかもあるだろうけど。
一番は……きっと、教えてあげたかったからなんだ。
同じ相手を好きだった私に。兄さんと関係を持つ女の子に。
もっともっと、格上のオスがいますよ……って♡
こっちの方が、メスとして幸せにしてくれますよ……って♡
なら、私も♡
あの子たちのことを大切に思ってるからこそ、ちゃんと教えてあげないと……♡
「……おじさま？　少し、お話があるんですが」
こしょこしょ、と。誰も聞いてないって分かっていながら、おじさまの耳に手のひらを当てて囁く。
「うち、双子の使用人がいて♡　両方、とびっきりの器量よしの女の子なんですけど♡　そう、さっきのメイド服の子が妹で、姉の方が……♡」
……新しい獲物を見付けて、むくむくとおじさまのちんぽがまた持ち上がっていく。

待っててね、翡翠、琥珀……♡
貴女たちにもちゃんと教えてあげる♡
私がしっかり、幸福と快楽をお裾分けしてあげますからね……♡♡

# おまんこオナホメイド翡翠ちゃん

「――――志貴さま？　どうかなさったのですか、暗い顔をされて」
わたしが話し掛けると、志貴さまは『何でもないよ翡翠』と答えられました。
かちゃり、と食器の擦れる音が食堂に響きます。
夕飯どき。いつもなら遠野邸の住人全員が集まって囲むはずの食卓には、志貴さまとその後ろに控えるわたししかいませんでした。
いるはずの人がいない空間というのは違和感を覚えるものです。
部屋はがらんとして寂しげ。志貴さまの対面にいて然るべき秋葉さまは、所用とやらで不在でした。
「志貴さま。お茶のお代わりをどうぞ」
ありがとう、という言葉にも力がありません。
その理由は、近頃の秋葉さまに関してでしょう。
秋葉さまは最近、家を空けることが増えました。志貴さまとの時間を何より大切にし、ともに朝晩の食事をとるようきつく約束していた当の秋葉さま自身が、ここしばらくそれを忘れたかのように頻繁に外出しておられるのです。
また、志貴さまへの態度も変わったように思われます。別に冷たくなったとか、刺々しくなったとかいう訳ではありません。
ただ――どこか、醒めたような。
以前の秋葉さまにあった、志貴さまへのともすれば病的とさえ言える愛情と執着が、霧散したかのように見えるのです。
わたしも姉さんも、早いうちからそれに気付いていました。自分で言うのも何ですが、女の勘とでも言うのでしょうか。秋葉さまも当初は変わらず志貴さまと時間を過ごしたりして取り繕っていたのですが、同じ志貴さまを慕う少女として何となく分かるものです。
その取り繕いも面倒になったのか最近は外出が増え、夜を外で過ごす日も出るようになりました。そこでようやく、鈍い志貴さまも気付き始めたようでした。秋葉さまは元の浅上女学院の友人と遊んでいる――と説明されていましたが、志貴さまがどこまでそれを信じてい

るか。口数も多くなく、感情をあまり表に出さない方ですから、わたしには計りかねます。もしかしたら仕方ない妹だな、と遊び盛りの兄妹に一抹の寂しさを感じているだけかも知れないし、そうでないかも知れません。

……とはいえ。秋葉さまの現状を、正確には把握されていないだろうことは確かですが。

「あ……お食事は終わりですか？」

物思いに耽っていると、いつの間にか志貴さまは夕食を終えたようでした。

うん、と頷いて食器を置いた志貴さまは、物憂げに黙り込みます。

しん、とした静寂が二人きりの部屋に満ちます。

それを嫌ったのか、努めて明るく志貴さまが言いました。

――――翡翠、最近料理の練習をしてるみたいだね。

「えっ……は、はい。御存知だったのですね」

志貴さまのおっしゃる通りです。

近頃わたしは、暇を見付けては手料理を練習していました。目的は勿論、志貴さまに振る舞うためです。

わたしは味覚が他人とズレているらしく、料理が下手です。以前など、梅干しを使ったサンドイッチを志貴さまに振る舞ったところ酷い顔をさせてしまいました。優しい志貴さまは食べてくださったのですがわたしとしては反省しきり。それでも沈んだ面持ちの志貴さまを元気づけるため、美味しい料理を御馳走しようと思い立ち、練習しているのです。

しかし、わたしとしてはあくまでサプライズとして召し上がって頂きたい所。

恐らくバレバレでしょうが、まだ志貴さまに振る舞うためと明かす訳にはいきません。

「その、いつも姉さんに料理をさせてしまっていますから。たまにはわたしが料理当番を担えるよう練習しているのです。それだけ、それ

だけですよ」
慌てて言うと志貴さまに笑われてしまい、更に赤面してしまいます。
……志貴さまと同じくわたしもいつもは感情を表に出すのが不得手なくせに、こういうときだけみっともなく顔に出てしまうのは困ったところです。
「そ、そんなに笑わないでください。……志貴さまに笑われてしまうと、翡翠は困ってしまいます」
わたしが困り眉で訴えると、それがまた面白かったのか志貴さまに笑みがこぼれます。
恥ずかしいのですが、正直……志貴さまが笑ってくださって良かったのかも。さっきまで曇っていた志貴さまの雰囲気は、すっかり明るくなっていました。
「……くすっ。まったく、困った御方なんですから」
つられていつの間にかわたしの頬も緩んでいました。お互いの顔を見合わせて、くすくすと笑ってしまいます。
二人きりの食卓に、久し振りの笑い声が響いていました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「はい。それではお休みなさい、志貴さま」
お部屋まで付き添ったあと、わたしは一礼して扉を閉めました。
まだ夕飯時過ぎ。寝るには早い時間ですが、志貴さまは元から就寝の早い方。居間に居続ける理由もないのですから、食事が終われば部屋に戻られるのも当然と言えば当然でした。
「……」
扉が閉まる間際、志貴さまもわたしに『おやすみ、翡翠』と言ってくださいました。
悩みの種を抱えているというのに、わたしに対して優しくしてくだ

さる志貴さまに胸が暖かくなります。
けれど――――
「……いけない。そろそろ時間です」
時計を見ると。もう屋敷を出なければいけない時間でした。
そろり、と足音を殺して玄関へ向かいます。
姉さんは……見当たりません。たぶん部屋にいるのでしょう。
好都合です。そのままわたしは玄関を通り正門を出て、夜道を歩き出しました。

夜の街を行くメイド服姿の少女というのは目を引くようで、すれ違う人たちが一様に振り返ります。
一応、安全のためにあえて人気の多い道を選んでいることもあるのでしょう。好奇の目に晒されて恥ずかしい思いです。
しばらくして、到着した建物の前で立ち止まりました。
２０階を超える高いマンション。立地もよく警備員が常駐しかなり高級と言えるでしょう。
許可証を提示して中へ。ぴかぴかのエレベータに乗り込んで最上階へ昇り、目的地のドアの前へ辿り着きました。
「……ふぅっ」
どきどき――と、それなりの距離を歩いたことだけではない理由から高まる鼓動を抑えるため、深呼吸をひとつ。
渡されている合鍵、もといカードキーを通し、部屋へと入りました。
「……」
内装は、普通のマンションとそう変わりありません。庶民的な『彼』の要望に合わせたのだとか。
そろり、と足音を殺しながら廊下を歩き、寝室の前まで歩いていく、と――――
『あっあっ♡　おじさまのちんぽっ♡　そんなにぐりぐりしたら駄

目え♡　ひぃいっ♡♡　そんな体重かけて、思いっきりハメ潰されたら♡♡　もうおまんこもガバガバなのに♡♡　子宮までお口開いたままになっちゃいます～っ♡♡♡』

「っ……」

聞き覚えのある少女の、くぐもった矯声が耳に飛び込みました。

それだけではありません。その声に被せるように、ベッドが軋む音と肉が肉を打つ音が、部屋から漏れ聴こえます。

廊下をよく見れば、濡れた足で歩いたのだろう水滴がぺたぺたと。

それは浴室から続いていました。風呂へ入り、身体もろくに拭かぬままベッドへ雪崩れ込んだ光景が目に浮かぶようです。

『駄目駄目っ、おじさまぁ♡　もう翡翠が来ちゃいます♡♡　私がおじさまに鳴かされてる声、聴こえちゃう……え？　き、聴かせてやれって……っほぉおおお～ッッ♡♡　お〝っお〝っ♡♡　やべっ♡♡　やべでぇっ♡♡　ッ♡♡　そんなっ、面白半分に♡♡　女の子のおまんこほじくっちゃ駄目ですっっ♡♡♡』

いっそう激しく、ばつん、ばつん――と。

「はっ、は……秋葉……さま……」

わたしは立ち尽くし。扉の向こうで、秋葉さまが嬲られるのをただ聴いていました。

――まだほんの一月ほど前、初めて秋葉さまが『彼』を屋敷へ連れてきた時。

今思えば、あの時から秋葉さまは変わり始めていたのでしょう。

初対面で、秋葉さまが屋敷に招くには不釣り合いな男性だ、と思ったのを覚えています。それは風貌や年齢からではありません。

隣に立つ秋葉さまを、生徒ではなく『メス』として扱う雰囲気。そして舐めるような、わたしを品定めする視線。秋葉さま本来の性格からすれば汚物として歯牙にもかけないだろう、どうしようもない男性。

だというのに、わたしに適当な言い訳をして部屋に連れ込んでいく秋葉さまは頬を赤らめていて。数時間後汗を滲ませて髪をほつれさせ玄関まで彼を見送る時には、まるで心という弱味を握られた、恋する乙女のような顔をしていたのです。

秋葉さまの外出が増え、また志貴さまへの態度が変化したのはそれからでした。勿論、秋葉さまが誰と親密になろうが秋葉さまのご自由であり、わたしが文句を付けられることではないのですが……それでも流石にどうか、と思っていた頃。ある日わたしは、今日と同じように秋葉さまにこのマンションに呼ばれました。

理由は――部屋の掃除と、彼の身の回りの世話。時にはリビングで、時には浴室で、また時には寝室で。場所を選ばぬ秋葉さまと彼の交わりは激しく、散らかったり汚れたりは毎度のこと。その後始末と、ついでに部屋の掃除や、食料品の買い込み、お仕事の手伝い等、その他の雑務を行うよう命じられたのです。

ちなみに、ここに『彼』が住むようになったのはつい最近。

それも当然。なんせこの部屋は、『彼』との密会のために秋葉さまが遠野家の資産で購入し、彼に差し出した部屋なのですから。

「……いけない。こんなことをしてないで、早く仕事をしないと」

秋葉さまの声のせいで内に沈んでいた思考を振り払います。

ぼうっとしていた頭を軽く振ってから仕事に取り掛かります。とりあえずまずは食器の片付け。どのみちわたしが来て始末していくからと、数日分の食器が汚れたまま出しっぱなしになっています。部屋も散らかり放題。こういったものを全てこなさないとわたしは帰れません。

洗い場を整え、お皿を洗います。数日分とはいえ住んでいるのは彼一人。この分なら皿洗いはすぐに終わる、はず――

『お〟お〟お〟お〟〜〜ッッ♡♡　はっはひいいっ♡♡　なります♡♡　私はっ、遠野秋葉は、おじさまのお嫁さんになりますっ♡♡　兄さんじゃやだぁっ、好きだって勘違いしてたんです♡♡　おじさまがいいっ♡♡　兄さんよりおじさまが好き♡♡　おじさまのちんぽも

兄さんより好き♡♡♡　私の初恋は兄さんじゃなくておじさまだったんです～～っ♡♡♡』

「――――、ぅ」

台所までばっちり響く、秋葉さまの淫らな求愛。

それを聴いて、僅かに、わたしの膝が震えます。

当たり前ですが、秋葉さまのこんな声、これまで聴いたことはありませんでした。初めてこの部屋に来た日は、それはもう驚いたものです。

今では驚きはありません。しかし確実に、わたしに影響を与えていました。

「う……」

内股で太ももを擦り合わせると、くち、という感触。厚いスカートの下で、わたしの股間は湿り気を帯びていました。

これは……仕方ないのです。

わたしと同じ、いやもしかしたらそれ以上に深く、志貴さまを慕っていた秋葉さま。中々素直にはなれずとも、全てを兄に捧げる所存だっただろう妹。

そんな秋葉さまが綺麗さっぱり志貴さまへの想いを放り捨て、こんな声を、甘ったるく快楽に濁ったメスの悦びを乗せた声を上げているのを聴かされては。恥も外聞も放り捨てて、メスとしての幸福に満ち満ちたアクメ絶叫を浴びせられては。

どうしても、思ってしまいます。

どんなに凄いんだろう……って。

どんな風にそれまでの自分を塗り潰されてしまうんだろう……って。

「ぁう……くっ……。お、お皿は……終わり……」

手早く皿洗いを終えました。というか、もう皿洗いなんてやっていられません。

手を拭いてから、よろよろとまた寝室へと近付きます。扉を背にして、とすんと腰を下ろすと。

『うお゛っ♡　お゛っお゛っ♡　おっおじさまっ♡　潰れちゃ……♡
ぶふうううっ♡　っぐうううう〜〜っ……♡♡』

……たぶん、彼にのし掛かられているのでしょう。息も絶え絶えといった感じの秋葉さまの呻き声が聴こえます。
容易に想像出来ます。仰向けになって股を広げた秋葉さま。その上に覆い被さって、好き勝手に腰を打ち下ろす彼……。

『あんっ♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡』

「ふ……、ふう……っ」
膝を抱えて、もぞもぞと腰を揺するわたし。
もう下着はすーすー涼しくなるほどに濡れています。
正直に言って、すぐにでもオナニーしたい。指を突っ込んで思いっきりかき回したい。
でも出来ません。いつ部屋からお二人が出てくるとも限りません。何よりこのあと顔を合わせると思うと今からオナニーする度胸はわたしにはありません。
それに今までわたしが自慰をするときの想像は、必ず志貴さまが相手でした。わたしにとって、志貴さま以外の男性とはそもそもそういう対象にならなかったのです。
でも。彼が現れてから、それが変化しているように感じます。
なんせ――わたしと同じだったはずの、秋葉さまの現状がコレなのですから。

『お゛っ……お゛おお゛〜〜っ♡♡　おじさま、中にっ♡♡　おじさまのザーメン欲しいっ♡♡　おじさまの精子で秋葉を孕ませてっ♡
産みます、ちゃんと産みますから♡♡　おじさまの赤ちゃ……っっっ♡♡』

秋葉さまの声が切羽詰まったものになっていく。
彼を煽る言葉を発し、射精へと駆り立てていく。
そこに羞恥も嫌悪もありません。
ただただ、愛しいオスの遺伝子を受け入れることを望む、発情仕切ったメスの求愛。
「んっ……ふ……」
秋葉さまの昂りに釣られて、わたしの興奮も上昇していきます。ぱくぱくと膣口が開いて、咥え込むモノがないか探しています。
けれど、わたしの膣はからっぽ。彼に犯される秋葉さまとは違って、何も挿入されることはありません。
秋葉さまが快楽に喘ぐなか、扉一枚を隔てて膝を抱えて孤独に腰をヘコヘコと揺するわたし。
余りにも惨めで、浅ましくて。だというのに、二人の逢瀬の盗み聞きを止めるという選択肢を取る気にはなれません。

『あっあっ……あぁ〜〜♡♡　イクイク♡♡　アクメくるっ♡♡　おじさまのザーメンどぷどぷ注がれてっイグっ♡♡　もっとください、子宮で飲みますから♡♡　おじさま好き好きっ、好――――♡♡♡』

ぴたりと途絶える、秋葉さまの声。
きっと、大量の中出しで息が詰まってしまったのでしょう。
ぎしぎしと細かい痙攣でベッドが揺れる音。秋葉さまが激しいアクメに飛ばされたのは想像に難くありません。
――――きっと、志貴さまに抱かれるより、比べ物にならないくらい気持ちいいんだろうな――――
と。
わたしはひとり、下着を濡らしながらうっすらと思うのでした。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「あら、もう来てたのね翡翠。忙しいところ悪いわね、片付けは終わりそう？」
「はい。お皿洗いと洗濯物は終わって、あとは部屋の掃除です」
「そう、さすが仕事が早いわ。申し訳ないけど後で寝室もお願い出来る？」
「……はい。分かっております」
しばらくして秋葉さまは寝室から出て来られました。
澄まし顔で仰いますが、髪は幾分か乱れて額には汗が滲み、ちらりと見える首筋には虫刺されのような跡。激しい運動の残滓がそこかしこに見られます。『使った』ばかりの部屋も片付けろというのですから、そもそも隠す気もないのかもしれません。
と、いうわたしも同じようなものですが。
さっきからびしょ濡れの下着が不快でたまりません。染みがスカートを貫通してしまわないか心配なくらいです。
「あの……そういえば、あの人はどうされたのですか。部屋から出て来ませんが」
「翡翠？　あの人、ではないでしょう」
部屋から出てきたのは秋葉さまだけ。もう一人のほうはどうしたのか、と思ったのですが、言葉尻を咎められてしまいました。
「……しかし、秋葉さま。わたしの主は秋葉さまと志貴さまで」
「なに、まだそんなことを言ってるの？　翡翠も強情ね。でも、だったら尚更よ。これは貴女の雇い主である私の命令。断ることは許さないわ」
「う……」
そう言われてしまえば、わたしに拒否権はありません。
躊躇いながら、
「……分かりました。ご主人さま、とお呼びすれば良いのですね」
「うん、宜しい。おじさまったら翡翠みたいな可愛い子にご主人さまって呼ばれるなんて、って喜んでいたわ。たくさん呼んであげて頂

戴。
……それで、今は寝てるわ。お疲れのようだからしばらく放っておいてあげて」
「……かしこまりました」
渋々了承したわたしに、秋葉さまは満足げに頷きました。
すっかり彼――ご主人さまに絆されてしまった秋葉さまは、わたしにいくつかの命令を出しました。ご主人さま呼びすること、また専属の世話係になることもその中のひとつです。
そして、もうひとつ。
「しっかし……。その服、ホントにえっちね。いつものメイドを見慣れてるからかしら。こう、ギャップがなかなか……」
「あッ……お、お止めくださいっ」
つん、と秋葉さまに胸を指先で突つかれてしまいました。
秋葉さまの言うとおり、わたしは普段着のメイド服ではありません。
全裸にブラとショーツ。その上からエプロンを着けた、いわゆる裸エプロンと呼ばれる服装でした。
これも秋葉さま、というかご主人さまの命令。ご主人さまの目に入る時には必ずこの服装になれとのお達しなのです。
「あの、秋葉さま……。この格好になるにしても、ブリムは要らないのでは……」
「それが絶対着けろって話なの。よく分からない趣味だけど、まあおじさまは変態だし。それがあるだけでメイドに見えるだのどーだの言ってたわ」
遠回しに頭に被っているブリムを外せないか聞いてみたのですが流されてしまいました。……裸エプロンにブリムだけ着けているって、何だかシュールで嫌なのですが。
「それに翡翠だって最近は素直に着ちゃってるじゃない。最初はあんなに泣いて嫌がってたのに。どういう心境の変化？　もしかして貴女もおじさまのこと、好きになっちゃった？」
「……おぞましいことを言わないでください。そのようなこと、有り

得ません」
「あらそう？　でも距離感が近くなってるように見えるけれどね」
ムッと眉間に皺を寄せて言うと、秋葉さまはけらけらと笑いました。
こんな年頃の少女らしい無邪気な笑いも、ご主人さまと関わる前には見たことがありませんでした。些細な一挙手一投足から、秋葉さまがご主人さまに変えられてしまったことを感じさせます。
不思議なのは、その変わりかた。普通に考えて、秋葉さまのような年若い少女がご主人さまのような中年男性に良いようにされるとなれば、もっと直視に耐えないことになりそうですが。
秋葉さまはむしろ、志貴さまに恋い焦がれていた頃よりも――
「さて、私はそろそろ帰るから。ホントは一晩中おじさまに可愛がって戴きたい所だけど、琥珀が心配するだろうしね」
「……はい」
どくん。と跳ねる心臓。
何回経験しても、必ずこう。ご主人さまと二人きりになると思うと、なぜだか鼓動が激しくなってしまいます。
髪をなびかせ玄関へと向かう秋葉さま。
ドアノブを握ると、一度だけこちらを振り向きました。
「それじゃ。頑張ってね、翡翠♡」
「……」
いや、何をですか。

仕事はすぐに終わりました。
しかし掃除やら何やらはいいものの、学校での仕事の処理を部外者であるわたしに任せるというのはどうなのでしょうか。守秘義務とか。生徒の成績見放題なのですが。
「……そのようなことに気を使う方ではありませんね」
ふう、とため息を付きます。

何にせよ、これでわたしの仕事は終わり。秋葉さまは寝室も清掃しろと仰いましたが、どうせ汚れる場所ですし、ご主人さまが寝ているのを邪魔する訳にいきません。なので、これで帰ってしまってもいいのですが――

「……まあ、せっかく来たのですし」

言い訳するように呟いて、わたしは、部屋の冷蔵庫を開けました。

「よし。あとはこれをかけて……出来上がり、と」

３０分ほど後。テーブルの上には、わたしが作った食事がありました。

今日のメニューはかに玉。市販のパックの素材に卵を入れて焼き目をつけ餡をかけるというだけの簡単な調理ですが、今のわたしにはこれが精一杯。まともに形になっただけでも誉めて欲しい所です。味付けは……少し濃い、でしょうか。まぁそれも確かめればいいことです。

かに玉なんぞに３０分もかかるのか……などと言ってはいけません。まともに作れた時点でわたしとしては上出来なのです。

なぜこんなものを作ったかと言うと、一重に志貴さまに作って差し上げる料理の練習の為。

と言っても、もちろん自分で食べる訳ではありません。絶不評だった梅サンドもわたし的には悪くなかったのです。つまりわたしは根本的に味オンチらしいので、自分で試食しても意味がありません。

「ご主人さま、いつまで寝てらっしゃるのでしょう」

この『試食会』はもう恒例になっているのに――と。

仕方ないから起こしに行こうか、と考えた瞬間。

後ろから、むにゅん、と胸を鷲掴みにされました。

「えっ、ひゃぁあああっ!?　な、ごっご主人さまっ」

考え事をしていて背後に忍び寄った彼に気付きませんでした。

掬うようにむんず、と持ち上げられた胸。エプロンと下着の上からですが、感触を確かめるようにむにむにと揉まれます。

「あぅ、やめっ……！　よしてくださいぃっ」

彼はわたしの反応を面白がっています。秋葉ちゃんはまな板だからなぁ、なんて失礼ことを言いながら志貴さまより一回り大きな手のひらでわたしの胸を覆いました。
「ご主人さま、お願いですっ。ど、どうかその辺に……」
わたしが涙声でお願いすると、あっさりと手のひらは離されました。
胸を両腕で押さえながら振り返ると、彼――ご主人さまがにやにやと笑いながら立っていました。
たるんだお腹、鍛えられていない手足。
典型的なだらしない中年男性の身体です。
その格好は、股間を隠す下着一枚だけ。
なんで脱いでいるのか、なんて突っ込んでも仕方ありません。この部屋に居るときご主人さまは大抵この格好なのです。
「も、もうっ。お戯れを……。わたしの身体に触れるのはお止めくださいと言ったはずですがっ」
わたしが非難がましく言ってもごめんごめんと流されるだけ。秋葉さまの命令もあり完全にご主人さまの方が立場が上なので、あまり文句を付けても聞き入れて貰えません。
「あ――は、はい。今日はかに玉を作ってみました」
それよりいい匂いだね、と言われ、テーブルの上の料理のことを思い出しました。
ご主人さまがお皿を覗き込む様子に少し緊張してしまいます。
「盛り付けにも注意してみました。料理は見た目も大事だとご主人さまに教わりましたので。――美味しそう、ですか？　その、良かったです」
――それじゃあ食べようか。
わたしは頷き、ご主人さまの椅子を引きました。ご主人さまが座られたのを確認して、わたしもご主人さまの隣に座ります。
この『試食会』が始まったのは、二度目の訪問の時から。
一度目の時は秋葉さまと一緒だったのですが、先ほど秋葉さまが仰

られたようにわたしは激しい拒絶反応を起こしました。薄々勘づいていたとはいえ秋葉さまの浮気を目の当たりにし、しかもその相手がセクハラ紛いの視線を送ってくる中年男性だったのです。嫌悪と恐怖しかなく、秋葉さまに止められなければ志貴さまや姉に全てを打ち明けていたことでしょう。

二度目の時は一人でした。無理やり襲われるのではないかと思い足を震わせ半泣きになりながら訪れたわたしですが、意外にもご主人さまは柔和に接してくださいました。

更には、恐らく秋葉さまから情報を仕入れていたのでしょう、手料理に悪戦苦闘しているわたしの試食役を申し出てくださったのです。

もちろん、ご主人さまが好意的に接することでわたしを懐柔しようとしていることぐらいは分かります。しかし、遠野家以外、しかも出来れば志貴さまと同じ男性の方に試食して戴きたかったわたしとしては渡りに船だったのです。

……まあ、それだけではなく。秋葉さまを堕としてみせた男性に、興味があったというのも事実ではありますが。

「どうぞお召し上がりください、ご主人さま」

うん、と頷くご主人さま。

しかし箸を持とうとはしません。何故なら、それはわたしの役目だからです。

横から手を伸ばし箸を持ち、かに玉を切り取って掴みます。そのままご主人さまの口許に持っていき、――ちょっと赤面しながら、

「で、では。……あーん……」

ぱくり。

わたしの料理が咀嚼されるのをどきどきしながら見詰めます。もぐもぐ、ごくん。ひと摘まみのかに玉はすぐに飲み込まれてしまいました。

「どう、でしょうか？　……美味しい？　そ、そうですかっ」

ぱあ、と顔が輝くのを抑えられません。

最初の頃は、ご主人さまにも駄目出しをされるような有り様でした。自分でもどんどん料理の腕が上がっているのを感じますが、それ

をご主人さまに認めて戴けるというのは第三者に客観的に保証して貰えるということ。
　このぶんなら、そろそろ志貴さまに作ってさしあげても――と思っていると、
「あんっ♡　ご主人さま、またっ……」
　今度はお尻を触られてしまいました。ショーツの上からすりすりと撫で付けられ、椅子との間で潰れた尻肉の弾力を確かめられます。
「で、ですからこういうことは……試食の見返り？　う、うぅ……♡」
　そう言われると強く出れません。お願いして事情に付き合って戴いているのはこちらなのですから。
　それに、この二人きりの試食会のせいで、ご主人さまのセクハラに対する抵抗が薄くなっているようにも感じます。お互い下着一丁と裸エプロンなんておかしな格好でいるのも拍車を掛けているのでしょう。そもそも秋葉さまも仰っていた通り着るのを泣いて嫌がっていたこの服装も、今では当然のように着ている始末。
「ふうっ、ふ……♡　ご主人さま、イタズラばかりしていないで、わたしの料理に集中なさってください……ほら、あーん」
　身体中をまさぐられ、否応にも体温が上昇していきます。それだけご主人さまが上手いのか、軽く手のひらで撫でられるだけでも快楽を得てしまいます。
（いけない、またおまんこが濡れて……。ご主人さまに見付かってしまいます）
　これまで押し倒されたりしたことはないとはいえ、秋葉さまをあしたご主人さまです。もし気付かれたら襲われてしまうかも知れません。
　それは、防がなくては。わたしの恋人は志貴さまです。
　たとえ秋葉さまが仰る通りに、オスとしての性能が大幅に劣っているのだとしても。
　ご主人さまの方が、メスとして幸せにしてくれる相手でも。
「秋葉さまより可愛い……？　も、もう。そんなお世辞には誤魔化されません……♡　ご主人さまに試食して戴いているのだって志貴さ

まの為なんですからっ。そんな風に口説かれたって靡きませんからね……♡」
首もとをくすぐられ、手のひらに頬を擦り付けながら言います。
料理を完食されるまで、ご主人さまのセクハラは続きました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「はあ……っ、はぁ……。志貴さま、良かったです……」
その夜。わたしは、志貴さまとベッドを共にしていました。
お互い汗だくで抱き合って、事後の荒くなった息を整えます。性交のあと、相手の体温を感じて心を充たす、大切な時間でした。
「ふふっ。四回もなんて、流石です志貴さま。わたしもうクタクタになってしまいました」
わたしが言うと、志貴さまは恥ずかしそうに笑いました。そんな反応をされるとこっちも照れてしまいます。
近頃、志貴さまはわたしを求めることが多くなったように思います。
恐らくそれは、秋葉さまの心変わりが関係しているのでしょう。きっと志貴さまも寂しいのではないでしょうか。
それならアルクェイドさまやシエルさまをお誘いすれば良いのにとも思うのですが、どうやらお二人とは距離を置いている様子。
その理由は分かりませんが、志貴さまが求めるのならば、わたしに断る理由はありません。
「志貴さま。では、そろそろわたしは自分の部屋に……え？　このままいて欲しい、ですか」
なかなかに驚きました。志貴さまが寂しがっている、というのはわたしの勘違いではなさそうです。
「ですが……いえ、何でも。ええ、もちろん構いません。今日は志貴さまに添い寝させて戴きます」

ぎゅう、と抱き締めると、志貴さまは安心したように目を瞑られました。胸元に顔を埋められた志貴さまの呼吸が、段々と深く長くなっていきます。
わたしは志貴さまが眠られるまで、その背中を撫で続けていました。

「ん……くっ、は……」
くちゅくちゅ。にちゅにちゅっ。
とろとろに潤い、蜜を垂れ流すおまんこを指先で弄ります。
自分の細い指では満足に膣を広げることは出来ません。それでも疼いてやまない身体のままでは到底眠りに就けないでしょう。
すぐ隣には寝息を立てる志貴さま。
わたしはその横で、ひとり自慰に励んでいました。
志貴さまに四回も出して戴いたえっちの直後。自分でも何をやっているのかと思います。
だけど――はっきりと言えば。志貴さまとのえっちでは、もう、まったく、ぜんぜん、満たされないのです。
こうなってしまったのはいつからだろう、と考えると、簡単に答えは出ます。
それは、あの方と出会ってから。ご主人さまと出会い、秋葉さまの堕ちっぷりを目の当たりにしてからです。
「あぅっ、はっ、は……。足り、ないっ……」
恋人が眠る横でする性欲解消オナニーのなんと惨めなことでしょう。
これはただ普通にする自慰とは違います。秋葉さまの言う、志貴さまのえっちでは真に満たされないということ。それを自分自身の身でもって実感させられているのです。
脳裏に浮かぶのは、
「ごしゅじん、さま……。ご主人さまっ♡」

志貴さまではなくって。
秋葉さまを手篭めにした、あの酷い人。
耳の奥で響く秋葉さまの艶声を手繰り寄せて。
自分がそうされる妄想で股を濡らします。
「あっ、あぁっ……♡　ご主人さま♡　いけません、そんな……♡」
事あるごとにわたしに悪戯をしてくるご主人さま。おっぱいを揉まれて、お尻を触られて。最初は嫌だったはずのそれらは、今ではオナニーのおかずのひとつ。ご主人さまの手のひらを思い出すと身体が盛んに反応していきます。
「ふーっ♡　ふぐぅ……♡　あー……♡」
膝を擦り合わせながら、人差し指と中指でぐちゅぐちゅと。
抑えていた音は次第に大きくなって、部屋に響くほど。
ご主人さまの部屋で股を濡らしていたせいで、今日はムラムラが溜まっていました。
そのせいもあり志貴さまに抱いて戴いたのですが、性欲を晴らすことは出来ず、むしろ余計に疼いてしまうばかり。志貴さまとのえっちよりご主人さまを想ってする自慰の方が気持ちいいくらいなのです。
「あ……志貴さまの精液、出てきちゃった……」
あまりかき回し過ぎたせいか、とろりと白濁液が中から零れ出てしまいました。
志貴さまがくださったわたしの胎に種を植え付けるための大切な液体だというのに、こぽこぽと膣口から溢れ、出ていってしまいます。それを勿体ないとも思わず、潤滑油にしてオナニーするわたし。
以前の自分が見たら卒倒するでしょう。でも、一度変わってしまったらもう戻らないのです。
「ご主人さま……、精液、濃いです……♡　もっとください、もっと……♡」
志貴さまの精液を使って見たことのないご主人さまの精液を想像します。
秋葉さまはきっとたらふくお腹に収めているそれを。
このあと、何度繰り返しても、何度達しても、わたしの疼きが満た

されることはありませんでした。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「よいしょ、っと。……買い忘れはありませんね」

3日後、わたしは再びご主人さまの部屋に呼び出されました。

秋葉さまはほぼ毎日ご主人さまの部屋に入り浸っている様子ですが、毎回わたしを呼びつける訳ではありません。2、3日間が空くことはざらです。

今日はお買い物をしてくるようにとの言い付けだったので、指定された食料品や日用品を量販店で購入して来ました。

両手に持った買い物袋をテーブルに置きます。数日分の買い物が詰まった袋をここまで持ってくるのはかなり骨でした。

『――――っ、――――♡』

「……はあ。本当に飽きませんね、あのお二人」

お決まりの裸エプロンに着替えつつ、いつもの如く寝室から漏れ聞こえる嬌声に呆れた溜め息をつきます。

と、言いつつも。わたしも早速、あそこが湿っているのですが。

……この3日間は中々に苦しいものでした。

ご主人さまでオナニーすることは今までも何度かあったのですが、それで満足出来ていました。

なのに今回は、何度しても志貴さまに抱かれても満たされず、むしろ逆効果な気さえします。仕事をしている間も股間がむずむずする始末。まるで何か抑えていたモノが閾値を超えてしまったかのようです。

この、本来なら拒むべきはずの呼び出しさえ、今では心待ちにしているくらい。

ご主人さまにどんなセクハラをされるのだろう、どんな料理を作って差し上げよう――と自然に思ってしまっています。

「いけない……仕事、仕事と……。秋葉さまに怒られてしまいます」
切り替えたように言って、いつもの洗濯や掃除に取り掛かります。
下着にじんわり、染みが広がっているのを感じながら。

――――それじゃあ後はよろしくね、翡翠。前回サボってた寝室の掃除もよろしく。
「お見通しでしたか……」
ばたん、と秋葉さまの出ていったドアが閉まりました。
帰り際、秋葉さまに釘を刺されてしまいました。
まあ、毎日のように滞在している部屋です。すぐに分かってしまうでしょう。
さて、他の仕事は全て終わりました。
試食用の食事――今日は肉じゃが――も済んであとは秋葉さまから頼まれた寝室の掃除。なのですが、一向にご主人さまは部屋から出て来られません。
恐らくは、秋葉さまを抱いたあとそのまま寝てしまっているのでしょう。このようなことは初めてではありません。
出て来ないのならわたしから行くしかありません。仕方なくドアを開けると、やはり暗い部屋の中央のベッドからいびきが聞こえました。
「……ご主人さま。掃除をしますので起きてくださいませ」
呼び掛けますが、大の字で寝ているご主人さまに起きる様子はありません。秋葉さまの用意した、人が4、5人寝そべれそうなベッドの上で爆睡してらっしゃいます。
上半身は裸。下半身は掛け布団に隠れて見えませんが、恐らく下着だけでしょう。
その姿は、失礼ですが豚か鮭を彷彿とさせます。世の女性からは毛嫌いされるタイプでしょう。外見で人を判断するつもりはありませんが、道ですれ違ったらわたしも距離を取りそうな見た目です。
「……貴方のような方に、何故。秋葉さまは……」

惚れ込んでしまったのでしょう。
……なんて、答えは分かっています。それはえっちの時の秋葉さまの様子を聞けば自ずと分かります。
「……」
実際。
実際、どうなのでしょうか。
秋葉さまとて処女ではありません。志貴さまと愛を交わしていたことはわたしも知っています。そして以前は、志貴さまを絶倫だと言ってえっちに満足されていたことも。
そんな秋葉さまの認識を根底から覆し、志貴さまとのえっちを物足りないものにさせ、そして狂ったようにアクメを決めさせるまでに堕としたモノ。
そんなご主人さまのおちんちんは――いったい、どんなモノなのでしょうか。
「あのう……ご主人さま……？　……眠っていらっしゃいますか……？」
恐る恐る囁いてみますが、反応はありません。軽く揺すっても呻き声すら上げません。
この時。いつの間にかいびきが止まっていることに、緊張していたわたしは気付かなかったのです。
「……少し。ほんの少しだけ……、見てみるだけ……」
言い訳のように呟きながら、掛け布団をめくります。
緩んだお腹、脂肪のついた脚。そしてその間に、トランクスに包まれた股間がありました。
「……ごくっ」
思わず、生唾を飲み込みました。
あの中に。秋葉さまをやっつけたおちんちんがある。志貴さまとのえっちを上書きしてしまった肉棒がある……。
ショーツの湿り気がやけに気になります。破廉恥な格好をしているからでしょうか。股間の疼きが止まらず、自分がおかしなことをしているのも二の次に感じてしまいます。

もぞもぞ、と布団の中に顔を突っ込みました。
秋葉さまとの行為を物語る、布団に籠った生臭いにおい。それに頭を痺れさせて。ご主人さまの下着を下ろそうとする――と。
「え――むぐうっ!?　ん、んん――っ!!???」
いきなり上から頭を押さえ付けられ、布団から出られなくされてしまいました。
ご主人さまの大きな手が、わたしの頭を押さえたのです。
顔面は、当然いま目の前にあったご主人さまの股間へ。更にキツくなるにおいと、フランクフルトみたいな感触を直に感じます。
（なっ、なにこれなにこれっ……♡）
精液のにおいもおちんちんの感触も、志貴さまで知っているはず。
なのに、いま鼻っ面に密着しているそれはまるで別のモノのよう。志貴さまなら青臭いだけの精臭は鼻腔に突き刺さり目眩がするほど。そしてかたちと大きさは、もはや小枝と大樹の違いです。
（秋葉さま、こんなモノでおまんこを……っ♡　これで貫かれたら、お股が広がって戻らなくなっちゃいます……♡）
圧倒的な存在感、立ち向かっても女として完全に制圧されてしまうのが見え見えの男性器。
抵抗しなければいけないはずなのに、くたりと力が抜けてしまいます。
むにゅむにゅと顔にくっつくおちんちん。その感触に浸っていると、今度は、お尻をがっちりと掴まれました。
「へっ……ひぁぁあああ!??」
ずらされたショーツの脇から、ぬるりと太い指が滑り込みます。
わたしのおまんこはあっさりとご主人さまの指を飲み込んでしまいました。とっくにぬるぬるの割れ目を指がくちゅくちゅと掻き乱します。
「あっ、ああっ♡　やだ、ご主人さまぁっ♡　そこは駄目ですぅう♡」
これまで下着の上から胸や尻を触られたのとは訳が違います。
直接の手マン、しかも顔は布団にくるまれご主人さまの下半身に密

着しながら。頭がどうかしてしまいそう。
「ひっ……待って、なんで指を曲げて……」
ご主人さまが、おまんこの中の指先をフックのように曲げました。膣の天井へ引っ掻けます。
ぞわり、と背筋が総毛立って。
ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡
こりこりこりこりっ♡♡
「――ぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!??♡♡」
指先を尖らせた抉るような手マン。痛みを感じる寸前まで激しい刺激がわたしのおまんこを攻撃します。
ごっちゅごっちゅとおまんこを出入りする指。それにあわせて飛び散る愛液。完全に力が抜けベッドに突っ伏してしまいますが、下半身は魚が釣り針で釣られるように、ご主人さまの指で引っ張り上げられます。
「お゛ッお゛ッお゛ッ♡♡　っっ♡♡」
下半身をおまんこに引っ掛けられた指一本で吊られてしまい、がくがくと震える足。膝を落ち着けることも出来ません。指だけで支配された下半身に快楽が襲います。
（気持ちいい、気持ちいい気持ちいいっ……♡　自分でするオナニーよりもずっと♡　志貴さまに抱かれるよりも♡♡　ご主人さまにおまんこほじられるの、良すぎぃ……っ♡♡）
ここ数日溜まっていた性欲が存分に解消されていきます。痒くて仕方なかった所に手が届くような快楽。
ご主人さまの太く節くれ立った指。それにおまんこを玩具にされるのが志貴さまとのえっちよりも感じるだなんて。
頭は布団をかぶって、腰だけ突き出して。みっともない格好だというのに、股間の刺激が堪りません。
どうにか快感を逃がそうと尻を振りますが逆効果だったよう。ごっちゅんごっちゅんと容赦のない掘削でおまんこを追い詰められます。
「お゛っ♡　あっぎぃ♡　ひぐぅぅぅぅっ♡」

ぷしっ、ぷしゃぁあああ……♡♡
股間から勢いよく体液が吹き出しました。
お漏らし、ではありません。あまりの快感に潮を噴いてしまったのです。志貴さまとのえっちでも経験したことのなかった潮吹きを、ご主人さまには指先だけで教えられてしまいました。
「あっイク……♡♡　イキますっ♡♡　ご主人さまっ♡♡　すっ、少し抑えてっ♡♡　イッちゃいますっ、イクイクっ、あっあっ、あ、……っぐぅううう～～ッッ……♡♡♡」
がくがくがくっ♡♡
ぽた、ぽた……♡♡
「はぁーっ♡　はぁーっ♡　はぁぁ……♡♡」
アクメ、してしまいました。
おまんこを絶頂が痺れさせ、愛液が滴になって床に落ちていきます。もう太ももはべたべた。ご主人さまから見ればお漏らしと間違えるほどでしょう。
（恥ずかしい……、でもご主人さまの指が気持ちよすぎて……♡♡）
余韻に浸っていると布団が剥がされました。
すっとした涼しさ。ふらふらと目線を上げると面白がっているご主人さまの顔。
「ご主人さまぁ……♡　ひどい、ひどいですっ♡　いきなりこんなこと……♡　わたしはお掃除しに来ただけですのに……♡」
ごめんごめん、と適当な謝罪。まったく悪びれた様子はありません。
――それよりも翡翠ちゃん。どうやらココに興味があるみたいだね。
「えぅっ……♡　そ、それは……♡」
ご主人さまが、ご自分の股間――おちんちんを指差して言います。
とっさに否定出来ません。言葉に詰まったわたしに、ご主人さまが提案されました。
「え……交換条件……って♡　な、なんですかそれぇ……♡」
――チンポに興味があるなら好きにさせてあげる。

その代わり、今日は翡翠ちゃんの口で食べさせて欲しいなあ。
「……っ♡♡」
まずい、です。
男性経験の浅いわたしにも分かります。これはもう、セクハラとかいう垣根を越えています。
何より、今まではご主人さまの一方的ないたずらだったのに、よりによってここで、わたしの了解を得ようというのが――。
「あ……っ、は♡　ご主人さま、説得のつもりですか……♡」
くちゅくちゅくちゅ♡♡
ご主人さまが、あえてさする程度に弱くおまんこを擦ります。
脳に伝わる甘い刺激。それは元から緩んでいたわたしの判断力を完全に溶かしてしまいました。
「っ……、今日だけ……♡　ぜったいぜったい、今日だけですからね……♡」
ご主人さまと見詰め合って答えます。
これが不貞であることなど……すっかり頭から飛んでいました。

「は、はい♡　今日は肉じゃがを作ってみました♡　男性が喜ぶって見ましたので……♡」
リビングに移動したわたしがお皿を見せると、ご主人さまは喜んでくださったようでした。わたしはその顔を至近距離で眺めます。
（ち、近い……なんだか意識してしまう……）
息が混ざるほど距離の近いご主人さま。
それもそのはず。今わたしは、ご主人さまの膝に座っていました。
椅子に腰掛けたご主人さま。その膝に跨がる格好です。
わたしはびしょ濡れになった下着も脱いで、本当の裸エプロン。ご主人さまはパンツ一丁。一応お互いの局部は隠しているものの、素肌の大部分が触れあっています。
「んんっ♡　おっぱい本当にお好きですね……わたしだってそんなに

大きい訳じゃないのに……♡」
むぎゅ～っ、とエプロンの上からわたしの胸元に顔を埋めるご主人さま。
更に両手は左右の尻たぶを掴んでもみもみ。わたしの身体をしっかり味わってやる、とでも言わんばかりです。
「これは条件に入ってないのでは……♡　もう、仕方ないお方。秋葉さまでは満たされないですものね……♡」
ゾクゾクっと背筋が震えます。それは身体を触れられているからか、秋葉さまが惚れ込むご主人さまの欲望を、秋葉さまではなくわたしが満たして差し上げているからか。
「ご、ご主人さま、その辺に……♡　ごはん冷めてしまいます♡」
放っておけばずっとおっぱいとお尻を弄っていそうなご主人さまを止めてお箸に手を伸ばします。
じゃがいもを摘まんで、すこし躊躇しながら――ぱくり、と頬張りました。
口の中でほろほろとじゃがいもが崩れます。それを舌先に乗せて、
「ごひゅじんさま……♡　あ、あーん……♡」
同じ『あーん』でも今までとは訳が違います。
心臓をばっくんばっくんさせながら、ご主人さまのお口に、わたしの唇を被せました。
「んむっ♡♡　はふぅ♡♡」
じゃがいもをご主人さまの口に押し込んで、ぱっと離れます。
唇が、燃えるように熱い。ご主人さまの唇は少しかさついていて年季を感じさせます。
「どうですか……？　こ、これだけじゃ分からないっ？　ああもう……♡」
しょうがないので今度はお肉を咥えます。
甘辛の味付けの肉を、口の中でいくつかに噛み切ってからご主人さまへ。ご主人さまは唇をくっ付けたまま、もぐもぐと咀嚼しました。ごくんと飲み込むのを確かめて唇を離します。
「では次、人参です……♡」

三度、むちゅうう……っと。
わたしの半開きの唇をこじ開けて、ご主人さまの舌が潜り込みます。恐らく……いや確実にわざとでしょう、執拗にわたしの口内を舐めながら人参を奪っていきます。
肉じゃがの汁と、わたしとご主人さまの唾液。混ざりあったそれは、もうどれがどの味なのか分かりません。
（そろそろ……、触ってもいいでしょうか……♡）
これだけ食べさせて差し上げれば、股間を触らせて戴いても良いでしょう。
早く、早く触りたい。ご主人さまのおちんちんがどんなモノなのか、早くこの指で確かめたい……。
お伺いを立てるようにすりすりとご主人さまのお腹を撫でます。すると腕を掴まれたと思った途端、ずっぽりと手をパンツの中に突っ込まされました。
（っ――――!?）
指先にはぶよぶよした奇妙な感触。
そっと手のひらで包みます。拳より一回り小さいくらいの膨らみが二つ。
間違いありません。これは、ご主人さまの睾丸、いわゆる金玉です。
この中で――ご主人さまの精液が。
しわくちゃで気味の悪い玉袋だというのに、何故か、大切なモノを扱うように手のひらで持ち上げてしまいます。
ずっしりとした重さ、大きさは、たぶん志貴さまよりもかなり上。ならば、本体は……。
鼓動が早まるのを感じながら手を滑らせます。
陰嚢の上に聳えるおちんちん。その幹に、ぎゅっと指を回しました。
（っっ……太……!?）
棍棒と間違えそうな、その太さ。
赤ちゃんの腕くらいあるのではないでしょうか。回した指先をくっ付けることが出来ません。志貴さまとの違いは明らかです。志

貴さまのモノは、わたしの親指と人差し指で一周できたのですから。
（えっえっ……こ、これがおちんちん……？　じゃあ今までのわたしが知ってたのは……??）
分かってはいましたが。
これほどに、差があるとは。
ぐらぁ――――と。
何か、致命的な部分が揺らいでいます。
（ま、まだまだ、まだですっ。まだ志貴さまは負けてません……！）
なぜだか焦りながら手を上へ滑らせます。
根本を離れて、伸びる裏筋。するすると上へ、上へ……
（あ、あれ……。おかしいっ……）
終わらない。おちんちんが終わりません。
わたしが唯一知るおちんちん――志貴さまのそれなら、もうとっくにカリ首を通り越して先端へ差し掛かっているはず。
なのに、ご主人さまのおちんちんは、志貴さまの長さを経てもまだまだ伸びて、伸びて、伸びて……
そうして、志貴さまの5割増しの所で、ようやく膨れ上がった亀頭に到達しました。
（嘘♡♡）
これ、本当に志貴さまと同じ器官なのでしょうか。
精子を作る金玉も。膣を割広げる太さも。
易々と子宮を突き上げるだろう長さも。
志貴さまとはまるで別格……。重ねたら志貴さまのおちんちんが隠れて見えなくなってしまうくらい。
「あむぅ……!?　んちゅ、んんっ♡♡　むちゅちゅっ♡♡」
ご主人さまからのキス。もうごはんを口移しするなんて大義名分を捨てた、ただわたしの口を吸うだけのキス……。
「じゅるるるっ♡♡　じゅず～～っ♡♡」
舌を思いっきり吸い上げられて頭が痺れる……。唾液を啜られてる……。もう遠慮しないとばかりにおっぱいはもみくちゃです。
すりすり♡　しゅっしゅっしゅっ♡

思わずこっちも両手を動かしてしまいます。
ご主人さまのパンツに突っ込んだ手のひらでおちんちんを包んで、しこ、しこ、しこ。攻撃的に膨れ上がったおちんちんは、志貴さまと違ってごつごつしてて、血管が浮いてて。少し怖いくらいのフォルム。
すると、わたしの手コキに反応したのか。
――むくむくっと、ご主人さまのおちんちんが更に勃起。さっきまでのはまだ半勃ちだったらしく、もう志貴さまの倍近い格違いのおちんちんに進化してしまいました。
「す……凄ぃ……♡♡」
こうなると比べていたこと自体が間違いだったってよく分かります。確実にわたしの顎先からつむじより長いでしょう。
こんな硬くて大きいモノ、女には……わたしには身体中どこを探してもありません。自分にはないモノを持っているご主人さまに、恐怖と、怯えと、オスとしての……崇敬が……
「っぐ、お〝ッ……お、お、お……♡♡♡」
ぶるぶるっとお尻が震えて、快感の波が膣から上って、子宮へ伝って。
おまんこに触れてもいないのにおちんちんを握っただけで……ご主人さまの強さと大きさを実感しただけで甘イキ……。
怖い、怖いです。何が怖いって、これだけで、志貴さまに抱かれるより気持ちいいのが――
「はふ、むぢゅるるるっ♡♡　れろれろぉ♡♡」
舌を絡めながらの手コキ。わたしはおちんちんを、ご主人さまはおっぱいとお尻を。キスしながら相手の身体を確め合います。
「ご主人さま……♡　おちんちん、外に出しちゃいますね……♡」
勃起おちんちんのせいで中から突っ張ったパンツを下ろします……が、長過ぎるおちんちん、その先っぽが引っ掛かってパンツが下ろせません。
パンツの端に指をかけて、苦心しながら下ろすと……
びたん！　と、跳ね上がったおちんちんがご主人さまの下腹部を打

ちました。
「ひえぇぇ♡♡♡」
あんまりにも凄すぎて間抜けな声が出てしまいました。
初めて目にした、ご主人さまのおちんちんは……
大きさも太さもも想像以上。挿れたらヘソの裏っかわを優に通り越すだろう長さ、限界までおまんこを広げるだろう太さ。手で握っていただけでは分からない細部の形。恐ろしい赤黒い色。
お腹がひくひく痙攣しています。目の当たりにしたオスの威圧感に、わたしの子宮がおののいてる……。
それなのにどぷどぷと愛液を吐き出して、子宮口を半開きにして。受け入れ体制を整え始めています。
裸エプロンの裏はもうぐっちょぐちょ。ぬるついた粘液が股間から垂れ流し。
ほんのちょっと、エプロンをめくって腰を浮かせて、下ろせば。ご主人さまのおちんちんがわたしのおまんこをみっちり満たしてしまう……
――――いけないいけない。これじゃ浮気になっちゃうね。
「へあ??」
ご主人さまがよく分からないことを言いました。
呆けていた思考がゆっくりと回復します。
「たっ……確かに、浮気になってしまいますけどっ……♡」
おまんこは疼きまくってご主人さまを求めています。
でも確かに。このままでは志貴さまを裏切ることになります。ただでさえ、秋葉さまを失って傷付いている志貴さまを。
そんなわたしに、ご主人さまが再び提案しました。
傍の戸棚から、避妊具――コンドームを取り出して、
「お、お互いを……オナニーに使う……？」
ご主人さまが提案されたのは、相手の性器を使って性欲を解消すること。
コンドームを装着し、妊娠は避けた状態でならセックスには――少なくとも子作りにはならないから。

ご主人さまはわたしのおまんこオナホで、わたしはご主人さまのおちんちんバイブで。
あくまで股間を擦り合わせるだけの……ちょっとセックスに似ているだけの、相互オナニー……。
「そ……そっか、そうですね……♡
ご主人さま、名案です♡　それなら浮気にはなりませんよね♡♡」
あからさまな建前、誤魔化しですが……
正直……もう我慢出来ません。ぽっかり空いた穴が、ご主人さまをお待ちしています。
震える腰を上げ、おちんちんに入口をあてがい……
ずぷぷぷ……っ♡♡
「お、おっき……すぎぃ……っ」
おまんこが今までにないくらい拡張されます。
一気に腰を下ろすことは出来ません。少しずつ、慣らさないと……
「ぐ、うう、う、う……♡」
ぐぽっ♡むちゅむちゅむちゅ♡
肉の壁が無理やり開かれる音がします。ご主人さまのゴム付きおちんちんに、開拓されていく……。
やがて、わたしが知る最奥……志貴さまの長さまで到達しました。
けれど、恐る恐る股間を見てみれば……
「ま、まだそんなに♡♡　お腹抉れちゃいます♡♡」
ご主人さまのおちんちんは、まだ半分近く残っています。
こんなの絶対無理。根本まで挿入したらわたしのおまんこが壊れてしまいます。逞しいおちんちんに、内臓を潰されてしまう。
ひくつくお尻を上げて、おちんちんを抜こうとします。ずるずると膣を擦っていく感触、それだけで性感が高まります。
「ご、ごめんなさい、ご主人さま♡　一旦抜いて……」
――ごちゅっ!!
「オ〝ッ〝!??!♡♡」
ご主人さまは、そんな甘えを許してくださいませんでした。
腰を掴まれ、引きずり下ろされたわたしのおまんこと、突き上げら

れたご主人さまのおちんちん。
思いっきりぶつかった二つの性器の勝負は……当然ご主人さまの勝ち。子宮口にぶち当たった亀頭が子宮をひしゃげさせました。
「ッッッ♡♡　お゛ご゛ッ♡♡　子宮……持ち上げられ……ッ♡♡♡」
ゴンッ！　ゴンッ！　ゴンッ！
「オ゛ッ♡　オ゛ッ♡　オ゛ッ♡」
お互いに相手を使う、なんて、何を勘違いしていたのでしょうか。
これは……一方的な蹂躙です。わたしがご主人さまを使う余地なんてありません。
わたしという肉オナホを、ご主人さまがおちんちんを扱くために使う。わたしはまんまとその状況に追い込まれてしまったのでした。
「ぐッおおおッ♡♡　ごっ♡　ご主人さまっ♡　お許しをっ♡　オ゛オ゛ッ♡♡」
自分とは思えない野太い声が迸りました。
ご主人さまに一突きされるごとに、耐え難いアクメが襲います。子宮口を殴られるのも、子宮を持ち上げられられるのも、生まれて初めての感覚。
ただ膣を前後するだけだった志貴さまのえっちとは訳が違う、肉のぶつかり合う交尾――
「ぶちゅちゅっ♡　ずるる～っ♡　じゅるるる♡」
ご主人さまに抱きついて必死の口づけ。
上下するおちんちんに合わせて、いつの間にかわたしも腰を振っていました。ぱん、ぱん、ぱん♡　とわたしのお尻とご主人さまの太ももがぶつかります。
殴られ続けた子宮が根を上げたかのように口を開いていきます。こんなに強いオスなら、もう志貴さまじゃなくてもいいじゃないか……って。このオスの子を孕んでしまおう……って。
でも、孕めません。ゴムを着けてるから、わたしのお腹に精液は入って来ません。
安心するべきことのはずなのに、何故かそれが……

「あっあっ♡　来るっ♡　いちばん大きいアクメ来ちゃいますっ……♡♡」
子宮が孕ませ待ち状態になり、一層大きな波が来てしまいました。
そこに、ご主人さまが力一杯ぐりぐりと……形を覚えさせるかのようにおちんちんを押し付けます。
射精寸前のおちんちんとキスした子宮が、精子を貰えると早とちりして……

びゅるるるるっ♡♡　びゅる〜〜っっ♡♡
びゅくっ♡　びゅるるる♡♡

「――――、――――♡♡」
意識が、真っ白に。
おまんこで脈動するおちんちんを始点に、背筋へ、脳天へ……アクメの電流が走りました。
「あ――っ♡　あぁ――……♡♡」
気持ちいい。とんでもなく気持ちいいのですが……子宮は物足りないと叫んでいます。
びゅくん、びゅくんと子宮口の目の前での射精。
それに応じて口を開いているのに、一滴も中には入って来ません。
薄皮一枚向こうに極上のオスのエキスがあるというのに、それを飲み干せない。
そんな生殺しに、子宮が泣いているのです。
「お〝……ほ……♡」
ずるり、と引き抜かれたおちんちん。
刀身を包んでいたコンドームが外されます。たっぷり中身を閉じ込めて膨らんだ、その先っぽ。
（おしっこみたいにたくさん……♡　志貴さまの……何回ぶんでしょう……♡）
わたしとご主人さまの性交の証であるそれを、ブリムにくくりつけられました。ぶらぁん、とわたしの額で揺れています。

「ご主人さま♡　とても素敵なえっち……あ、いえ、オナニーでした♡
わたしもう腰が抜けて……えっ？　ま、まだ……♡　あと十回は出せるって……あ♡　あぁっ……♡♡」
もう一度、新たな避妊具が取り付けられたおちんちんがわたしの中に潜り込みます。
結局――この日はゴムを使いきり、ブリムがコンドームまみれになるまで、おまんこをオナニーに使われてしまいました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「あら翡翠、こんな時間まで料理の練習？　精が出るわね」
「秋葉さま」
夜遅く。遠野邸の厨房で料理をしていると、秋葉さまに見つかってしまいました。
夜分のため静かにしていたつもりなのですが、起こしてしまったでしょうか。
「申し訳ありません。騒がしくしてしまいまして」
「ううん、そんなことないわ。水を飲みに来ただけだから」
水をくみコップをあおる秋葉さま。
ふとわたしの料理を見て、
「……あら？　なに、グラタンを作ってるの？　一口貰ってもいい？
「ええ、勿論です」
言うと、ひとさじぱくりとわたしのグラタンを口に含みました。
「あら美味しい。貴女の料理の腕もずいぶん上がったじゃない。
……あれ。でも兄さん、グラタンは嫌いだって言ってなかったっけ」
「ええと……そうでしたか？」
今日の夕食でのこと。久々に秋葉さまが夕食に顔を出し、志貴さま

と会話が弾まれていました。
その時に、ふと好きな料理の話題になったのですが……
「貴女も聞いてたでしょう？　兄さん、グラタンが苦手だって。なのに何で……あ」
なにかに気付いたように秋葉さまが眉を上げます。
そして、悪戯っぽい猫みたいな顔でわたしを覗き込みました。
「そっかそっかぁ。成る程ねえ。へー、ふーん」
「……な、何でしょうか秋葉さま」
「べっつにー？　何でもないわ。まあ頑張って、応援してるから」
ひらひらと手を振って秋葉さまは出ていきます。
と思いきや、くるりと振り返って、
「そうそう。ひとつアドバイスしてあげるけど。
もうちょっとね、バターを入れた方がいいと思うわ。あの人、濃い味が好みだから」
「……ありがとうございます」
そう言って、今度こそ秋葉さまは自室に戻られました。

「あうっ♡　あっあっ♡　これ深い……っ♡」
ぱん、ぱぁんとご主人さまの腰が叩きつけられます。
テーブルに手をついたわたしは後ろから挿入されていました。
いつもの通りにゴムをまとったおちんちんがおまんこを擦ります。
もう下着を着ける習慣はなくなり、ご主人さまと二人のときは裸エプロンが普通になってしまいました。
ブリムにはもう3つの精液入りコンドーム。カラフルなそれが、ご主人さまのピストンに合わせてぺたぺたと揺れます。
ご主人さまの精力は底無しで、今日も秋葉さまを抱き潰したあとだというのに全く萎える気配がありません。おちんちんの硬さも、精液の量と濃さも変わらず……。
以前は志貴さまを絶倫だ、などと言っていましたが、認識を改めざ

るを得ません。
本当の絶倫とは、ご主人さまのような男性を指すのでしょう。ご主人さまと比べれば、志貴さまはこう言うと悪いですが早漏で回数が多いだけ。薄い精液を数回に分けて射精しているだけです。
なんせ志貴さまの数回ぶんが、このコンドームひとつぶんなのですから。
「あ、んんっ……♡　またいっぱい……♡」
秋葉さまも含めればもう本日何発目か分からない射精がわたしの膣内で弾けます。
ご主人さまの形にぴったり合うようになってしまった子宮口でぷっくりゴムの先が膨れていくのを感じます。そして、その中身を求めるかのようにくぱくぱと吸い付くのも。
（切、ない……。お腹が……）
アクメに達した身体。おまんこで跳ねるおちんちん。
そこで得られるはずのオスの遺伝子が流れて来ないことにわたしのメスの部分が違和感を覚えています。
ご主人さまに何度イカされても空っぽの子宮は不満を訴えるばかり。オナニーしても志貴さまに抱かれても満たされません。呼び出しが三日間空き、身体の疼きが止まらなかった時よりも更に辛い。
それを晴らす方法は分かっています。分かりきって、います。
けれども。秋葉さまを失い、志貴さまの為に――と意気込んでいたわたしが。
秋葉さまと同じになるというのは、とても……
――翡翠ちゃん。今日も美味しかったよ。
「えっ……あ、あ♡　そうですか♡　今日のはかなり時間をかけたんですよ♡」
エプロンでおちんちんを拭うご主人さまが料理を誉めてくださいました。
テーブルの上には完食済みのお皿。――今日はご主人さまの好物であるグラタン。バターをたっぷり入れた、濃い目の味付けでした。
――それじゃ、たまにはお返ししないとね。

そう言うと、ご主人さまはたった今おちんちんから外したコンドームをわたしの眼前に掲げました。

――――ほら、舌出して。

「あ……♡」

恐る恐る舌を伸ばします。

限界まで突き出した唾液の絡む肉舌。その上に……、とろり、とご主人さまの精液が落ちました。

「――――っっ」

途端。

びりり、と、脳髄に電流が――

「ぶ……え゛、、え゛、えッ……♡♡」

ぎりっ……♡

子宮が、絞られた雑巾のよう。まるでご主人さまに掴まれたみたいな錯覚。

いえ、あながち錯覚ではないのかも。舌先に一滴落ちた瞬間、身体が、子宮が。

これがお目当てのオスの精液だって、確信してしまいました。

味蕾を伝って脳を刺す、強すぎる刺激。

舌を伝ってだらだらと精液がお口に入って来ます。黄ばんで、ダマの出来た、どろっどろの濃厚精液。一つめが終わったら、ブリムからゴムを外して間髪入れず二つめ。それを搾り終えたら三つめ、四つめ……。結局、すべてのゴムの中身を注がれてしまいました。

「え゛、え゛、〜ッ……♡　ごぼぉ゛、ぉ゛、ッ♡♡」

上を向いて精液を溜め込み大口を開けたわたしの姿は、さながら精液便所。

舌まで精液の海に浸かり、鼻で息をするしかありません。口の端から精液が溢れてしまっています。

ご主人さまの、にやついた顔。今日も翡翠ちゃんでたくさん出したなぁ――なんて、満足感たっぷりの下卑た笑み。

いいよ、と言われて、わたしは口内の精液を飲み込みました。

「んごっ……ごきゅッ♡　ごくっ♡　んぐっ♡　ごくん♡」

精液は喉にへばりつき、中々飲み干せません。コールタールのような粘性で流れ落ちることを拒みます。
何度も嚥下し、唾液を混ぜて薄め、苦心して胃に送っていく。今まで摂取したことのない液体に内臓は大慌て。初めてアルコールを飲んだときよりも強い反応を示します。
それは、気持ち悪いとか、吐き出したいとかではなくて。
「ぶ、はっ――はぁっ、はあ……♡　あ、熱っ……♡」
かぁぁ――と身体が熱くなり、頭は熱病にかかったように陶然としていきます。
あまりに刺激が強すぎたのか。代謝が上がり、体温が上がって汗が止まりません。
流石に疎いわたしでも分かります。身体はもう、すっかりご主人さまに参っている。ご主人さまの子を孕みたくて孕みたくて仕方ないのです。
――よしよし。全部飲めたね、偉いよ翡翠ちゃん。
「ぁ……♡♡」
優しく頭を撫でて下さるご主人さま。
それだけで、おまんこはぷしぷしと潮を噴いていました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「――ちゃん。翡翠ちゃん？」
「……ん……姉さん」
「あ。翡翠ちゃん、やっと気がついた」
屋敷の窓拭きをしていると後ろから話しかけられました。
振り返ると、声の通り姉さんの顔。今はお庭の掃除中だったはずですが、休憩でしょうか。
「どうかした、姉さん？」
「どうかしたじゃないってば。翡翠ちゃんこそ大丈夫？　最近しょっ

ちゅうぼーっとしてるよ。体調悪いの？」
どうやら窓の前で呆けていたところを庭にいた姉さんに見られてしまったようです。姉さんはわたしの額にぴた、と手を当てて、
「熱は……ないみたい。疲れてるとか？」
「ううん、大丈夫。むしろ調子は良いくらいだから」
「本当？　そうは見えないけどなあ……」
姉さんは心配そうな様子。わたしの言葉もあまり信じていなさそうです。
でも、体調に関しては本当のこと。別にどこも悪いわけではありません。
「大丈夫だってば。心配しないで姉さん。それより、姉さんこそちゃんとお掃除していないと秋葉さまに怒られてしまうわ」
「う……そ、そうだけど。しょうがないなぁ……何かあったらすぐに呼んでね？」
わたしが冗談めかして言うと姉さんは庭へ戻っていきました。
「……」
わたしも窓拭きを再開しますが、しばらくしてまた手が止まってしまいます。
――ご主人さまと最後に会ってから、早一ヶ月が経ちました。
ご主人さま、もとい秋葉さまからの呼び出しはぱったりと途絶えました。秋葉さまが迎えに来いとも部屋を片付けに来いとも言わないのであればわたしとご主人さまの接点はありません。まさかわたしから行きたいと申し出ることも呼ばなくなった理由を聞くことも出来ません。
「……はあ……」
――どうして呼んでくれないのだろう。
自然に頭に浮かんだ言葉をかき消します。
以前は三日で、たった三日間で疼きを抑えられなくなったのです。
この一ヶ月はまさに地獄とでも言うべき状態でした。何度オナニーし、志貴さまに抱かれたことか。そうやって毎日粘膜がすり切れそうなほどにしても、本当に欲しいのはご主人さまの精。

姉さんと話していても。
秋葉さまと一緒にいても。
志貴さまに抱かれている最中だって。
わたしの頭のなかは、もうご主人さまで一杯なのです。
「ふーっ♡　ふ……♡」
ご主人さまのあの逞しいおちんちんを思うだけで吐息が湿ってしまいます。
堪らず指をおまんこに差し入れますが、とうてい足りません。こんな細く短いモノ、ご主人さまには程遠い。
ご主人さまの股間にぶら下がったあのぶっといおちんちんでなければ、満足できないおまんこにされてしまいました。
「ご主人さまぁ……♡」
熱く囁きます。
満足できないのは、おまんこだけではありません。
心の方だって、ご主人さまに可愛がって欲しくて、また料理を食べて頭を撫でて欲しくて、わたしを締め付けるのです。

「ぁ……す、すいません志貴さま。なにか仰いましたか」
志貴さまとの貴重な時間であった夕食時も、もはや時間の浪費にしか感じません。
志貴さま、早く食べ終わらないかな、秋葉さまからの呼び出しが来ないかな――と心ここにあらず。来ないなら来ないでさっさと部屋に戻りオナニーしたくて堪りません。
志貴さまに抱いて戴く、という選択肢ももう選ぶことはないでしょう。この一ヶ月何度か抱かれて改めて分かりましたが、ご主人さまと志貴さまではオスとしての性能が違い過ぎます。志貴さまの性交はただ疲れるだけ。ご主人さまに与えられる快楽を知ってしまった今では抱かれる気など起きようがありません。
そんなこと考えている間に志貴さまは食事を終えていたようです。

食器を置く志貴さまにやっと部屋へ戻れると思ったのも束の間、『翡翠、聞きたいことがあるんだけど』と話し掛けられてしまいました。

「はい。どうかされましたか、志貴さま」

努めていつも通りに返します。志貴さまは鈍いですから、後ろに控えるわたしの内心にも気付いてはいなさそうです。

――――そのさ、秋葉のことなんだけど。

そう前置きして志貴さまは話し始められました。

秋葉さまが家を空ける日が増えたこと。どこか距離を感じるようになったこと。

……そして、学園の教師と密会しているのではないかと『悪い噂』が立っていること。

「……」

さも深刻そうに言う志貴さま。秋葉さまがいけないことをしていると、矯正せねばならないと当然に思っているかのような口振り。

でも、

(それの何がいけないのでしょうか)

確かに、わたしも最初はご主人さまに入れ込む秋葉さまを心配していました。秋葉さまに近づけるべきでない人であると。

しかし、実際は違います。

ご主人さまは是非ともお近づきになるべき素晴らしい御方。まあだらしない所や性に奔放な所はありますが、それを許されて然るべき程に男性として優れた方なのです。

ご主人さまに見初められた秋葉さまがぞっこんになってしまうのも当然でしょう。あのおちんちんに貫かれ子宮をぶたれて参らない女子などいません。秋葉さまはわたしと違い生おちんちんに膣内射精を食らわされるのが日課なのですからなおさらです。

ご主人さまに抱いて戴くことが最優先となる訳ですから屋敷を空けるようになるのも当然の成り行きです。ご主人さまと会うことを悪く言うのは、あの快楽を知らないが為。むしろその方が哀れと言えるでしょう。

そんなことを、つらつらと考えていると、
――けどよかった。翡翠がいてくれるなら、どうにかなるさ。
「……え？」
突然の志貴さまの言葉。
その真っ直ぐさに、どきりとしました。
――翡翠には本当に感謝してる。いつも翡翠が変わらず一緒にいてくれるから、安心出来るんだ。
「志貴……さま」
優しく純粋な言葉に、居心地が悪くなります。
志貴さまは――大切な妹と上手くいっていないのに、気丈に振る舞い、わたしのことも気にかけてくださっている。
それだけでなく、こんなわたしに感謝さえしてくださるというのに、わたしは一体なにをしているのでしょう。
この時間。わたしが控え、志貴さまが食事を召し上がる時間も、以前は貴重なものだと大切にしていたことを思い出しました。
料理だって最初は志貴さまの為に始めたはずなのに、いつの間にかそれを忘れて、ご主人さまと淫蕩な時間に耽っている。
まるで本末転倒。秋葉さまよりよほど酷い裏切りと言えるのではないでしょうか。
ひとしきり悩みを吐き出した志貴さまは吹っ切れたように、
――おかしな話を聞いてくれてありがとう。楽になったよ。今日はおやすみ、翡翠。
そう言って、食堂を後にしました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「……」
志貴さまが自室に戻られてから数時間後。
わたしは厨房にいました。

理由はひとつ、志貴さまに手料理をお作りしていたのです。
いつしか目的を見失っていた料理の練習。ですが何度も繰り返したおかげで、確かにわたしの料理の腕は上がっています。
本来の目的だった、志貴さまに手料理を召し上がって戴くこと。今こそそれを実行すべき時だと思ったのです。
「志貴さま……申し訳ありません。少し、おかしくなっていたようです」
相も変わらず下っ腹は物寂しく疼きます。ですが頭に霧がかかるほどではありません。
酔っていたような心持ちは消え、志貴さまへの……初恋の少年に向ける想いが湧き出すのを感じます。
――――翡翠には本当に感謝してる。
「……それは、わたしの台詞ですよ、志貴さま」
かつて幼い頃、共に森を駆け回った記憶。
住み込みとはいえ姉さん以外に身寄りのないわたしにとって、それはとても大切なわたしを支えるモノだったのです。
志貴さまの好物をお作りして、志貴さまのお部屋でわたしが食べさせて差し上げよう。
決心し取り掛かったわたしの前には、ようやく料理が出来上がっていました。
味付けの控えめな和食。志貴さま好みの落ち着いた食事です。夕食の後ですが、量も少なめで夜食代わりになるのではないでしょうか。
「良し……あとは」
志貴さまのもとへ持っていくだけ。
お盆を持って足早に廊下を進みます。厨房を抜けて廊下へ。長い廊下を進み、志貴さまの部屋がある東館の階段を上ろうとした時、
――――ジリリリリリ!!　と。耳を衝く音が響き渡りました。
「……っ!?」

驚きに肩が跳ね上がってから、鼓動が激しくなります。
それは単純に驚いたからではなく、この音が、一月前までよく聞いていた音だから。
そう。これは、いつも秋葉さまが使っていた、わたしをご主人さまの部屋に呼び出す時の電話のベルです。
「は……、っ……」
心臓がやけにうるさい。額に汗がにじむ。
お盆を置き、震える手で受話器を取って、
「……もしもし。遠野ですが、どちら様――」
『あ♡♡　翡翠、いま……、いま大丈夫っ？♡♡　おっ、おじさまのっ♡♡　部屋に、来て♡♡　欲しいんだけ、ど、ぉおおッ♡♡　っぐ、んぅ〜〜っ♡♡』
がぁーん、と頭に衝撃。
鼓膜を震わせた声は、それほどにわたしを揺さぶりました。
『翡翠っ♡♡　一月も我慢させて御免ね♡♡　おじさまが、たっぷり焦らした方が翡翠もっ♡♡　き、気持ちいいだろうって♡♡　喜ぶだろうってえええっ♡♡』
悲鳴にも近い言葉。後ろでは濡れた音。
それは、完全にセックスの最中である秋葉さまからの電話でした。
一月前まではしょっちゅうドア越しに聞いていた音声が、電話を通して耳に直接飛び込んだのです。
「あ……秋葉、さま……。ご主人さまと……」
『うっうんっ♡　おじさまに、ぉっ♡　だ、抱いて貰ってるのっ♡♡』
「な、何故電話など……」
『なんでって、決まってるでしょう♡♡　おじさまがね、翡翠を抱きたいって♡♡　生ハメえっちしたいって言うからよぉ♡♡』
「――――――」
ぎりぎりぎり♡♡　……と。
いつか、ご主人さまの精液を口に含んだ時と同じ……いやそれ以上に激しく子宮が反応しました。
欲しがっている。禁欲して渇ききった子宮が。何度突かれても精

液を呑めなかったわたしの子宮が。
今度こそ子種を貰えって、喚き散らしている……♡♡♡
「は……っ、は、あ……♡♡」
『あっ♡　ああん♡　ひ、翡翠もえっちしたいんでしょっ♡　おじさまから聞いちゃったんだから♡　私が帰ったあと毎回えっちなことしてたんだって♡』
「あ……そ、それは……」
『だけど一度も生で抱いて貰えなかったって♡　それ聞いてね、かわいそう……って思っちゃった♡　ゴム越しにしかおじさまのちんぽを感じられなかったなんて……♡　でもね、もう我慢することないのよ♡』
秋葉さまが。聞いたこともないような、優しい声で、
『翡翠♡　もし兄さんのことを気にしてるなら、大丈夫♡　初恋なんて思い出にしておけばいいの♡　大事なのはいま誰を好きなのかよ♡
よーく考えて？　翡翠はいま誰に会いたい？　誰に抱いて欲しい？
誰に――孕ませて欲しいの♡♡』
瞳が揺れて、焦点がブレていく。
濁り、澱んだ脳裏に映るのは。わたしの初恋の、幼馴染みでありずっと想いを抱いていて数年ぶりに会ったら更に深い愛情を抱いた少年ではなく、
ご主人さま。
おっきなおちんちんでわたしを幸せにしてくれる、素敵な素敵なわたしのご主人さま……♡
『おッ♡　いくいぐっ♡　おじさま、中でっ♡　中に出し、て、イっ、お、おお～～っ……♡♡』
メスの悦びにたっぷり満ち溢れた秋葉さまのアクメ声。中出し射精による絶頂の証し。
なんでわたしじゃないんだろう。なんで、いま中出しされたのはわたしのおまんこじゃないんだろう。

なんでわたしは、こんな所でどうでもいい料理なんか持って突っ立ってるんだろう――

『あぁぁぁっ♡♡　おじさま出し過ぎぃっ……♡

翡翠♡　早く来なさいよぉ♡　私も我慢する気なんてないから♡♡　もたもたしてると、おじさまの精液私がぜんぶ貰っちゃうわよ～っ♡♡』

もう聞いていられません。

受話器を叩きつけ、玄関へと走り出しました。

志貴さまの為に作った料理を、その場に放り出して。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「あ、翡翠だ～。早かったね、ここまで走って来たの～？」

「翡翠さんったらそんなに汗をかいて。ほら、拭いてあげますよ」

ご主人さまの部屋に着いたわたしを出迎えたのは、意外な相手でした。

「はあっ、はあっ……。あ、アルクェイドさま、シエルさま……？」

わたしが名を呼ぶと、二人は朗らかに笑いました。

金髪赤目のアルクェイドさま。黒髪に眼鏡のシエルさま。

両方ともが類稀な美女であり、両方ともが、志貴さまの恋人であるはず。

それが堂々とここにいるということは、

「そう、ですか……。お二人も……」

「そういうこと～。あは、翡翠で四人目だね～」

「先生ったら、ついに翡翠さんにまで手を出して……。節操がないんですから」

けろりと言ってのけるアルクェイドさまとシエルさま。

その格好は、恐らくシャワーで汗を流したばかりなのでしょう、バスタオル一枚。シエルさまは下着も着られていますが、アルクェイド

さまはほぼ全裸です。
「聞いてたよ、さっき妹が電話してたね～。もしかして翡翠もおじさんとえっちしに来たの？」
「っ……」
とっさに答えられません。
が――、答えらないということが、ほぼ答えのようなものでした。
わたしの反応にお二人が目を輝かせて、
「え、うわー、ほんとにそうなんだ♥？　翡翠も仲間入りかぁ♥？」
「遠野くんったら、翡翠さんまで取られちゃったんですか♥？　ちょっと同情しちゃいますねぇ……♥？」
「でもまあ良かったんじゃない？　はっきり言って、志貴よりもずっと気持ちよ～くしてくれるよ、おじさんは♥？」
「いまさら言う必要もなさそうですけれどね♥？　翡翠さん、ここに来た時から発情しっぱなしのメス顔になっちゃってますよ♥？」
「う、うぅ……♡」
そんなの。そんなの、仕方ありません。
ええ、仰る通りです。抱かれに来たのです。ご主人さまを、番の相手として据えさせて戴きに来たのです。
だから、浅ましい孕みたがりのメス顔になっていても、わたしは悪くないのです。
「翡翠ってば、涙まで浮かべちゃって♥？　ねえねえ、おじさんのドコが好き？　教えて教えて？」
「え……えっと」
どこがって、それは。
そりゃあ、色々あると思うのですが。
ひっくるめて一言で言うなら、
「その。志貴さまより、おちんちんがおっきいところ……♡♡」
「だよね～♥？」
「翡翠さん、正直過ぎですよ♥？」
けらけらけら。
ほんの数ヶ月前まで志貴さまの恋人だった面子で、志貴さまではな

い男性を持ち上げます。
それはまるで、群れを乗っ取られたライオンのよう。
以前までのボスだった雄はあっさりと放逐され、群れのメス全員が、新たに勝利した主を崇めるのです。
――ガチャリ。
寝室のドアが開いて、秋葉さまが出てきました。
衣服は今とりあえず身につけたという風に乱れ、髪はぐしゃぐしゃ。行為の激しさを物語っています。
「秋葉、さま……――？」
「……♡」
何も言わずこちらに歩み寄る秋葉さま。閉じられた口元は、笑みを浮かべています。
「どうし――んんッ!?」
「むちゅ、ンむぅ……っ♡」
至近距離で合う目と目。
いきなり口付けされた、と気付くと同時、唇からねっとりした液体が送り込まれて来ました。
舌を刺激するこの味わい。秋葉さまの唾液で薄まっていますが間違えようがありません。これは、ご主人さまの精液です。
「んふ♡　じゅるるっ♡」
「むぐ……♡　んく、こくっ……♡」
「あら翡翠さん、美味しそうに飲んじゃって♥？」
「おじさんの精液、濃いもんね～。志貴の水っぽいのとは違ってどろどろしてて粘液みたい♥？」
唇を重ねるだけでなく、舌まで捩じ込んでくる秋葉さま。精液の絡んだ舌で口内を舐め回され、わたしの歯茎の隅々までご主人さまの味が刷り込まれてしまいます。
「れるっ……ぷは♡　ふふ、翡翠いらっしゃい♡」
「はふ……♡　秋葉さま……いきなり……♡」
「ごめんごめん、驚かせて♡　でも来てくれて良かったわ♡」
「あ……ま、待っ♡　だめ、です、そんなっ♡」

くちゅくちゅくちゅ♡♡
秋葉さまにスカートへ手を突っ込まれかき回されてしまいます。
腰に伝わる優しい快感。ご主人さまのえっちとはまた違う、表面だけをなぞるような刺激。
「ほらほら、もっと濡らしておきましょう♡　すぐちんぽを挿れられるようにほぐしておいてあげるわ♡」
「あっ、あ♡　っ♡♡」
指の腹でこしこしと膣の天井を擦られます。
仕上げにクリトリスをぴぃんと弾かれ、子宮が甘イキしてしまいました。
「あ……っ、は……♡　はぁっ……♡」
「翡翠、可愛い～♡　とろ～んって蕩けちゃってる～♡」
「翡翠さん、下着脱いじゃいましょう♡　ほら、足上げて～」
「それじゃ、準備も十分みたいだし」
するり、とシエルさまにショーツを引き抜かれ。
アルクェイドさまに手を引かれ、よたよたと寝室に連れられます。
秋葉さま、アルクェイドさま、シエルさま。ご主人さまのメス３人に見送られながら。
「――たっぷり楽しんでくるのよ♡」
とん、と秋葉さまに背中を押されました。

「はーっ……はあぁ……♡」
背後でドアが閉まる音。
寝室はカーテンが閉められベッドランプの淡い光だけが室内を照らしていました。
薄暗い部屋で、恐る恐る俯いた視線を上げると、
――正面、ベッドの上で。ニヤニヤとこちらを見るご主人さまと目が合いました。
「あ――――♡」

その目。それは、とても一回りも二回りも年下の少女に向けていい視線ではありません。自分の教え子でもある男子生徒の彼女を見ていい目ではありません。

あれは――メスを見る目です。

もう身も心もばっちり陥落済みで、自分からほいほい喰われに来た、ご主人さまの種付け了承孕み袋だって確信してる目です。

――久し振り翡翠ちゃん。今日は何しに来たんだ？

「ご主人さまぁぁ♡　何って……酷い、酷いぃ♡」

胡座をかくご主人さま、その股間にある精液まみれのおちんちんに視線を吸い寄せられながら、

「ご主人さまのせいなんです……♡　翡翠は、翡翠は♡　もうご主人さまのおちんちんのことしか考えられない、はしたない女の子になってしまいました……♡」

するりとスカートをたくしあげておまんこをお見せします。

びっちゃびちゃのおまんこはもうおちんちんが欲しくて欲しくてひくひくと震えています。仕方ありません。だってこの一ヶ月待ち望んだモノが、いま目の前にあるのですから。

「わたし……やっと一番欲しいモノが分かったのです」

きゅんきゅんきゅん。

疼きは頂点に。生殖欲求を満たしたくって堪らない子宮に急かされながら、

「――精液、です♡　ご主人さまの精液♡　志貴さまじゃ駄目……♡　もう志貴さまの子供なんて孕みたくありません♡　ご主人さまの強い精子で孕ませて欲しいのです♡♡」

あ――――。

志貴さまとの記憶が、想いが、薄くなっていきます。

初めてはっきりと欲望を口にしたからでしょうか。

あ、そうなんだって。やっぱりそうだったんだって。

わたしの言葉で、わたし自身が、自分の気持ちを再確認しているかのよう。

「だって、だって♡　ご主人さま強すぎるんですもの♡　前まで志貴

さまのえっちで満足してたのが信じられないです♡　ご主人さまを知っちゃったらこうなるに決まってます♡　だからしょうがないんです♡」
うんうん。そうだよね。
だから。
「だから、お願い致します」
遠野の屋敷で数年ぶりに会った志貴さまにそうしたように。
メイド服で深々と頭を下げて。
「わたしを――――翡翠をご主人さま専用のメイドにしてください……♡♡」
主の乗り換えを、ご主人さまに請願しました。
――――。
ご主人さまは何も言いません。
でも、そのおちんちんは、口より雄弁に答えを物語っていました。
「っ……♡　そ、それ、お返事と思って宜しいのですよね……♡♡」
びきびきびきっ♡
半萎えだったおちんちんがみるみる勃起していきます。幹がふくらみ、エラが張って、青筋を立てて。
ようやく寝取った目の前のメスのおまんこを思う存分耕してやるぞと言わんばかりのフル勃起。
それを見て、安堵します。
だって、やっぱり格違いなんですもの。
志貴さまじゃなく、ご主人さまを選んで正解だって、そのおちんちんが確信させてくれるのですから。
「すご、いい……♡　おちんちん♡　ご主人さまのおちんちん……ちゅっ、ちゅぅ～っ♡　ちゅっちゅっ♡」
思わずベッドに登り亀頭へ口付けてしまいました。
熱くごつごつした感触が唇に伝わります。
「ちうっ……ねろねろっ♡　れろぉ～♡　はぁーっ、精液でこんなにベトベトになって……♡　しっかりお掃除致します……れろれろ♡」
精液とついでに秋葉さまの愛液まみれのおちんちんをお口でお掃

除。キスの雨を降らせると、おちんちんはますます腫れ上がってしまいました。
「じゅるるるっ……ぐっぽ♡　ぐぽっ♡　ぶぽッ♡　ぶぷッ♡　ずろろろぉ～～ッ♡♡」
お口をポンプのように使って扱き上げるうちに熱が入ってしまいます。
志貴さまには見せられない、もう見せることもない下品な顔でおちんちんを吸い上げます。カリに残った吸い残しまでしっかりお掃除。口を離すとおちんちんはすっかりぴかぴかのグロちんぽになっていました。
「ぷはっ……あぁぁ……♡　好き♡　好きですぅ♡　んん～～♡」
すりすりと頬擦り。おちんちんの凹凸、くびれまで愛おしい。わたしのほっぺで硬いおちんちんをよしよししてあげます。ぴゅるっと飛び出た先走りが額を濡らし糸を引きました。眉間から鼻筋まで、べっとりと広がります。
「あ、ご主人さま……きゃっ!?」
突然、視界が反転しました。
ご主人さまに足首を掴まれ持ち上げられたのです。
股間を上に突き出したまんぐり返しの格好にされてしまいました。わたしに自分で膝裏を抱えるように言ったご主人さまは、反対向きにわたしの身体に跨がりました。
上からおちんちんを杭のように打ち下ろす、砧の体勢。
自分から差し出すようなおまんこに、むちゅりと亀頭が沈みます。初めて感じる生のご主人さまおちんちん。膣口を浚うその感覚だけでイッてしまいそうなほどに気持ち良い。
来る。遂に、来てしまいます。
ご主人さまの生おちんちん。完全にわたしを志貴さまから奪って堕とすおちんちん。
「ご、ご主人さま……♡　発情し過ぎて敏感になってるんですっ……だから最初はゆっくり――――ッッほぉぉおおお～～～っ!!???!!♡♡♡」
ずぱぁあんっ!!

――股間で酷い打擲音。
ご主人さまが、思いっきりおちんちんを打ち付けたのです。
脳みそがパチパチとショートしそうな快感が走ります。
初めてゴムなしで咥え込むご主人さまのおちんちん。志貴さまのモノと比べ物にならないことはとっくに知っていました。
それでも、薄い膜に邪魔されずハメられるおちんちんは別次元の気持ちよさ……♡
ぶちゅっ！　ぶぢっ！　ぼちゅん！
「ごお〝っ♡♡　お〝っお〝っお〝♡♡　強っ♡　過ぎぃ♡」
ご主人さまの杭打ちピストン。愛液の溜まりきっていたおまんこは、おちんちんが打ち込まれるたびに蜜を溢れさせました。
ぺろんとめくられたメイド服のスカートが頼り無げに揺れます。
これまでご主人さまに抱かれる時は必ず裸エプロンでした。それがある意味、いつもの自分と切り離したように感じていたのですが――今は普段着のメイド服。
毎日志貴さまの前で着ていた服で抱かれるというのが、後戻り出来なさを感じさせて、より感じてしまいます。
「そんな風にっ、ぐりぐり～ってぇ♡♡　おまんこ拡がって戻らなくなってしまいます♡♡」
最奥まで挿入しながら円を描くようにおちんちんを回されます。
わたしのおまんこの隅から隅までおちんちんで味わおうという腰使い。何度も犯された上にこんな挿入をされて、きっとわたしの膣内は弛くなってしまっているでしょう。それこそ、志貴さまのおちんちんではすっぽ抜けてしまうくらいに。
ご主人さまが挿入し、マン肉を掻き分け、子宮を押し潰す。返す刀で糸を引きながらカリ首で襞を擦り上げつつ亀頭が抜ける寸前まで引き抜いていく。
敏感になったおまんこのせいでその全部が直接脳まで届きます。一度の往復だけでも間違いなく人生で最大の快楽を味わっているのに、それが延々と続く。
「う〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、～～♡♡　イグイグイグッ♡♡

またイギますぅ〜〜っ♡♡」

もうメスとしては完全敗北。セックスはお互いの愛情を確かめ合って一緒に気持ちよくなるもの、なんて御託は言っていられません。

ご主人さまが自分のおちんちんをすっきりさせるのと彼氏持ちメイドをハメ潰すという征服欲を満たす為におまんこを使われていながら、ついでのようにアクメ地獄に叩き落とされる雑魚メス。ずっと好きだった男の子から中年男性に鞍替えしてお股を開いている性的弱者。

眉を顰めていた秋葉さまと全く同じ、ご主人さまの都合のいいハメ穴にされてしまったのが、今のわたしでした。

「何回めって、そんなの分からな、んほぉおおおおお♡♡　子宮ひしゃげるっっ♡♡　さきっぽ中まで入っちゃいますっ♡♡　おまんこ壊さないでえええ♡♡　ご主人さまの赤ちゃん孕むんですからぁあああああ♡♡♡」

火が付きそうな高速ピストンの一回毎にアクメしていて回数なんて分かるはずないのに、なんで数えてないんだこの駄メイド、なんて酷い叱責とともに子宮口をノックされます。

ぞくぞくぞくッ――と感じたことのない悪寒。精子待ち状態の卵子が控えているお部屋に生のおちんちんが密着し、わたしの生殖本能が反応します。

もっと近くに、もっと『命中』し易くと下りる子宮。それは志貴さまのおちんちんだったら良い判断ですがご主人さま相手では判断ミスとしか言い様が有りません。ただでさえご主人さまの長大おちんちんの前では無防備に殴打されるばかりだった子宮が、もはやおちんちんが挿りきる前に突き上げられている状態に。

ぬぽ、ぬぽ♡　と子宮口が亀頭を咥えます。少しでも怒りを和らげるように。

でも――――

「ひィっ……♡♡　ご主人さま、てっ、手加減を♡♡　お分かりですよね……♡♡　わたし、弱いんです♡♡　ぶっ壊れちゃいますから♡♡

お願いします、手加減、手加減んんんんんぶうッッ♡♡♡　おぎょッ♡♡　ぶえええええッッ♡♡♡」

瞳がくりん、と裏返るのが分かりました。

無防備に晒された孕み待ち子袋をご主人さまが見過ごす訳は有りませんでした。全体重を掛けたハメ潰しおちんちんが子宮口をこじ開け、遂に中まで到達してしまいました。

往復ピストンするのではなくベッドに押し付けるように、ぎしっ！　ぎしっ！　と繰り返し体重を掛けられます。

中年太りで常人よりよほど重いご主人さまの体重が子宮に直接響くのです。もはやアクメを通り越した激感。車に轢かれたカエルみたいな声を漏らして呻くわたしをご主人さまは何ら気にかけません。わたしを孕ませるという欲望を満たすことだけを考えているのでしょう。おちんちんは限界まで張り詰めてもはや志貴さまの倍はあります。

「あ〝ーっ♡♡♡　あ〝♡♡♡　あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝〜〜〜♡♡♡」

絶頂が途切れません。ひたすら快楽物質が垂れ流され続けて頭が溶けそう。おかしな体勢で頭に血が上っているからでしょうか。立ち眩みみたいに意識に靄がかかって、他のことがよく分からなくなります。

分かるのはご主人さまだけ。

わたしを孕ませる、強い強いおちんちんのことだけ……♡

ぺちぃん、とお尻を叩かれます。

それが、射精するから締めろ、という合図だと気付く前に――子宮で快感が爆発しました。

――びゅるるるる〜〜っ♡♡　どぷどぷっ♡♡　ぼびゅううう〜〜〜っ♡♡♡

「お〝ん〝ッ♡♡　お〝う〝ッ♡♡　あ〝ん〝ッ♡♡　あ〝♡　あ〝オ〝お〝お〝お〝ッッ♡♡♡」

文字通り『撃ち込まれる』、ご主人さまのつよつよ精液。

おちんちんが一回跳ねて、志貴さまの数回ぶんの精液。もう一度跳

ねたらその倍。その全てに志貴さまとは比にならないほど強くて多い精子が詰まっています。
それを子宮に直接、中出し。
もう孕むに決まっています。こんなもの、初潮前の幼女だって孕みかねません。
「お〝お〝お〝〜〜〜っ♡♡　まっ、まだ出るっ……♡♡　もうお腹パンパンですご主人さまぁっ♡♡」
溜まったおしっこのようにじょぼじょぼと止まらないご主人さまの精液。
和式便所で用を足す格好での射精は、名実ともに正に排泄です。すっきりするついでに孕ませてしまえ、というわたしというご主人さまの精液便所への排泄。
子宮を満杯にした精液は、膣にも収まらず溢れ出てきてしまいました。黄ばんでどろっどろの精液が流れ出します。
びゅるっ……ぶぷゅぷゅ♡♡　どぷっ♡♡　びゅるる……♡♡
「おおおお……♡♡」
ぴくぴくと瞼が不自然に痙攣します。
わたしはご主人さまがぶちゅりとおちんちんを引き抜いてもまだ、足を抱えたままアクメの余韻で震えていました。

「……♡♡　お♡♡　おぁ……♡♡♡」
砧で一回。駅弁で三回。正常位で五回。騎乗位で四回。対面座位で三回。
ご主人さまの底無しおちんちんは何度吐き出しても衰えず、ビン勃ちしてわたしのおまんこを抉ります。それでも存分に吐き出してようやく底が見えてきたのか、激しいピストンではなくねちっこく責めるえっちになっていました。
最初の一回で音を上げたわたしがまっとうに付き合える訳がありません。ご主人さまの三発目辺りからは全面降伏し開きっぱなしになったおまんこと子宮をひたすら掘り返されるだけのオナホメイド

と化していました。
今は、寝バックの体勢でおまんこをほじられています。ご主人さまの身体に潰されるうえに、後頭部を掴まれ上半身の体重を掛けられながら顔面を枕に押し付けられています。ブリムはどこかへ吹っ飛び、ぐちゃぐちゃの髪は上から垂れたご主人さまの涎まみれです。
だらしないガニ股の中心をおちんちんが上から下へ貫きます。もうメイド服はぐちゃぐちゃ。わたしとご主人さまの汗やら体液やらで酷い有り様でした。
「ぶぅっ……♡　ぶふーーっ……♡♡」
完全に肉人形となったわたしの意識は朦朧としています。
それでも意識を失う訳にはいきません。
だって、気持ち良いのです。ご主人さまに身も心も征服されるのが気持ち良くて堪らないのです。
だったら気を遣る暇なんてありません。どうにか意識を保ったまま、ご主人さまに与えられるアクメ地獄を堪能するのです。
泥沼のような交尾の中でわたしの頭から余計なことがさっぱり消えていました。
秋葉さまのことも、姉さんのことも、志貴さまのことも。そのどれもが最早どうでもいいことです。
わたしの頭にあるのは――、孕むこと。
今わたしに乗っかっている、巨きなオスと遺伝子を混ぜ合わせることだけです。
――孕め、孕め、孕め、孕めっ。
それは、ご主人さまも同じだったよう。
頭上から、仰ぐオスの声が聞こえます。
（――はい）
そんな熱烈に求愛されては、メスの本能が疼くというもの。
わたしは反射的に答えを返します。
（孕みます♡♡　孕みます♡♡　孕みます孕みます孕みます♡♡♡）
顔を押し付けられているせいで、実際にはあー、とかうー、という呻き声にしかなりません。

それでも孕ませ了承済みの想いを必死に伝えます。
少しでも気持ち良く。少しでも確実に。
ご主人さまに、わたしを孕ませて戴けるように。
――――びゅくっ……♡　ぴゅるっ、とぷとぷとぷ♡　ちょろろろ……♡
（……♡♡♡）
トイレの終わり、残ったおしっこを吐き捨てるような射精。
多幸感で一杯な、相手を孕ませた、相手に孕ませられたとお互いが確信しながらの絶頂。
それが最後。わたしとご主人さまの、孕ませえっちの最後のダメ押し射精でした。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「如何でしょうか、志貴さま。かなり手間をかけたのですが」
心配そうに見守る翡翠においしいよ、と答えると、彼女は安堵したように笑った。
食堂で、俺はテーブルに並んだ料理を食べていた。
翡翠と二人きり。静かだが気の休まる時間だ。
料理は翡翠が作ってくれたものだ。
少し前から気付いてはいたけれど、翡翠は最近料理の練習をしていた。それもかなりの力の入れようで、一日に数時間かけて、だ。
その甲斐あって翡翠の料理の腕は相当上がっていた。味覚が若干おかしいとはいえ元から器用な女の子である。案配を掴んで一気に上手くなったようだ。
「あ、はい。どうぞ志貴さま。お水です」
翡翠に喉が乾いたというとすぐに水を汲んで来てくれた。
一口飲むが、まだ足りずにコップ一杯を飲み干してしまう。
これが玉に瑕で、翡翠の料理はどれも総じて味付けが濃いのが特徴

だった。俺は薄味が好みなのだが、別に翡翠は俺のために練習している訳ではないので文句も言えない所だ。
そう――最初は翡翠は俺に作る為に練習しているのだと思っていたが、どうやらそれは恥ずかしい勘違いだったらしい。本人にくすりと笑いながらもきっぱり否定されてしまった。
こうやって翡翠の料理を食べているのはその相手に作る料理を練習するための試食係という訳である。行動範囲の狭い翡翠のことだから、相手は秋葉か琥珀さんか。たぶん、というかほぼ間違いなく琥珀さんだろう。
とはいえ例え俺の為でなくとも良かった。最近、アルクェイドやシエル先輩との間に問題を抱えている俺にとっては、こうして翡翠と和やかな時間を過ごせるだけで救いになっていたから。
――――相手さん、喜んでくれるといいね。応援してる。結果が分かったら教えてよ。
たとえ美味しくなくても、琥珀さんは翡翠の作った料理なら喜んで食べてくれると思うけど。
そう思いながら言うと、翡翠はぽかんと俺を見た。
そして、じんわりと頬を緩めていく。
「はい。志貴さま」
どこかうっとりと目を細めて、
「応援、ありがとうございます。ええ――きっと近く、結果が分かると思いますので。その時は、一番に志貴さまにお伝えしますね」
何故か、手のひらでお腹を撫でながら。
嬉しそうに笑った。

# 孕ませ家政婦の琥珀さん

「――――はい。それではおやすみなさい、志貴さん」

琥珀さんも、おやすみ。

そんな就寝の挨拶を交わして、わたしは部屋の戸を閉めた。

からからから、と立て付けの悪い引き戸が擦れる音。

遠野邸の広い庭の片隅にあるこの旧館は、老朽化が進んで所々痛みが来ている。

一応取り壊さずに残してあるだけ、と言ったところの建物だ。住居として使われてはいない。ましてや、本館に部屋のある志貴さんが本来居るべき場所ではなかった。

「……はあ」

縁側に降りて夜空を見上げる。

ひとつ、ため息が漏れた。心中には重く、鉛の錯覚。

――――この屋敷の住人は、変わってしまった。

それは暗喩でもあり、直喩でもある。

「……」

女とは、こうも変わるモノなのか――――

秋葉さまと翡翠ちゃんを見ていると、そう思わされる。

あれほど志貴さまを愛し、慕っていた二人。ずっと続くように思えたそれはあっさりと崩れた。一人の闖入者によって。

秋葉さまも通っている学園の教師、なのだという。正直に言って最初は疑った。とてもとても、教鞭を執り指導に励むような人間とは思えなかったからだ。

第一印象は豚。平均体重を大幅に超す、肥えた体躯に醜い容貌。見た目で人を判断してはならない、なんて言うが、それにだって限度がある。そもそもあの男は身だしなみに最低限の気配りさえしていない。偏見どうこうの前に生理的嫌悪が浮かんでしまう。

しかしてその中身は豚というよりも猿だ。性欲だけは満々と漲っている彼は、信じられないことに、アルクェイドさま、シエルさま、秋葉さま、そして翡翠ちゃんと肉体関係を持っている。これはもう間違

いない。なぜなら彼は遠野邸に部屋を持ち、憚ることなく彼女らと身体を重ねているのだから。

そう、彼は今、この遠野邸に宿泊している。以前秋葉さまはここに志貴さんを呼び寄せたとき、わざわざそれまで住み込んでいた家政婦や軋間の坊っちゃまを追い出してまで志貴さまの部屋をつくった。

だというのに――その部屋に住んでいるのは彼。志貴さまの部屋は、今や彼の部屋になっているのだ。そして志貴さまは本館を追い出され、さりとて有間の家に戻ることも許されず、外庭の古びた別館にいるのだった。

だから、この屋敷の住人は文字通り変わってしまったのだ――女性陣から愛を集める男性が、入れ替わるようにして。

辛い、などと言う訳にはいかない。本当に辛いのは志貴さんの方であって、わたしではない。

「……待っていてください、志貴さん。わたしが、貴方を守ってみせます」

この状況を打破出来るのは私だけなのだから――と。

心を決め、わたしは歩きだした。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「目を覚ませ？　……はあ、何言ってるの琥珀。私は正気も正気よ、本心からおじさまをお慕いしているの」

「姉さんは誤解しています。私や秋葉さまは無理やりご主人さまに迫られた訳ではなく、自分からあの方のモノになりたいと思ったのですよ」

何度ふたりを説得しても同じ答えだった。

はじめ、悪い男に騙されているだけだと高を括っていたわたしもそうではないと気付く。どうやら本当に、ふたりはあの男に惚れ込んで

いるらしい。錯覚でも勘違いでもなく。
わたしとて立場上は秋葉さまに雇用されている使用人でしかない。結局は当主である秋葉さまの方針がこの家の中では全てにおいて優先される。
だから、外に追いやられる志貴さんを庇い抜くことは出来なかった。言葉を重ねたけれど、秋葉さまに加え翡翠ちゃん、更に言えばアルクェイドさんたちまでもあちら側なのだ。わたしひとりで抵抗するには限界がある。
でも。だからと言って、この状況を簡単に受け入れる訳にはいかない。
わたしは志貴さんのことが好きだ。そして以前までの遠野邸と今の遠野邸、どちらがより好きかというと前者である。
今の状況になってしまったのは、これはもう仕方がないこと。この辺りわたしの思考は割りとドライだ。起きたことは起きたこと、なるべくしてなったのだろう。
けれども、それは現状を放置するという話ではない。認められないことがあるなら手を回すのがわたしのやり方である。出来れば裏から操る方が性に合うのだが味方は自分しかいないから実力行使に出るほかない。
そういう訳で――――

「お待たせ致しました。琥珀、参りました」
ドアをノックすると、待ち侘びたかのようにすぐに開いた。
……対面すると、本当に大きい人。縦にではなく、横に、だけど。
肩を抱かれて部屋に連れ込まれた。もう興奮しているのか汗ばんだ手のひらと荒い息が極めて不快だが、まあ良しとしよう。今日は、初めからそのつもりで来たのだし。
ここは彼の部屋。いや、元、志貴さんの部屋だった場所。
志貴さんは私物をほとんど置かず、部屋はいつも殺風景だった。けれど今は違う。彼の脱ぎ捨てた服やら放り出した小物やらが散乱し

ている。翡翠ちゃんが定期的に片付けているというのにこれだ。自制心のなさに呆れてしまう。
自制心といえば、シモのだらしなさに関しては一際だ。
部屋の中央には大きなベッドがある。志貴さんの頃は一つだった枕は今では二つ、三つ。連日ここで女性と――かつては志貴さんの相手だった方々と寝ているのは、この部屋に寄り付かないわたしでも分かっていた。しょっちゅう、恐らくわざとドアの隙間が開いていて、聞き覚えのある女の子の甲高い嬌声が廊下まで響くのだ。そんな夜の翌朝はたいてい誰かの起床が遅く、ようやく起きたと思ったらあの男と連れだってリビングに来るのが常。夜の相手をするのは秋葉さまや翡翠ちゃんだけとは限らず、アルクェイドさまやシエルさまが泊まっていかれることも多々ある。さすがに部屋の外でおっ始めることはまだないが、所構わずアルクェイドさまやシエルさまの胸を掴み、秋葉さまのお尻を撫で、翡翠ちゃんに口移しでご飯を食べさせられている様を見ると、それも危ういと思わざるを得ない。
ああ、許せない。秋葉さまたちに手を出しているのも許せない、志貴さまを苦しめているのも許せない。
そして、翡翠ちゃんに不埒な真似をしていることも許せない。
私の大切な翡翠ちゃん。この世でたった一人の妹。
命より大事な存在を中年男に汚されているという状況を看過出来るほど私はおおらかではない。相手が志貴さんなら納得出来る、いや安心出来る。きっと幸せにしてくれるだろう。
だけど、これは駄目だ。翡翠ちゃんを、ムラムラした時に男性器をハメられる美少女オナホの一つとしてしか見ていない、この男には。
「さて。一応聞いておきますが、約束は忘れていませんね」
表情を削ぎ落として彼を見ると、戸惑った様子。
まあ、無理もあるまい。一応これまでは客人の扱いで笑顔の仮面を張り付けていた。それが突然無表情で眇めてきたら驚くだろう。どちらかというと、こっちが私の素なのだが。
彼は慌ててこくこくと頷いた。それから、今夜のわたしとの約束を復唱する。

――今夜一晩、私を抱く。
――お互いの絶頂した回数で競う。
――少ない方が勝ち。貴方が勝てば貴方のモノになって差し上げます。ただし、わたしが勝ったら、すぐさまこの屋敷を出ていってください。

「ええ、その通りです。よく分かって頂けているようで安心しました」
そう。それが、わたしが今日ここに来た理由。
今の内容は書面に起こして血判も押させてある。もしそれをしらばっくれたとしたら、数日前から仕掛けておいた隠しカメラの映像を使ってやる。この男は一応学園の教師であるらしい。学園の女生徒である秋葉さまとも寝ている映像を出す所に出せば最低でも懲戒免職だろう。
もしわたしが負けたら、それはマズい。遠野家は終わる。下衆な中年男に乗っ取られた連れ込み宿と化すだろう。
けれどそれは有り得ないと言っていい。自慢ではないが、わたしは性技には人一倍優れている。この男なんて弄べる程度には。
わたしが思うに、この男は運が良かっただけなのだ。最初に引っ掛かったのはアルクェイドさまだという。もちろん驚いたが、腑に落ちると言えば落ちる。自由奔放ながら無垢な彼女は新しい快楽を知って夢中になってしまったのだろう。それは他の皆も同じ。志貴さん以外に恋愛経験など全くなかったであろう純粋な方々だ、連鎖的に転んでいってしまったのは想像に難くない。
だが――お生憎さま。わたしは少しばかり事情が違う。
こんな男、簡単に手玉に取れる。これは推測ではなく単なる事実だ。皮肉なものだ、意に沿わず性経験豊富であることがこんな風に役立つだなんて。
絶頂した回数、なんて馬鹿げたルールを設けたのは、意趣返しのようなもの。
本来、志貴さんのモノなはずの女の子たちに好き勝手するこの男

を、性的に誅罰してやりたかったのだ。
「それで？　いつまでそうやって突っ立っておられるのです。わたしはいつでも始めて頂いて構わないのですが」
そう言うと、彼は慌ただしくズボンを下ろした。
全く、いきなり下半身裸になる配慮の無さはまさしく常識のマヒしたこの男らしいが……その下から出てきた男性器に、ひそかに息をのむ。
確かに、それは大きかった。比べてしまって申し訳ないが、志貴さんとは比べ物にならないだろう。槙久さまや四季さまとも比較にならない、けったいな大きさだ。もちろんわたしは少しソレが大きかろうが小さかろうが意に介さないが、秋葉さまたちのような他に男を知らない生娘なら話は別か。皆がこの男にどハマリしたのも理解出来る。……しかし、
「もうそんなに勃たせていらっしゃるとは。いやはや、貴方の節操のなさには感心致します。……準備していた？　それはそれは、結構な御配慮で」
わたしが来る時刻の数十分前から勃起が収まらず、自分で扱いて紛らわしていたのだという。見れば、勃起の先端はもうべとべとだ。本当に、頭の中は性欲しかないらしい。
だが、好都合とも言えるか。この様子ならろくに堪えることも出来まい。
わたしが搾り、性的に屈服させ、根をあげたこの男を追い出す。それで終わりだ。遠野家は、元の形を取り戻す。
ゆっくりと彼ににじり寄る。今から抱く女が寄ってきたというのに、気圧されたかのように床に腰を抜かした男を冷たく見下ろす。
「全くみっともない。秋葉さまたちに手を出しておきながらそれですか。志貴さんならこの程度、軽く受け流しますよ」
言われ、反発したのか彼がわめき散らした。何でも、自分はあいつらを堕とせる器の男だとか、遠野なんか足元に及ばないんだとか――わたしもちんぽでぐちゃぐちゃに虐めてやるとか、余りに下らない失笑ものの内容を。

ここでわたしは確信した。思っていた以上にこの男は小物だ。このような腰抜けに、わたしが遅れを取るはずがない、と。
じりじりと距離を更に詰めると、ひぃ、なんて呻きながら尻を床に擦って後退していく。馬鹿馬鹿しい、これでは始まる前から勝負が着いているようなものである。
「ほう、わたしを虐めると。
――――それではほら、どうぞベッドへ。その言葉が本当かどうか、確かめさせて頂きましょう」
恐らく一方的な蹂躙になるだろう、と予測しながら。
わたしは静かに、ベッドへ腰を下ろした。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

どうも皆様、御無沙汰しております。おまんこオナホメイドこと翡翠と申します。
一日の仕事を終えた私は厨房におりました。以前は料理は姉さんに任せきりだった私ですが、今では姉さんに追い付く勢いでメニューのレパートリーを増やしています。今もえっちらおっちら準備している最中です。
用意しているのはもちろんご主人さま用。よく食べよく呑む方ですから作る側も身が入るというものです。今日のご注文は食事ではなくお酒とのこと。いつもの飲食関連は姉さんが遠野家全員分まとめて用意するのですが、こういったご主人さまのみの注文はなかなか作りたがりません。どうもご主人さまのモノになるのを拒否しているようなのです。
「もう……姉さんも意外と人を見る目がないのですから」
たぶん、未だに志貴さまを想っているのでしょう。姉さんも事情が事情ですから、以前の感情に固執してしまうのも無理もないかも知れません。

だけども、それにも限度があるでしょう。ご主人さまは度々姉さんに求愛なさっておられます。可愛いとか、そそるとか、エロいとかいった褒め言葉で口説くのは日常茶飯事。食事の最中、秋葉さまにフェラ抜きさせたあと姉さんの着物で拭ってマーキングを施したり、抱き締めて首もとの匂いを嗅いでみたり、この前などはお尻をがっちり掴んでもみもみ手のひらを開閉させたり。私だってあれほど熱烈にご主人さまに求められた覚えはないくらいです。

だというのに、姉さんはその度にご主人さまを突き飛ばしお誘いを袖にしているのです。

これはいけません。ご主人さまほど優れた男性と巡り合う機会などそうそう有り得ません。それを、ちょっと昔から想っていたというだけで志貴さまを優先し、メスとして満たされるチャンスをふいにしている。志貴さまのような人柄はよくてもオスとして愚鈍の方ではなく、アルクェイドさまやシエルさまや秋葉さまを孕ませ上等肉便器ハーレムにせしめたご主人さまこそお慕いするべきなのは明白なのに、我が姉ながら心配になってしまいます。

だからこそ、なのでしょう。ご主人さまが今夜の姉さんとの勝負を受けられたのは。

妹の私が言うのも何ですが、姉さんは美人です。顔のつくりや身体の起伏も整っていますがそれよりも、全身からむんむんと色気を立ち上らせています。男好きのする、とでも表現するのでしょうか。きっと過去の経験から来るものなのでしょう。とにかく私や秋葉さまでさえ時々くらりとしてしまうくらい、被虐的な誘惑を撒き散らすのです。

それでいて姉さんは敏く、一歩引いた視点で周囲を見、他人を操ることに長けています。裏で糸を引き、慌てる人たちを尻目に自分は安全地帯でくすくすと笑うのが趣味なのです。

そんな女が押し倒され待ちの雰囲気を纏わせて同じ館をちょろちょろしている。女主人とメイドは既にオナホにして、あとはその策士を気取った生意気和服家政婦だけ。ご主人さまのおちんちんが激怒するのも当然と言えましょう。

その姉さんから持ちかけられたセックス勝負です。ご主人さまが断るはずもなく、即決したと聞かされました。
「……しかし、不安はありますね」
カラン、とグラスと瓶をトレーに乗せ厨房を出ます。
行く先はご主人さまの部屋。今頃姉さんを抱いているでしょうか、それともまだでしょうか。出来れば前者であって欲しいところです。
何故なら、どうにも胸騒ぎが止まらないのです。もしかして。もしかして、姉さんは本当にご主人さまのおちんちんに勝ってしまうのではないかと。そしてご主人さまをここから追い出すなどという、有難迷惑を実現してしまうのではないかと。
故に、ご主人さまの部屋にお邪魔する理由が出来たのは好都合でした。お二人の様子を見て、もし万が一姉さんが優勢であったりしたら、私もご主人さまに協力する必要があるだろうと思ったからです。
「……さて」
部屋の前に着きました。
ドアは厚く、中の様子を窺わせません。かすかな物音一つ漏れ聞こえることはありませんでした。
ノブを握って、ひとつ深呼吸。開ければ姉さんの命運が分かります。
勝利か、敗北か。ご主人さまを搾り取って薄く笑っているのか、押し倒されて喘いでいるのか。どちらにせよ、二人がセックスしているのは確実です。
出来れば早く、姉妹揃ってご主人さまに御奉仕できればいいのだけど――と。
私は、静かにドアを開けました。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「本当ですか？　あは、よかった。今日は気合いを入れて腕を振るっ

たんですよ」
美味しかったよ、琥珀さん――――
志貴さんは、わたしの料理を食べてそうおっしゃった。
志貴さんは旧館と学校を往復する毎日。本館には寄り付かず、ここに持ってきた本を一人で黙々と読み耽って時間を潰されている。
……だけど、最近、少し雰囲気が明るくなった気がする。
それは――自惚れでなければ、わたしの影響なのだと思う。わたしがここに訪れるとぱあっと表情を明るくしてくださるし、なんと言うか、わたしへの想いが強くなったように感じられるのだ。他の女の子たちが志貴さんへの執着をなくした中、わたしだけは親身に寄り添っているのだから無理もないだろう。
わたしとしては、秋葉さまたちが脱落したから志貴さんがわたしだけを見てくれた、という複雑な思いと、素直に嬉しいという気持ちが半々だ。以前までは、こんな風に一対一で長く時間を過ごすこともそう無かったから。
「もう、くすぐったいですよ志貴さん。そんなにモゾモゾしないでくださいな」
食事後、就寝される志貴さんを膝枕していた。……元々はむしろ寝付きの良かった志貴さんだけど、今はこうしてわたしが付き添わなければ睡眠を取るのも一苦労だ。
――――ありがとう。俺の味方は、琥珀さんだけだよ。
「……そんなこと、おっしゃらないでください」
わたしの膝にすがりつくようにして呟く志貴さんに言葉を返す。
不安を吐き出したのか、志貴さんの呼吸が一定に、静かになっていく。表情も穏やか。無事に安眠出来たらしい。
「良かった。……安心してお休みくださいね、志貴さん」
膝と枕を入れ替えて布団をかぶせる。志貴さんは一度寝られれば眠りは深い。明日の朝まで、しっかり休めるだろう。わたしは一礼して、旧館をあとにした。

「――――ふう」
『昨日』と同じように月の出た空を見上げる。
変わらない風景。だけど、昨日はどんな決意で空を見ていたのか、もうよく思い出せない。
「……」
出来れば、誰にも見つからず自室に戻って眠ってしまいたい。
けれど、そんなことが許されるはずもなく、
「おっ、琥珀、やっと出てきたーっ。もう待たせるんだからぁ」
「……アルクェイド、さま」
「ほら、みんな待ってるよ？　はやく行こっ」
「きゃ……!!」
軽やかに屋根から木の枝へ、そして地面へ飛び下りた金髪赤目の美女。
アルクェイドさまはいつも通りのにこにことした笑顔でわたしの腰を抱えて、本館へ連れ去った。

「お待たせ～っ。琥珀連れてきたよ～」
連れていかれた本館のリビング。
そこには全員揃っていた。シエルさま、秋葉さま――それに翡翠ちゃんまで。
「あ、琥珀さん。お待ちしてましたよ」
「遅かったわね、兄さんの世話なんて早く切り上げてもいいのに。先に観させて貰ってるわよ」
「姉さん、こちらに」
「っ……ぅ……」
リビングには最近購入されたテレビがあり、それを取り囲むようにコの字型にソファが置いてある。
わたしはテレビの対面のソファに座らされた。逃げようにも両隣に秋葉さまと翡翠ちゃんが座って動けない。
いや、そんなことはどうでもいい。問題は……テレビに映っているもの。

あんまりにも恥ずかしくて、屈辱で、直視できない。ただ音声だけが、耳に響く。

『――――ひっいいいいっ!!?♥?♥?♥?♥? なっ、何回する気ですかっ、い加減に……オ゛ッ!? お゛ほッッ♥?♥?♥?♥? こっ、このちんぽだけ大きい屑がっ、ん゛ん゛お゛お゛お゛お゛～～ッ♥?♥? 知らない、こんなの知らな……♥?♥? なんでっ♥?♥? 志貴さんじゃ届かなかったとこ♥?♥? わたしも知らないところ、見つけないでくださいい♥?♥?♥? ひぎっ♥?♥? 嘘、子宮下りてないっ♥?♥? 入り口ぱかぱかさせてませんっ♥?♥?♥? あ、貴方がちんぽでしつこく叩くから弛んじゃってるだけですっ♥?♥?♥? 太った身体でそんな風にがっちり押し倒して、逃げられないようにして……♥?♥? それで腰だけひたすら打ち付けられたらこじ開けられちゃうのも仕方ないんですっ♥?♥?♥? 嫌っ、キスは駄目っ、んぶぅうう～っ♥?♥? ぶちゅるるるっ♥?♥? ずじゅるるるる♥?♥? くっさぁ♥?♥?♥? 煙草くさいし加齢臭くさいですっ♥?♥? 息も苦しいし♥?♥? んじゅぷるるれるるれろれろぉ～～♥?♥?♥? ぶはぁっ……♥?♥? だ、だから苦しいって、んぐぇおおおんおおおおお♥?♥?♥? くっ、首絞めないで……オ゛エ゛ッ♥?♥? オ゛オ゛オ゛♥?♥?♥? うおお゛お゛……ぶはあああっ!! な、んで、首なんか絞めて……あ、秋葉さまから? わたしがそうやって虐待されてたって聞いた……って……♥?♥? だ、だから何なんですか……♥?♥? ち、違うっ♥?♥? そんな、わたしは首絞められて感じるマゾなんかじゃ……♥?♥?♥? ぐぶぇえ♥?♥? ゴゲッ♥?♥? おゴォオオオッ♥?♥? ぐるじ……お゛うッ!? ♥?♥? くっ、首絞めながらのピストン……反則……ッ♥?♥?♥? オッ♥?♥?♥? オッ♥?♥?♥? オッ♥?♥?♥? オッ♥?♥?♥? おげぇッ♥?♥? ぐうぇっ♥?♥? ひ、ちんぽ膨らん……ッッぐぅぅぅぅぅ～～っっっ♥?♥?♥?♥? また大量射精きたあっ♥?♥?♥? ッ♥?♥? おおお♥?♥?♥? ヤバっ、窒息アクメ……頭おかしくなる……♥?♥? も、も

うお腹ぽんっぽん……♥？♥？　む、無理、もう無理っ♥？♥？　これ以上中出しされたら死ぬ、子宮破れます♥？♥？♥？　……は……？　勝負？　そ、そうですけど……こんなの結果見えてるでしょう!?

だ、だってこれで、貴方が3回めで、わたしが……に、にじゅうはっかいめ……♥？♥？♥？　こんなのもう絶対勝ち目ない……♥？♥？　わ、分かりました、謝ります謝ります♥？♥？　わ、わたしが間違っていました……♥？♥？　認めます、貴方はどうしようもない屑だけど……セックスだけはとんでもなく強い優秀なオスだって……♥？♥？　そ、そうです♥？♥？　今なら秋葉さまたちの気持ちも分かります……こんなセックス教えられたら、一発で堕ちて貴方専属肉便器契約を交わすのも無理はありません……♥？♥？　志貴さんには悪いですけど、いくら恋心は志貴さんにあっても、これだけちんぽに差があったら理性丸ごと貴方で塗り替えられちゃうのも当然です♥？♥？　わたしたちだってメスなんですから……貴方みたいなオスに組み伏せられたら、本能で遺伝子植え付けられ待ち状態になって卵子差し出しちゃいます♥？♥？　……え？　わたしですか？　ふ、ふん、おあいにく様です……わたしは秋葉さまたちと違って耐性がありますから。確かに貴方にはちんぽの大きさも精液の濃さも遠く及ばない方々でしたけど、これでも経験は豊富なんです。ですからこの程度……ホゲぇッ♥？♥？♥？　い、いきなり突かないで、おかしな声出ちゃ……んッ♥？♥？　あんっ♥？♥？　ひぁああ♥？♥？　な……だ、だったら堕ちるまで何回でも続けるって……ま、まだ!?　冗談でしょう、まだやれるんですか……!?　そ、そんなことされたら本当に堕ち……っ!?♥？♥？　い、嫌っ♥？♥？　駄目です、それだけは駄目♥？♥？　あとはわたしだけなんです♥？♥？　志貴さんの味方出来るのはわたしだけ♥？♥？♥？　わたしまで堕とされたら、志貴さんはハーレム丸ごと貴方に寝取られたオス失格の男の子になっちゃいます♥？♥？♥？　だからそんなにポルチオぐりぐりしてわたしの性感帯開発しちゃ駄目ですぅ♥？♥？♥？　やだっ、怖い♥？♥？♥？　たすけてっ♥？♥？　助けて翡翠ちゃん♥？♥？　秋葉さま♥？♥？　志貴さん～～っ♥？♥？♥？』

「くすっ。琥珀ったら意外と堪え性がないのね。おじさまに挿入されてからまだ３０分も経っていないわよ？」
「お、お願いです秋葉さま……御容赦を……」
「なに言ってるの、別に責めている訳ではないわ。ただ始める前におじさまを脅して尻餅つかせてたわりにはおまんこ激弱ねって」
「姉さん、恥じることはありません。ご主人さまのおちんちんは志貴さまとは比較にならぬ規格外です。あちらに慣れてしまい見誤るのも無理はないでしょう」
「ひ……翡翠ちゃんまで……」
言葉に釣られ、視線を上げる。
大画面には、男女が身体を重ねている動画が映っている。他でもない、わたしと――『御主人様』の行為だった。
昨夜――わたしは敗北した。
完膚なきまでの惨敗だった。今思えば、何を勘違いしていたのだろうか。
わたしはただ経験回数が多かったというだけで、そのどれにも質が伴っていなかった。それを床上手だと思い上がっていただけ。
御主人様は違った。アルクェイドさまを筆頭に、極上の女性を毎日のように抱き潰し、ちんぽを鍛えていたのだ。元々性豪の素質があった所に磨きがかかった結果、とんでもないセックスモンスターとなっていた。好き放題イカされまくり、身も心も完膚なきまでに明け方まで犯しつくされ最後は股間から精液溜まりを吹き出しながら失神してしまったのだ。
この映像は、わたしが隠し撮りしておいたカメラのものだ。当然のように御主人様……というかアルクェイドさまやシエルさまには事前から筒抜けで、御主人様も知っていたらしい。結果、映像はわたしの想定とは全く逆の、わたしを追い詰める為の材料となってしまっていた。
「あーあ琥珀さん、もうちんぽどころか指マンされただけで潮噴いてますね。あんなに仰け反って、なんてはしたない」
「顔すっごいことになってるね～。わたし知ってるよ、ああいうのア

へ顔って言うんでしょ。さっきまで『その言葉が本当かどうか、確かめさせて頂きましょう』とか格好つけて言ってたのに……ぷぷぷ」
「ぐ……う……」
……もう耳まで真っ赤、目の端に涙が滲んでしまう。
でも、言い返せない。お二人の言い分はまだオブラートに包んだ方だ。実際の映像の中のわたしの様子は、もっと酷い。御主人様の手でおまんこをほじられ、ガニ股でブリッジしながら部屋の壁まで潮を噴射し、ガチガチと歯を鳴らして白目を向いて打ち上げられた魚のように跳ね回っている。これは……たぶん、２０回ほどアクメさせられた後だ。身体を屈服させられてからは、ちんぽを挿れられなくとも御主人様の指先だけで絶頂へ昇らされてしまっていた。
それにアルクェイドさまたちの言い方も、本気でバカにしているというよりは親近感を持っているという感じ。きっと彼女たちも御主人様に抱かれる際は同じようなものなんだろう、と容易に想像がつく。
「ああでも、琥珀がわたしたちの為に頑張ろうとしてくれたのは嬉しかったわ。もちろんどうなろうとおじさまから離れる気はないけれど、貴女の気持ちはよく分かったから」
「はい、まったくです。相談せず一人で行動しようとしてしまうのは姉さんの困った所だと思いますが」
左右に座った秋葉さまと翡翠ちゃんが距離を詰めてくる。
不意に両側からふぅ、と吐息を吹かれ、背筋が震えてしまった。
「ひゃあっ!? な、何を……」
「姉さん……本当に感じるとあんな顔をするのですね。二人で志貴さまと寝たことはあったけれど大違いだわ。メスの喜びを教えてくださったご主人さまに感謝しなければなりませんね？」
「おじさまがよくおっしゃっていたわ、『はやく琥珀を寝取ってハメ潰したい』って。私も最初はそうだったけれど、生意気な女を堕とすのは格別らしいわよ。おじさまは底無しだけどここまで一方的にアクメ地獄に落とされることはまずないわ。それだけ琥珀が気に入ったのね」

耳元で熱い囁き。だんだんとそれは近くなって、唇がわたしの耳たぶに触れてしまう。それだけでなく、ぺろ、れろっと舌で耳溝をくすぐられる。
「ふ、ぁ、あ……♥？　お、おやめください秋葉さま……」
「れる、れろぉ♡　駄目よ琥珀、ちゃんと画面を見て。おじさまにチン負けした自分の姿、しっかり直視するの♡」
「ちゅっ……♡　ご主人さまに啼かされる姉さん、なんて可愛い……♡　志貴さまでは到底引き出せなかった顔、ご主人さまだけが見られる姉さんのメスの顔……私にも見せて♡」
「ひぁぁっ♥？」
じゅるじゅると左右の耳をしゃぶられ、今までにない感覚がぞわぞわと全身に走り、力が抜けてしまう。耳穴が塞がれ、頭の中は反響する二人の耳フェラの音だけで一杯になった。
くたりと脱力したわたしの腰に唐突に快感が迸る。くちゅ、という水音。着物の裾から秋葉さまと翡翠ちゃんが手を差し込んでいる。二人同時、左右からだ。
「なっなっ……!?　何を、あっ♥？」
「もう濡れていますね。自分の隠し撮りを見て興奮してしまったの？　姉さんももうご主人さま好みになってしまったのね」
「ち、違……ひん♥？　わたしは、御主人様なんかで感じたり……♥？」
「あら、『御主人様』だなんて。この前まではあの男とか彼とか言っていたのに、琥珀ったら」
……秋葉さまの言う通りだ。心身ともに犯され尽くした結果、わたしは彼を御主人様と呼ぶようになっていた。勿論彼がそう命じたからだけれど、それでも以前までなら固く拒んでいただろう。今ではそれを素直に呼んでしまっているのだった。
ぐちゃ、ぐちゅ、と秘裂を弄られる。止めさせようにも腕に力が入らずされるがままになってしまう。
翡翠ちゃんが指でくぱっと割れ目を拡げると、秋葉さまが中へ指を差し込む。細く長い中指でコリコリと天井を引っ掻かれ腰が跳ねる。

二人の耳フェラは更に激しくなって、舌を耳の穴まで突っ込まれてしまった。両側からの耳舐めで思考を犯され、股間からは蕩けるような快感が襲い、わたしはおとがいを反らして痙攣することしか出来なくなった。

テレビでは相変わらずわたしの痴態が流れていて、今は騎乗位で突き上げられているところ。初めて志貴さまに抱かれた時、自分で動いてみてと言われて、それまでただ犯されるばかりだったわたしは戸惑ってしまったのを思い出す。それからもこの体位の時はぎこちない動きだったのに、御主人様はしっかり動きを合わせてくれるうえにちんぽが大きすぎて常に気持ちいい所に当たって無我夢中で腰を上下させてしまった。耳が塞がれていて音は聞こえないけれどきゃんきゃん泣いていたはずだ。やめて、許してと言っても御主人様は聞き入れてくれず、思い上がっていたわたしのおまんこをちんぽで掘削するのを徹底したのだ。

視線を移せばシエルさまは呑気にお茶をすすっていて、アルクェイドさまはううん、と伸びをしている。それが、逆に不自然だった。秋葉さまと翡翠ちゃんはどうみたってリビングでするべきでないエッチなことをしているのに、それを特に気にかけるでもなくくつろいでいる。それはわたし以外の4人にとっては、お互いのふしだらな姿を見ることなんてそう大したことじゃないと言わんばかりの様子だ。

「んぷっ。ふふ、着物に染みがつくぐらい感じちゃったわね。そうだ琥珀、聞きたいことがあったんだけど――結局、『勝負』は何対何だったのかしら？」

「いっ……言えませんそれは……っひぁあああ!?♥？♥？♥？」

「だめです、姉さん。ちゃんと結果は報告しないと」

言い逃れしようとすると、翡翠ちゃんに陰核をつねられた。ビリビリと鋭い刺激が走り、身体が仰け反る。

「あっあああああ♥？♥？　やめて翡翠ちゃん、やめてえ♥？♥？」

「やめません。答えなければずっとこのままよ、姉さん」

「くううう……♥？♥？　ううっ……よ、よん……♥？♥？」

「はい？　よく聞こえませんね、もっと強くしますか？」

翡翠ちゃんが力を込めようとする。わたしは慌てて叫んだ。
「よんじゅうはっかいですっ♥？♥？　わたしが４８回で御主人様が５回っ♥？♥？♥？　４８対５でしたぁ♥？♥？♥？」
……間違いない。だって、しっかり数えていたから。今思うとばかばかしいけれど、本気で勝つ気でいたんだから。
秋葉さまと翡翠ちゃんは――意外にも、笑ったりしなかった。むしろそうだと思っていた、と言わんばかりに頷く。
「へえ。まあそんなものでしょう。むしろよく耐えたじゃない」
「ええ、そうですね。私たちが抱かれる時も大体そんなものでしょう。まあ、流石に４８回は……かなり行っていますが」
「うっ……うぐぅうう……！」
もう恥ずかしいを通り越して心が死にそうだ。いつ以来か分からない涙が滲む。
「ああっ姉さん、泣かないでください。ほら、気持ちよくしてあげますから」
「――――っひぎぃぃ!?」
「わっ。いきなり飛び跳ねないでよ琥珀、びっくりするじゃない」
油断していた所にクリ捩りを喰らわされ、あっさりアクメしてしまう。びゅるっと愛液が吹き出してもう太ももまでべたべた。自分でも分かるくらい濃厚なメス臭がぷぅんと漂った。
「っ、ぐ、く……!!」
もう駄目だ。
これ以上ここにいては頭のネジが飛ぶまで玩具にされてしまう。今はまだ秋葉さまと翡翠ちゃんに遊ばれるだけで済んでいるけど、アルクェイドさまたちまで参戦したらどうなることか。腰が抜けるまで責められるに違いない。
「お、おやめください秋葉さま、それに翡翠ちゃん。わたし、もう部屋に帰りますからっ」
「ええ？　なに言ってるの、これからがいい所じゃない」
「そうですよ姉さん。ビデオもまだ終わっていませんし」
「い、いい加減にして……！　こんなのもう付き合っていられません

!!」
二人の手を振りほどく。あらあら、とシエルさまが目を丸くしているのが見える。
意外なことに４人とも強く引き留めはしなかった。もっと無理やり力で押さえ付けられるかと思っていたけれど。
いや、とりあえず今はどうでもいい。早くこの空間から脱出して頭を冷やさないと。正直、御主人様に開花させられた身体は一回アクメした程度ではムラムラが収まらないけれど、それは一人で処理すれば済む話だ。
そう思いながらよたよたと部屋の入り口へ向かう。翡翠ちゃんが何やら言っているけれど、よく聞こえない。わたしの頭の中は一刻も早く自室のベッドに倒れ込み、おまんこを掻き回したいという一心だった。
と――――
「わぷ……っ!?」
どすん、と。廊下に出る寸前、何かにぶつかった。
生暖かく、柔らかい感触。
でも重みがあってびくともしない。
頭をうずめる格好になってしまったそれから顔を離し。
手をついて、見上げると。
「――――ひっ」
喉から空気が漏れる音がした。
驚きか、恐怖か、よく分からない感情に頬がひきつる。足がすくみ、動けなくなって。膝が崩れそうになり、よけい頭が真っ白になる。
「あら、おじさま。丁度いい所に」
秋葉さまが言った。
間違えるはずもない。それは、つい昨日わたしを蹂躙した、わたしの――『わたしたち』の――御主人様だった。
「い、いや……離し……っ」
御主人様から離れようとする。本能的に危機を感じた。
それは危害を加えられると思ったのではなくて、

「おっ……お!?♥?♥?　んぐぅうっ……??♥?♥?」
　中年男のくっさい体臭を鼻腔いっぱいに吸い込んでしまう。普通ならえずいてしまうはず、なのに頭が芯まで痺れる。一体どういう反応をしているのか目に霞がかかり、口からこぼれそうなほど唾液が溢れた。御主人様が、そんな発情家政婦を逃がす訳もない。わたしをより強く抱きすくめて着物の上からお尻を掴んだ。座っていたからお尻の方まで愛液が染みていて、びちゃりと御主人様の手のひらを濡らす。
「おッッ♥?　ほおぉっっ!??♥?♥?　おおおっ……♥?♥?」
　ああ――――と。
　再度、昨夜ぶりに自覚する。身体はもう、御主人様のモノだ。いくら秋葉さまたちに御膳立てされていたからって、匂いをかいでお尻を触られただけで子宮が落ちきりちんぽ挿入待ち状態になってしまうなんて普通じゃない。新たに分泌される愛液も、秋葉さまと翡翠ちゃんにあれだけしっこく触られていた時はさらりとしたものだったのに、御主人様相手だとたったこれだけの接触でどろっどろに糸を引く本気汁。志貴さんとのセックス中でも少し染みる程度だったそれが、今は既に下着を貫通してふくらはぎまで伝っていた。
　反射的に御主人様の胸元にすがりついてしまう。秋葉さまたちから見れば、それは発情したメス猫が身体をすり寄せているようにしか見えなかっただろう。
「はい、そうですご主人さま。今は皆で昨日の映像を見ておりました。ええ、志貴さまの味方を気取っていた姉さんを一晩で専用オナホケースにする手腕、改めて感服致します」
　翡翠ちゃんが、柔らかな口調で言う。わたしの記憶の中では、それは翡翠ちゃんが志貴さんと話している時の喋り方と全く同一のものだった。
「ひっ、翡翠ちゃん、たた、助け」
「姉さん、私も終いには起こりますよ?　ちゃんとご主人さまのお気持ちを汲み取ってください。ほら、腰に当たっているでしょう、姉さんが傅くべきモノが」

「――――、――――」
言われ、視線を落として。
ぶわあッ……と、冷や汗が吹き出る。ズボンの前をめりめりと膨らます股間のモノ。昨夜わたしの股ぐらを3割ほど拡張させ二度と戻らないよう均した肉塊が、帯の少し下、下腹部、子宮の直上に、ぐりぐりと。
「ッ……!??♥?♥?　ッッッ♥?♥?♥?♥?　〜〜っ♥?♥?♥?♥?」
必死に、志貴さんの顔を思い浮かべようとする。
でも裏切り者の子宮は、昨日出来たばかりの飼い主の感触に喜んでまたアクメする。むぎゅう、と更に密着させられて、ズボンの下から汚ならしい先走り汁が滲み、着物に染みて、その熱が伝わってまた甘イキ。御主人様さまにべろぉと頬を舐められてアクメ、胸元から腕を入れられて乳房を揉まれてまたアクメ。
駄目、だ。もう、この人がわたしにするどんな接触でも、それが性感に通じてしまう。だって、知っているから。このオスはわたしに快楽を与えてくれると、身体が学習してしまっている。
「はい、是非とも。反抗的な姉を躾けてやってくださいませ」
「おじさま言っていたでしょう、琥珀を寝取りたいって。ふふ、丁度いい食べ頃よ?」
何か言っている声がする。けど、なんて言っているかは、よく分からなかった。

「あっ♥?♥?　あんっ♥?♥?　ああっ♥?♥?　ごっ、御主人様ぁっ♥?♥?　待って、ピストン緩めてくださいぃ〜っ♥?♥?♥?」
ぱん、ぱん、ぱんっ――と。
廊下に肉のぶつかる音がこだましていた。着物を脱ぎもせず、袴をまくられてお尻が丸出しになったわたしの下半身に御主人様のちんぽが捩じ込まれていた。
最初は部屋まで連れていかれるのかと思った。きっと御主人様も

そのつもりだったのだろう。
だけど発情したオスとメスが二人連れ歩いていて、別に物陰じゃなく堂々と廊下で致していても誰にも咎められない環境だと思えば、その場でハメられてしまうのも道理だった。
壁に手をついた立ちバックは獣の交尾のようだった。早くメスの柔らかい肉でちんぽを扱きたい、尻肉のまろやかさを腰で味わいつつ挿入したいという御主人様の欲望まみれの体位だ。この屋敷でただ一人残った寝取られ順番待ちの女を後ろから犯すのはよほど征服感が刺激されるのだろう。ぐりぐりと股間を押し付けてわたしの蜜壺を貪る御主人様が恍惚のため息を漏らした。
「ん〝、お〝、お〝、お〝、ッ♥？♥？♥？♥？　深……ッ♥？♥？♥？♥？　奥まで届いちゃってます♥？♥？　やめてくらさいッ♥？♥？♥？♥？　子宮口虐めるの駄目えッ♥？♥？♥？♥？」
子宮の入り口をこりこり亀頭で潰されるたびに頭に電撃が走る。なんて、気持ち良いんだろう。これまでセックスは苦痛なものか、志貴さんと愛を確かめるものでしかなくて、快楽なんて二の次だったのに。御主人様のちんぽでは、理性が吹っ飛ぶほどの性感を覚えてしまう。
「は、はぁぁっ!?　ちがう、マゾじゃないですっ♥？♥？　うぅぅ♥？♥？♥？　そうですけど、敗北アクメでイカされてますけどおっ♥？♥？　わたし、これでも経験豊富なんですよっ??♥？♥？　こんなちんぽでちょっとおまんこを抉られたくらいじゃ、オほぉぉぉッッ♥？♥？　ガン突きやめてぇっ♥？♥？　子宮下りきってるんですからぁっ♥？♥？♥？」
ごっつん、と子宮を下からぶっ叩かれて身体がふわりと浮く錯覚。これも今までなかった感覚だ。志貴さんはこんなに力強くちんぽで内臓を持ち上げてくれなかったから。
自分でも驚くくらいおまんこが拡がって御主人様のちんぽを呑み込む。これじゃあ、それこそ御主人様専用のおまんこになってしまう。御主人様のぶっといちんぽでなきゃまともに締め付けも出来ない、ガバガバの膣穴になってしまう――。

「おうッ♥？♥？　おんッ♥？♥？　志貴さんのこと忘れたかって……そんなっ……こと、無いいっ♥？♥？　こんなちんぽでっ♥？♥？　ちょっと志貴さんより逞しいだけのちんぽで、わたしが負けるはず、なぁぁあああっっ♥？♥？♥？」

口答えにお仕置きの子宮ぶち抜きピストン。ただでさえ長大な上に子宮が降りきっていて、亀頭が子宮口に触れるまで挿れてもちんぽの7割くらいしか膣に収まっていない。それを無理やりぼっちゅんぼっちゅん突き込むものだから子宮口が弛んで胎内を明け渡そうとしている。

ぺちぃん、とお尻を叩かれ背筋にゾクゾク快感が走る。かんっぺきに、モノ扱いだ。負けてないと言い張っているのはわたしだけ。完全勝利を確信した御主人様はわたしを寝取りのスパイスを感じられる肉オナホとしか思っていない。

中年のたるんだ腹肉とわたしのお尻がぺちぺちぶつかる。本当にただちんぽと運だけが良かっただけの人でなしが欲望を存分に充たしている。何が恐ろしいかと言えば、御主人様がわたしの媚肉でちんぽを擦る度にわたしにも耐え難い快感が襲っているということ。カリで膣ひだを削られ、ぱつんと腰と腰がぶつかる度にわたしの生殖本能が叫ぶのだ。

――――孕んでしまえ。

――――余計なことは忘れて、このオスの立派な生殖器から恵んで貰った種子で交配してしまえ、と。

「ひ、痛……ッ♥？♥？　やめて、噛まないで♥？♥？　痕つけられたら志貴さんにばれちゃいますっ♥？♥？」

がぶり、と首もとに噛み付く御主人様。コレは、このメスは自分のモノだと言うようにわたしに歯形を残していく。歯形だけじゃない、虫刺されみたいなキスマークまで。戦利品に名前を書くのと同じ、持ち主の印を付ける行為だ。

征服、されている。わたしの中の屈折した性癖が反応してる。生来のものか、虐待を受けた故かは分からない。とにかくわたしの中に眠っている、オスに手荒く組伏せられたいという欲求が疼いている。

志貴さんじゃ絶対充たされなかったそれが、このオスなら自分を食い散らかしてくれると確信している――――。
「あ。やーっぱりヤッてた」
「ッ……!?」
　声に視線を向けると、廊下の奥からアルクェイドさまがこちらへ歩いていた。くすくすと目を細めている様子は、わたしの初めて見る――メスとしての顔。
「おじさん、琥珀のおまんこは気持ち良い？　……へえ、最高だって。良かったねー琥珀、おじさんのおちんちん、ちゃんと喜んでくれたってさ♥？」
　トコトコと近寄ってきて。アルクェイドさまは、躊躇いなく御主人様に口付けた。
「れろっ……ちゅ♥？♥？　んふ、好き……♥？♥？　だぁい好き、おじさん……♥？♥？　むちゅっ♥？♥？」
　頬をそっと両手で挟んでの甘いキス。それはまさしく恋人へするキスだ。
「え～？　今言って欲しいの？　琥珀をハメてるから？　もお、鬼畜なんだから……♥？」
　恥ずかしげに言いながらも、高ぶったように唇を舐める。
　そして、わたしのおまんこを犯している御主人様の耳元で囁く。
「おじさん、好き……♥？　一番好き……志貴よりも、好き♥？♥？　くすくす……♥？♥？　志貴の粗チンじゃ満足　出来ないの♥？♥？　オス失格の志貴じゃ話になんない♥？♥？　もうおじさんの格上おちんちんじゃなきゃおまんこに挿れたくな～いっ♥？♥？　ふふっ♥？♥？」
　熱く、吐息混じりの囁き。それは御主人様を賛美するものになっていく。
「良かったなあ、あの日、おじさんと浮気セックスして……♥？♥？　あの日までは志貴以外の人なんて考えられなかったのに♥？♥？　おじさんがかっこいいおちんちんで教えてくれたのよね♥？♥？　志貴はオスとして足りてないって♥？♥？　本当のセックスはこん

なに気持ち良いんだって♥？♥？　だから二人で計画したんだよね、志貴の周りの女の子、み～んなおじさんのモノにしちゃおうって♥？♥？」

御主人様の手が、アルクェイドさまの身体に絡む。薄く身体に張り付くニットセーターは、アルクェイドさまのノーブラおっぱいの形をくっきりと反映している。その巨乳を我が物顔で揉みしだき、掴むとフル勃起だと思っていたわたしの膣内にあるちんぽが更に硬くなっていく。

「わたしもけっこう根回ししたものね♥？♥？　シエルたちをレイプするおじさん、志貴の百倍かっこよかったよ……♥？♥？　シエルを襲って、妹を罠に嵌めて、翡翠を誘い込んで♥？♥？　やーっと琥珀におちんちん挿れられたね♥？♥？　志貴のハーレム丸ごと寝取るの、愉しかった？　優越感すごい？　そうだよね、みんな志貴のことが大好きだった女の子たちだもん♥？♥？　もう身体も心もおじさんのモノだよ♥？♥？　あとは……ほら、今おちんちん挿れてるこのメスブタだけ♥？　でもたぶん、あと何回かレイプしたら堕ちちゃうんじゃないかな……♥？♥？　だって昨日初めてハメ潰したのにもう堕ちかけだもん♥？♥？　もしかしたら一番おまんこ弱いんじゃない？　ほら、手加減なんていらないよ？　最後の一人をオナホにして、他人のハーレム完全制覇しちゃお……♥？♥？」

身体をまさぐるのに飽き足らず、御主人様とアルクェイドさまが唇を重ねる。わたしにしたような貪るものじゃない、それこそ恋人同士の愛情の籠ったキスだ。

口では吸血姫とラブラブディープキスを交わす一方で、下半身はわたしの――つまみ食いされた下女のおまんこで性処理中。女の子からの愛情を一心に受けつつ公認で違う女の子のおまんこにちんぽを挿れるのはさぞ愉悦だろう。ましてや両方が同じ男から寝取った女と来たら。

「アルクェイド、さまっ……そんな、酷いことを……♥？♥？」

「ん～？　でも琥珀もよかったでしょ？　おじさんがわたしたちを堕としてくれたおかげで、志貴よりもずっと気持ち良いセックスを知れ

たんだしさ。まあ結果オーライじゃない？　妹たちもきっと同じだよ、最初はビックリしたけど、今となっては志貴で女の子としての人生終えちゃわなくて良かったーって♥？♥？

――――ねえ？　琥珀も本当はそうなんでしょ？」

鋭く示された質問に、とっさに答えられない。

即答できないということ。それは、わたしの理性の崩れ具合を表していて。

なんだか、よく分からない。だって、もう自分だけなのだ。わたしと同じくらい、もしかしたらもっと強く志貴さんを思っていた皆は全員が鞍替えして、そしてその筆頭だったアルクェイドさまにこんなことを聞かれたら。

全部がひっくり返っていて、まだ一人だけ以前のままでいる自分の方が、おかしいような気になってしまう。

「おじさん、出そう？　うん、そりゃ分かっちゃうよ。いつもおじさんの精液なんて一滴も無駄にしちゃ駄目だーって抱かれてるんだもん♥？♥？」

「んうっ♥？♥？　は、あ……♥？♥？」

「それじゃ、琥珀の中にぜんぶ出そうか。そうだ、わたしがもっと気持ち良くしてあげるね」

そう言って、アルクェイドさんが蹲る。わたしじゃなく、御主人様の後ろへ。

「ん～っ……んぷっ♥？♥？　れるれる、んむぇ～っ♥？♥？」

にゅる、ぴちゃ、と音がする。

わたしからはアルクェイドさまが何をしているかは見えない。見えないけれど、音がする場所から、そして途端に御主人様が腰をひくつかせたことから、アルクェイドさまが御主人様のお尻を舐め始めたのだと分かった。

「じゅるっ、ずるるるる♥？♥？　べろ～っ♥？♥？　ぢゅうう～～♥？♥？」

御主人様の贅肉のたっぷりついた、汚ならしい臀部の尻穴にアルクェイドさまの赤い舌がねじ込まれているのだろう。金髪美女のア

ナル舐めは格別の快感のようで、御主人様が身体を強張らせる。ぷぴゅ、と先走り汁がおまんこに吹き漏れた。
「んんべぇろべろべろれろぉぉッ♥？♥？　じゅぶずずずずびぃぃッッ♥？♥？　ぶぢゅるるるるるるるるッッ♥？♥？♥？」
更に凄まじくなる、真祖の姫のアナルほじり。直腸まで舌が入り込んでいるのではないだろうか。御主人様のちんぽが耐えきれないと叫ぶようにわたしの膣内で激しく脈打つ。上向きの剛直に天井を抉られ、もうわたしも限界だ。
御主人様がアルクェイドさまの舌から逃れるようにわたしの最奥までちんぽを押し付ける。それでも舌は追ってきて、更に亀頭がごりごりと奥へ。たまったものではないのは子宮口だ。がっちり腰を掴まれて退けもせず、ただひたすらちんぽに嬲られる。
――――ばちん、と尻を叩かれる。射精するからもっと締めろ、という肉オナホへの下知。
それが、遠慮のない無責任生中出し射精の合図。
びゅる、びゅうう――――っ♥？♥？♥？　ぶびゅびゅびゅびゅるるるっ♥？♥？♥？　どぴゅるるるっ、どぷどぷどぷ♥？♥？　ぴるるる～～っ♥？♥？♥？
「んんぐあああっ♥？♥？♥？　イッッグ♥？♥？　オオッ♥？♥？　イッちゃいますぅぅぅ♥？♥？♥？」
どろっどろの精液を感じ、強制的にアクメへ飛ばされる。
こんなに濃い精液、間違いなく初めてだ。子宮に張り付いて、三日三晩落ちそうにない。
どくっ♥？♥？　どくっ♥？♥？　どぷぷっ♥？♥？♥？
「あぐぁ♥？♥？　くうっ♥？♥？　ま、まだ出て……♥？♥？　溢れちゃうっ♥？♥？♥？」
ちんぽが一跳ねするごとに精液の塊が撃ち込まれる。直接見なくたって分かる、ゼリーみたいに濃厚でずっしり重い御主人様の精液。妊娠を避けるなんて気は欠片もない、むしろ孕ませてやろうという気しかない無責任射精だ。
お腹がたっぷん、と重くなる。お目当ての精子と出会ってきゅん

きゅんと疼く子宮。今日は大丈夫な日だ。でも、決して絶対に孕まないという訳じゃない。何より、この御主人様の強い精虫だったら初潮前の幼女だって孕みかねない。
「どれだけ出すんですか♥？♥？　妊娠したらどうするの……♥？♥？　も、もちろん産ませるって……わたしはそんな気はありませんっ♥？♥？」
当然だ。こんな男の種で孕むつもりなんてない。志貴さんから全てを奪った下衆、遠野家を乗っ取ろうとしている下手人の子なんて。
そのはず。そのはず、なのに。
なんでわたしは、御主人様の赤ちゃんでお腹を膨らませる想像をして、頭を痺れさせているのか。
「うわ、まーたいっぱい出したね、おじさん。……でも一発じゃ足りないでしょ。琥珀はこれで根性あるから、まだきっと志貴のことが好きだよ。だからほら、気の済むまで恋人持ち家政婦さんを寝取りレイプし放題ってこと！　ふふっ、おじさんのちんぽでよがっちゃってる浮気者のよわよわおまんこ、戻らなくなるまでおじさんのおちんちんで調教しちゃえ～っ♥？♥？」
「嘘っ、待って、あ♥？♥？♥？　いやぁああ♥？♥？　もう精液でいっぱいなんですからっ、これ以上流し込まないでえええ♥？♥？♥？」
ぼたぼたと精液を股間から漏らしながら半泣きで懇願する。けれど興の乗った御主人様とアルクェイドさまが許してくれるはずもなく、数時間後わたしの腰が抜けて立たなくなるまで、廊下での生ハメバックは続いた。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

その日から、わたしは最下層の存在となった。
わたしが自分から持ちかけた『勝負』。その結果も、敗者へのペナル

ティも、わたしと御主人様だけでなく屋敷の滞在者全員が知るところとなった。勝手に身体をまさぐられるのは当たり前、土下座を強要されたり、全裸で屋敷を歩かされたり、犯されている映像の垂れ流し、そして当然、御主人様がムラッと来たらすぐさまおまんこを明け渡す精液便所扱い。

誰も庇う人なんていない。むしろ言外に急かされるくらいだ。

『早く折れろ』って。

『御主人様に奉仕する寝取られハーレムの一員となれ』って。

皆、信じて疑わない。志貴さんではなく、御主人様にひれ伏すべきだと。その方が琥珀も幸せになれるのだから無駄な抵抗はやめればいいのにと、わたし以外の全員が思っている。

志貴さんに心の氷を融かされた女の子たち。命も、心も、志貴さんが救ってくれたからこそ今、喜びを享受出来ている、遠野志貴の攻略対象ヒロイン。

それが今や、全く第三者の中年男を運命の人と仰いでいる。

どこかで歯車が噛み合わせを間違えたのだ。

そう思うけれど。

この閉じられた屋敷の中で、わたし以外の全員が口を揃えて言うのなら、まるで。

まるでわたしの方が、無用な抵抗をしているように思えてくるのも、また事実だった。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

御主人様が女の子に手を出す機会はどんどん増えていく。部屋の中だけでなく廊下やリビング、果ては屋敷の森でも交わるようになった。

それは、染みが侵食していくかのよう。ゆっくりと屋敷自体が御主人様の色に染まっていくのだ。

そうして、その手は志貴さんの近くまで及んでいく。

ある時は旧館で。いつものようにわたしが志貴さんを寝かし付けたあと――――。

「んむっ、むちゅううっ……♥？♥？　駄目です御主人様、志貴さんに聞こえてしまいます……あんっ♥？♥？」

出てきたわたしを待ち構えていた御主人様に唇を奪われた。どん、と壁に背中を押し付けられる。大して厚くない壁の向こうは、さっきまでわたしの膝枕で安心しきっていた志貴さんが眠っているはず。

眠りに落ちるまで見届けたから、起きてはいない。いないと思うけれど、どうしても声を潜めてしまう。

「れるっ……ちゅ……♥？♥？　し、志貴さんと……？　そんな、キスなんてほいほいする物じゃありませんっ。御主人様とは……無理やりさせられてるだけで、あ、ンンッ♥？♥？　んん～～っ♥？♥？」

さっきまで、ほんの数分前まで志貴さんと穏やかな時間を過ごしていたっていうのに。その足で御主人様と舌を絡めている。

……嫌悪感というのは、段々と薄れていくもの。今では御主人様とのキスをろくに拒むこともなくなっていた。

じゅるじゅると舌を吸われると頭に響くようで思考がぼうっと霞んできてしまう。同時に股間が熱く、湿り気を帯びてくる。

感じている。唇を合わせるだけで御主人様のちんぽを迎え入れる準備をするようになった自分の身体を、制御出来ない。ぱくぱく開閉する膣口からは愛液が垂れ流しだ。

御主人様に腰を抱えられ、背中を壁に預けた駅弁の体勢に。おまんこに宛がわれたちんぽは、吸い込まれるように挿入された。

「んぅ、ふうっ♥？♥？　あんッ♥？♥？　駄目、そんなに壁、ぎしぎしさせたら♥？♥？　志貴さんに聞こえちゃううっ……♥？♥？」

旧館はふるい木造だ、人間が二人体重をかけていたら簡単に軋んでしまう。わたしの子宮に亀頭が当たる度に、ギッ、ミシッ、と異音が響く。

――――琥珀さん？

「ッッ……!!?」
心臓が止まる。
聞き慣れた、優しい声。それはさっきまで聞いていた、志貴さんの声だった。
「し、志貴さん!? 起こしてしまいましたか……っ♥?♥?」
いつもは一度眠ったら目を覚まさない志貴さん。だけど今日に限って寝付きが悪かったらしく、物音で起きてしまったらしい。
「い、いえ、何でもっ♥?♥? ほら、こちらはずっと掃除してませ、んんッ♥?♥? し、してませんでしたからっ。夜のうちに雑巾がけでもしておこうかと……♥?♥?」
志貴さんが寝惚けた声で、そうなんだ、ありがとう、と呟く。……どうやら、ほとんど夢の中にいるみたい。
これなら何とか誤魔化せそう――と思った矢先、
「んぐぉおおッッ!?♥?♥? ご、御主人様、おやめくださ……♥?♥?」
ごっちゅん、と。わたしの体重ぶんをかけた駅弁ピストンで、子宮が貫かれる。
視界に星が飛ぶ。快楽を通り越した激感に意識がショートしかけた。
「はっ……はい、何でも……♥?♥? 何でもありませんよ志貴さん……♥?♥? ちょっとバケツを倒してしまって……お〝ッ♥?♥? うぉッ♥?♥? い、いえ、大丈夫ですからっ♥?♥? どうか早くお休みください……♥?♥?」
早く。早く眠って欲しい。
志貴さんがさっさと眠って退場してくれないと、いつまで経っても気持ちよくアクメ出来ないんだからと、そう思ってしまった。
「はーっ……はーっ……♥?♥? ……志貴、さん? ……眠られましたか……?」
声がしなくなった。御主人様と二人で耳をすませて、志貴さんがやっと深い眠りについたことを察した。
そうなればもう、余計なことに頭を割く必要もない。

「ご、御主人様……♥？♥？　あの、志貴さん、眠ったみたいで……あんッ♥？♥？　あっ♥？♥？　あっ♥？♥？　あっ♥？♥？　ああ♥？♥？　子宮、貫かれてっ♥？♥？　子宮口で亀頭、ちゅぱちゅぱ吸っちゃってますぅぅ……♥？♥？」

細身の志貴さんと違って御主人様の身体は大柄だ。太い腕に支えられていると安心感がある。

すぐそばに志貴さんが眠っているというスリルもあってか、いつもより興奮するくらいだ。ゴツゴツと子宮を射抜かれて、あっという間に絶頂へ届いてしまう。

「あ、んんんッ……♥？♥？　イッ……くぅぅぅ……♥？♥？」

僅かな理性がわたしに声を抑えさせた。自分の指を噛んでどうにか叫びを噛み殺す。

ほぼ同時に御主人様も射精していて、とぷとぷと精液が注がれる。夜の森で、御主人様と二人で身体を震わせていた。

またある時は、とある樹の下で。

「ふッ……♥？♥？　ふぅーっ♥？♥？」

ズボンを下ろした御主人様の股間に顔を埋めるわたし。

晴天のもと、大樹の下は日陰になっている。

日光から切り取られた空間で、下着のうえから顔面コキをしていた。

ついさっきまでいつも通り玄関の掃き掃除をしていたというのにたった数分でこれだ。学園の仕事から帰ってきた御主人様は玄関先で箒を持っているわたしを見るや否や、腕を掴んでここまで引きずってきた。

「うわ……ますます大きくなって……♥？♥？　女の子の顔面にちんぽ擦り付けて勃起強くするとか……♥？♥？　恥ずかしいとか思わないんですかっ♥？♥？」

……まあ、そんな神経があったら自分の生徒の周りの女の子を寝取るとかする訳ないんですけど。というか、わたしの言葉でかえって勃

起してますし。
薄い布越しに感じる肉棒の熱さ、逞しさ。顔が火照ってしまいそうだ。
仕方ない。仕方ないので、下着の上から唇を落とす。むちゅ、ぺろ、と唇と舌で刺激するとちんぽが跳ねて先っぽの部分がじんわりと染みてくる。ますます汚くて心臓がばくばくした。
「きったな……♥？♥？　これ誰が洗うと思ってるんですか……♥？♥？　これ以上汚れたパンツ洗うの嫌ですから早く脱いでください♥？♥？」
ずる、と下着を引き落とす。
飛び出てきたちんぽはもうフル勃起。ぴくぴく震えて、柔らかい女の肉を求めている。
すん、と匂いをかぐ。御主人様の体臭と同時に、しないはずのかぐわしい香りがした。
「むっちゅ♥？♥？　れろ……♥？♥？　御主人様、ちんぽから女の子の匂いがしてます……♥？♥？　学校で誰かにしゃぶらせてきましたね♥？♥？」
間違いない。だって幹はおろかカリ首まで恥垢が全くなくぴかぴか、一日放置していれば当然するはずの汗の匂いがしてこない。キンタマ袋にはリップの薄桃色がべったり、根本に鼻をくっつけて思い切り息を吸い込めば爽やかなリンスの香りまで。間違いなくほんのついさっき、女の子にこのちんぽをディープスロートさせていたのだ。
「御主人様、どなたと……？　シエルさまですか？　まったくもう♥？♥？」
しかし、なんだか癪だ。そりゃあわたしはいつでもどこでもハメれるちんぽケース、御主人様のお手付き自由の小間使いではあるけれど。
それでもこんな、学園であの女生徒にちんぽしゃぶらせたから帰ったらあの家政婦とどっちのお口の具合いがいいか比べてみよう――なんて扱いは癇に触る。こっちにだって女としてのプライドがある。御相手がシエルさん――経験の浅いだろう女生徒ときたらなおさら

だ。
「御主人様、酷いです……♥？♥？　二発目だからって容赦しません。腰が抜けるまで吸い取って差し上げますからね……♥？♥？」
――――そう宣言して亀頭を頬張るわたし。
まあ、当然の帰結と言いますか、
「おぶッ♥？♥？　ごッッぼ♥？♥？　んぶぷッ♥？♥？　ぶちぶちゅちゅんぶぶぶぷぷっっ♥？♥？♥？　んぐぶぅ～～ッッ♥？♥？♥？」
数分後。そこには頭を掴まれ口を非貫通オナホールとして使われているわたしがいた。
調子に乗ったわたしの発言を聞いて御主人様は激怒された。数発頬をちんぽで張られ、屈辱甘イキアクメで弛んだ唇にちんぽをねじ込まれた。そのあとは安物の性具扱いだ。顎がはずれかねない勢いで太いちんぽを出し入れされていた。
「んぶッ♥？♥？　ぶッ♥？♥？　ぶッ♥？♥？　ぶぅッ♥？♥？っっ♥？♥？」
酸素が足りなくなってぼうっとしてくる。ふらふらと視線はさ迷い、頭上の緑葉樹へ。
……ああ、そうだ。なんて懐かしい。ここは、志貴さんと別れた場所。
まだ幼い時分。志貴さんが屋敷を追い出され、もう二度と会えないと思った時、思わず駆け出したわたしはこの樹の下で志貴さんと初めて言葉を交わしたのだったか。
あれから何年もたち、志貴さんが戻って来られて、それはそれは嬉しかった。この樹の下で思い出に浸った時もあった。
そしていま、巡りめぐってここで御主人様のちんぽを呑み込んでいる。正確にはイラマチオで喉を犯されている。……一体どういう因果なのだろう。全くもって理解できない。
「んぐおッ――んんんん～っ♥？♥？♥？　ごぼぉぉッ♥？♥？

ごぶッ♥？♥？　ごきゅっ♥？♥？　ごくッ♥？♥？　ごくん♥？♥？　んくっ♥？♥？」

勿論、御主人様はそんな事に頓着しない。

むしろわたしの感傷も汚すように射精する。わたしは必死で、盛大にぶちまけられる精液を飲み干した。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

それからしばらくして、御主人様がわたしに手を出すことは少なくなった。

理由は分からない。何となく、わたし以外の――秋葉さまやアルクェイドさんたちも、取っ替え引っ替え抱いているという感じではなくなった。

もしかしたら、飽きたのだろうか。そうなら助かるけれど……御主人様がアルクェイドさんたちのような美女を飽きるかどうかは、怪しい所だった。

「あら、姉さん」

「翡翠ちゃん……」

ある日、ばったりと翡翠ちゃんと出くわした。

わたしはお掃除が終わり、部屋に戻るところ。翡翠ちゃんはいつものメイド服だ。また御主人様のお世話だろうか。

「翡翠ちゃん、大丈夫？　御主人様に酷いことされてない？」

「なに言ってるんですか。そんなことより、嬉しいことがあったんです。ふふ、私が一号なんですよ」

「はあ……？」

翡翠ちゃんはいつになく陽気だ。滅多に表情を変えることがないのに今は見て分かるくらい頬を染めている。

「何かあったの、翡翠ちゃん？」
「はい。そうですね、姉さんに最初に教えましょう。ほら、これです」
そう言って、翡翠ちゃんは棒状のモノを差し出した。
使ったことはなくても、誰しも存在くらいは知っているモノ。わたしもそうだ。これが何の用途に使われるモノかはよく知っている。
それは――妊娠検査薬だ。尿をかけて妊娠の有無を検査するタイプ。真ん中の小窓には、妊娠の証である黒線がくっきり浮かんでいる。
「え――う、嘘……？」
「嘘な訳ありません。私、ご主人さまのお子を授かったのです」
目の前が真っ暗になる。
翡翠ちゃんは声を弾ませて言う。彼の遺伝子で孕んだのが嬉しくて堪らない、その結果に欠片も後悔はないという顔。
わたしにとっては真逆だ。
正直――心のどこかで思っていた。いずれ翡翠ちゃんたちも目が覚めて、以前の皆に戻るんじゃないかと。楽観的すぎるかも知れないけれど、それでも信じずにはいられなかったのだ。
「う……産むの、翡翠ちゃん」
「??　当然ではないですか。堕ろす意味がありません」
「……」
「危険日に溢れるほど中出しして頂いた甲斐がありました。私が孕んだということは他の皆様も遠からずでしょうね。ご主人さまは私たち一同に種付けされたがっておられましたから。秋葉さまたちもたっぷり精を注がれているでしょう」
お腹をさすって翡翠ちゃんは言う。
――ぐらり、とした。
頭をハンマーで殴られたような気分。
足元がおぼつかない。
喉がからからに渇いている。
どうしてか、胎内の下の方がきゅっとなった。
「ぁ……わ、わたし部屋に戻るね、翡翠ちゃ――」

何故だか怖じ気づいて歩き去ろうとする。
だけど、後ろから引き留められてしまった。
「待ってください姉さん。妹が妊娠したというのにおめでとうの一言もないんですか？」
「……そんな、おめでとうなんて言えない……」
「ふうん。それはどうしてです？」
「だ……だって、あんな人の」
子どもだから――と。
言葉を絞り出したわたしに、翡翠ちゃんは笑った。
それは、いつもの優しい微笑みではなく、しっとり濡れた女の嗤い。
「姉さんこそ嘘をついて。そんな理由ではないでしょうに」
「ど、どういう事」
「簡単な話です。本当は羨ましくて妬ましいから言えないんですよね、姉さん」
「……は？」
理解出来ない。
翡翠ちゃんはいったい何を言っているのだろう。
羨ましい……？　そんな訳がない。あんな男の種で孕むなんて寒気がする。抱かれるのだって嫌。本当は彼がこの屋敷にいること自体我慢ならないのだ。だから大事な翡翠ちゃんが彼に孕まされて喜べないのは当然。そして翡翠ちゃんの指摘が大外れなのも当然だ。
そう、当然のはず。わたしは何も間違ってない。何もおかしくなんかない。
そのはずなのに。
「ふふ、お腹を膨らました姉さん、きっと綺麗です。着物の帯、新しいの買わないといけませんね。……ああもう、そんなに顔を赤くして。想像しただけで達しそうでしょう？　お腹をぼてっとさせられて、きっと重いのでしょうね。ご主人さまのせいで身軽に歩くことも難しい身体にされてしまうんです。女にとって一番大切な場所である子宮をご主人さまに差し出しました、って大きくなったお腹で皆に宣言するのですよ。もちろん志貴さまにも、『他のオスに奪われました』

『貴方よりも先にあのオスの精子で孕みました』『もう貴方の精子で孕む隙間はありません』ってそのお腹でもって突きつけるんです。あっと、ほら、私の腕に掴まって。そんなに脚を震わせて……もしかして甘イキしてしまいましたか？　でも気持ちは良く分かります。毎回のセックスであんなに負かされて、その敗北感をクセにさせられて、そのうえで最後には孕まされて。人生そのものを征服されてしまうんですから、想像しただけで堪えられない屈服アクメですよね？」

「――――、――――」

……そのはず、なのに。

どうしてわたしの鼓動は、こんなにも上がっているのだろうか。

ばくんばくんと心臓が跳ねて嘔吐きそうなくらい。涎が溢れそうになって慌てて口を塞いだ。じゅる、と唇の端から唾液が漏れる。

ひく、ひくん、と腰が甘く疼く。

視界が狭窄していく。一つのことしか考えられなくなる。頭の中でがんがん鳴り響いている。どうにかしてそれから目を逸らそうと身体を強張らせて震えを抑えるしかない。

――だっていうのに。

「……あ。分かりました。姉さん、今日危ない日なんですね」

翡翠ちゃんは、事も無げに言い当てた。

「成る程、そういうことでしたか。道理で盛りを堪えたメス犬のような顔をしていると思いました。こそこそ逃げ隠れしているのもその為ですね。確かにそんな身体でご主人さまに抱かれては一発で着床でしょう。しかしなんと哀れな。もしやこのあと、一人で慰めるつもりでしたか？」

「ち、ちが……あ、哀れって」

「だってそうでしょう？　私の報告を聞いただけでそんな状態になってしまうというのに、下らない建前でご主人さまの子種を戴くことも出来ず自分で処理しようというのですから。何が哀れって、姉さんの子宮が何より哀れでしょう。もう相手を見定めているというのに空っぽのままで過ごさなければいけないなんて」

いつしかわたしは、妹に壁際まで追いやられていた。

翡翠ちゃんに見下ろされている。いや、見下されているかのよう。背丈は同じだというのに、抜けそうな腰を壁にもたれて支えているせいだ。明かりを遮られ薄く翳った中、翡翠ちゃんの――名前の通りの――宝石のような瞳が輝いている。

「哀れといえば志貴さまもでしょうか。こんな孕みたがりの雌が側にいながら生殖相手にも選んで貰えないとは。姉さん、ご主人さまに孕まされたくないのならそれこそ想い人である志貴さまと子作りすればいいというのに――そもそもその選択肢が浮かばなかったのでしょう？　それはとても正しいですよ。きっと姉さんの子宮もほっとしているでしょう、ご主人さまというオスを知っておきながら志貴さまに孕まされるなんて屈辱もいい所ですもの。そのオスとしての魅力のなさも、姉さんにオスとして見て貰えないのも哀れというか――侘しいというか。元主人ながら、お気の毒に」

以前の翡翠ちゃんなら有り得なかった言葉。わたしだけでなく志貴さんも見下す翡翠ちゃんは異様な迫力と、優越感に溢れているように見えた。

ぺたん、と尻餅をついたわたしへ覆い被さるように翡翠ちゃんが膝をつく。もしかしたら殆ど初めてかも知れない、翡翠ちゃんからの抱擁。

「姉さん？　くすっ……いいかげん素直になったらどうです？」

「う、ぁ……翡翠、ちゃん……」

「今からでも遅くありません。いえ、姉さんが求めてくれたとなったら、ご主人さまはこれまでの無礼も全て水に流して下さるでしょう。姉ちゃんが一番良いようにしてくれます。ですから」

翡翠ちゃんはぴっとりとわたしの耳朶に唇を付けて、熱く、吐息混じりの声で、

「今日は私が夜伽の担当ですので、宜しければ――交ぜてあげてもいいのですよ？」

そう囁いた。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「はっ、はっ……!!　はあ……!!」

瓶が並べられた戸棚を乱雑に漁る。

その中の一つ、薄茶の遮光瓶を見付けて手に取った。

「これだ……！」

中には錠剤がほんの数個だけ入っていた。わたしの手製、コーティングなどはない白い素錠だ。

翡翠ちゃんの誘惑から這々の体で逃げ出したわたしは自分の研究室へと飛び込んでいた。内緒で作った屋敷の地下にある部屋だ。特に志貴さんが来るまでの間、わたしはここで色々と実験をすることがあった。

わたしの手にあるのもその産物の一つ。

これは、屋敷の裏庭で栽培した薬草から作った薬だ。

一言で言うならば、即効性の排卵誘発剤。催淫剤としての効能も入っている。

「もう、これしかない。これを使えば……」

じゃら、と手のひらに錠剤を転がした。

ただでさえ危険日真っ最中。更には『ご無沙汰』なせいで身体は発情しっぱなし。

そこにこれを飲めば――きっと孕めるはずだ。

もちろん、御主人様の子じゃない。志貴さんの子だ。

悔しいけど、翡翠ちゃんの言う通りだ。御主人様とのセックスを知って、わたしは当てられてしまっていた。志貴さんが大変な状況であることもあって性行為をしようという発想すらなかった。……確かに、本能的に選択肢から外していた面も有るかもしれない。

でも、この薬はきっとそんな建前を打ち崩してくれる。御主人様と志貴さんのセックスの差なんて気にならないくらいに感じて、孕み率１００％になった子宮で志貴さんの精子を迎え入れれば間違いなく妊娠できるはずだ。

わずかに躊躇してから覚悟を決める。早ければ早い方がいい。もしこの先、また御主人様に襲われて孕んでしまうとも限らない。
だから――今日だ。今日、思いきってこれを飲んで、そして志貴さんと。
「――――――っ」
放り込んだ錠剤を、カリッ、と奥歯で砕いた。水なしでもとにかく胃に落とせばいい。
ごっくん、と嚥下して一息つく。……流石に数秒で効果が表れる、なんてことはないだろう。経口剤は吸収まで時間がかかる。
「……ふぅ。でもこれで」
少なくとも。少なくとも、わたしはまともでいられる。
志貴さんの味方の、琥珀さんでいられる。
はずだ。

それから３０分ほどして、じんわりと下腹が熱くなってきた。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「ふふ♡♡　ご主人さま、あーん♡♡」
ぱくっ。
私が差し出した料理を、ご主人さまが頬張りました。
ご主人さまの夕食の取り方はまちまちです。外で食べてくる日もありますし、私以外のアルクェイドさまやシエルさまと取られることも、もちろん皆で一緒の場合もあります。
とはいえその中でも一番多いのが、私と取る食事。お互い、食事を食べさせあいっこするのが癖になっているのかも知れません。今もご主人さまの膝の上にのり、甲斐甲斐しくお渡ししていました。
「あ、んッ……♡♡　ご主人さま、手が♡♡　い、いえ、確かに手持ち無沙汰とは思いますが……」

両手が暇になったとのことで、もみゅもみゅ、とお尻を揉み込まれました。ご主人さま指定の紐パンツが頼り無げに捩れます。
「ごひゅじんしゃま、あ～ん……むちゅっ♡♡　れる……♡♡　ん、むっ♡♡　ちゅっ♡♡　んん～っ♡♡」
食事を軽く咀嚼してからご主人さまに口移し。そのまま深いキスをされてしまいます。
ぴちゃぴちゃとリビングに舌をからめる音が響きます。皆様気を遣って下さったのでしょう、食卓には二人きり。このあと就寝前のセックスが控えていることもあってご主人さまの動きは遠慮がありません。お尻にあてられていた手はいつの間にか前へ。隙間からくちくちと膣口が弄られぴっちり閉じていた割れ目が綻んでいきます。
先ほどご主人さまに妊娠をお伝えしたところ、それはそれはお喜び戴きました。間違いなく志貴さまではなくご主人さまのお子です、なぜならもうずっと志貴さまと寝ておりませんから――と申したとき、ご主人さまの股間がむくっと膨らんだのを覚えています。
妊娠したこともあって他の方の孕ませを優先されるかとも思いましたが、そこは色情魔のご主人さま。孕ませた女に無責任中出しするのも乙なものと当然の如く抱いて戴けるようでした。
これは、いわば前戯のようなもの。私をまさぐってご主人さまのおちんちんも既にズボンのなかで主張を強めています。
「はい、それでは参りましょう……♡♡　ご主人さまに種付けされた身体、ご自由になさってください♡♡」
食事も終わり、本題であるまぐわいの時間。ご主人さまに腰やら胸やら抱かれながらリビングを出て移動します。
目指す先はご主人さまのお部屋です。私の自室でも良いのですが、やはりご主人さまのベッドに招かれた方が幸せというものですから。
と――その途中。
「あら？　どうしたの姉さん、こんな所で」
廊下の隅、ちょうど昼間と同じ辺りで姉さんに出くわしました。
と言っても、その様子は異なっています。具合が悪いのかよろよろと足を引きずり、壁に手をつかなければ倒れてしまいそう。顔も真っ

赤で顎に伝うほどに汗だくです。
私の声に視線を寄越しますが、熱病にかかったように目はうつろ。まともに頭が働いているか怪しく見えます。
「姉さん……？　ちょっと、大丈夫ですか」
「ひ、すい、ちゃん……？」
「ええ、私です。ほら掴まって」
抱き留めるとじんわりと熱が伝わってきます。厚めの和服の上からこれでは、実際の体温は相当でしょう。
私の肩に掴まった姉さんが顔を上げて、ひぃ、と後退りました。どうやら今さらご主人さまに気付いた様子です。
「あ、う、ぁ」
姉さんの顔から更に汗が噴き出します。熱いのに真っ青というなかなか器用な表情です。
一見体調が悪いように見える姉さん。しかし、私は大方の事情を察していました。
あからさまに濃厚に、ぷんぷんと。むせかえるような匂い。姉さんの身体から立ち上る匂い。
それは――性臭です。お腹の中にたまごを抱えて精子を欲しがっている発情期丸出しの孕ませ希望メス臭です。
危険日だった姉さんですが、それだけでここまでの状態にはならないでしょう。ならば、なんらかの方法を用いたという事で。
「ああ――可哀想な姉さん。志貴さまは満足させてくれませんでしたか？」
「うっ、うう……♥？」
「ほら泣かないで。気持ちは分かります。せっかく志貴さま用に卵子を準備して――きっとお薬も使ったのでしょう？　だっていうのに腰抜けセックスで終わってしまったのですね。ご主人さまと比べたらエッチも駄目で、精液も――」
するり、と着物の裾をまくると、やはり太ももにはべっとべと。精液と愛液の混ざった淫汁が張り付いています。
量はかなりのもの。数時間に渡り志貴さまに跨がってどうにか精

液を胎に収めようとする姉さんの姿が容易に想像出来ます。しかし、それは決して濃厚なものではなく。ご主人さまの粘性の強いタールじみた精液に比べればまるで水のようなさらさらとした液体でしかありませんでした。

「あらあら。志貴さまの精液、また更に薄くなっていませんか？　性行から遠ざかった為でしょうか。精神状態もあるのでしょうが……確かに、こんな米の研ぎ汁みたいな精液で孕みたくはありませんよね」

「ちが、違うぅ……♥？」

「何が違うのです？　こんなの推測するまでもなく分かります。志貴さまとのセックスで孕もうとして、でもよわよわ精子じゃ無理っぽいからお薬を使って、そうしたらぜんぜん満足出来ずに逆に身体を昂らせるだけの逆効果になってしまったんですよね。今ごろお腹の中で卵子が右往左往していますよ、せっかく排卵されたのに肝心の精子が襲いに来てくれないって」

――でも、と。蹲った姉さんの顔を上げさせました。

ぴっとりと姉さんの顔面に密着する肉塊。理解の追い付かない姉さんが寄り目になってそれを凝視して、ゆっくりと呑み込んでいきます。

「……あ♥？♥？　あああぁぁぁぁ♥？♥？♥？」

ずるぅり、と鼻梁を撫で上げる、姉さんの高まった体温より熱い肉棒。

私との愛撫で既に勃起したご主人さまのおちんちんが、姉さんの理性を焼きました。

姉さんの瞳孔が開いていきます。

異常なまでに興奮した身体を持て余している所に押し付けられた、特大おちんちん。きっと今、姉さんの頭にはこのおちんちんにハメられた時の快楽が怒涛の勢いで思い出されていることでしょう。

ぺたん、と床についたお尻はへこへこと揺れて、眉尻はとろんと垂れ下がり、だらしなく鼻の下が伸びていきます。試しにご主人さまが腰を引き、それに合わせておちんちんに引かれるがごとく顔が追い掛

けていく様はさながら釣られた魚のよう。しまいには腰に抱き付き顔面でご主人さまのおちんちんと金玉を抱擁し始めました。
「むふーっ♥？♥？　んふぅううう♥？♥？　すうっ♥？♥？　はあぁぁぁ……♥？♥？」
　金玉袋の裏っかわに鼻先を埋めて深呼吸。そこにお目当ての精液が詰まっている故でしょうか。鼻で裏筋を擦り、頬で袋を磨きます。手強かった使用人が精子をおねだりしているのを見てそそられたのか、ご主人さまのおちんちんも更に硬さと大きさを増していきました。
「はっ、はあっ……♥？♥？　嘘、嘘です♥？♥？　これ以上ちんぽおっきくなるとか絶対嘘♥？♥？　あっちゃいけないことですっ♥？♥？♥？」
「嘘ではありませんよ姉さん。ああ、ちなみに今は勿論、以前姉さんを犯していたときもこのおちんちんは本気ではありません。ご主人さまのおちんちんが本当の本気になるのは、孕ませ完全同意セックスの時だけですから」
「ふぅっ♥？♥？　ふ――ーっ♥？♥？」
　ぷちゅ、ぴゅるっ。
　鈴口から吹いた先走りが姉さんの顔に引っ掛かります。
　粘液をぬめぬめと顔に広げていく亀頭。姉さんはもう息も絶え絶えに瞳を上向かせて甘イキします。
「姉さん。これから私はご主人さまに組伏せて戴き、逞しいおちんちんでごりごりお腹を抉られて、おまんこから溢れるまで精液を注いで貰うのですが」
「は……」
　姉さんの顔に頬を寄せます。
　びちゃあっ……と張り付く先走り。私と姉さんの頬でおちんちんを優しく挟んで。
「お昼も言った通り――姉さんが望むのでしたら、御一緒に如何でしょう？」
「は……あ……♥？」

ぐるぐる揺らめく濁った瞳。
やがて、姉さんは――――、

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

「今までの無礼を御詫び致します……」
ふかふかの絨毯に額がめり込むまで頭を下げた。
三つ指をついてひれ伏す、わたしに出来る最大限に反省の意を示したポーズ。『もう逆らいません』『わたしが間違っていました』『貴方が全て正しかったです』――と御主人様に伝わるように、だ。
「ふふっ――♡　ご主人さま、姉さんの土下座でまた勃起なさるなんて。ええ、不遜にもご主人さま以外の精子で孕もうとしていた姉さんの敗北宣言、しっかり御覧になってください♡♡」
翡翠ちゃんが頭上で煽るのが聞こえる、けれど面を上げることは許されない。
御主人様の寝室で、ベッドの上の御主人様へ床からの土下座。わたしは全裸だった。身に付けているのは髪をむすぶリボンのみで脱いだ服は傍らにしっかり畳んで置かれていた。御主人様の言い付けで、一番上に脱ぎたてショーツをちょこんと乗せて。
「わたしが間違っておりました……♥？　どうかお許し下さい♥？　どのような罰でも受けます♥？　さっき志貴さんに抱かれたんです。すっごく――すっごくつまらないエッチでした……♥？　もう駄目なんです、御主人様とのセックスを知ったら、志貴さんのセックスなんて子どものお遊びにしか思えません♥？♥？　ちんぽは小さいし硬さが足りないし精液も薄いし♥？♥？　なにより『こいつを種付けしてやる』って気概がまるで足りないんです♥？♥？　あんな腰抜け、こっちだって孕まされるのは御免ですぅ♥？♥？」
志貴さんは優しい。でもそれは時と場合に依るというもの。
ちんぽまで優しく軟弱じゃあ話にならない。わたしの過去を慮っ

てくれているんだろうが余計なお世話だ。
ぐり、と頭に重みが掛かる。御主人様が足で踏みつけたのだ。この屋敷に唯一残っていた障壁を打ち崩した達成感を踏み締めているに違いない。
「んぐうッ♥？　ぅぁ……♥？」
志貴さんにはない横暴さを見せられて胸がときめく。負ける訳にはいかないと気を張っていたのが破れた反動か、手荒く扱われる事に甘美な快感を覚えてしまう。
「ご主人さま、どうぞこちらへ♡♡　即ハメも良いですが、今回は姉さんを確実に妊娠させることが最優先ですから――少しでもたくさん精液が出るように、私のおまんこで下準備致しますね♡♡」
元・志貴さんのベッドに横たわる御主人様と、その上に跨がる翡翠ちゃん。翡翠ちゃんもわたしと同じ、全裸にヘッドブリムを着けただけの格好だ。
仰向けになったご主人さまの股間には天に向かって巨根ちんぽが屹立している。既に限界近くまで膨れ上がって鈴口からはぬらぬらと先走りが亀頭をぬらしていた。
翡翠ちゃんはみっともない蟹股になって男性器を腹へ収めていく。御主人様の身体には負荷をかけないよう接地面はお互いの性器のみ。蹲踞の姿勢になってにゅるにゅるとスクワットし、御主人様ちんぽを自らのおまんこで扱いていく。
「っふ♡♡　んんっ♡♡　はっ♡♡　くすっ、ご主人さまのおちんちん、私のおまんこ磨きで益々大きくなっております……♡♡　ほら、姉さんもしっかりおまんこを解しておいて♡♡　ちゃんとこのおちんちんをお迎えできるように……♡♡　さっきまで挿入していた志貴さんの粗チンとは比べ物になりませんから♡♡」
「はぁ……♥？」
ああ、言われなくても、全然違うってよく分かる。みちみちと拡げられる妹の膣口がそれを証明している。
机の上に転がっていた大人の玩具を手に取る。ピンク色をした、男性器を模した張り型。こういったものが散乱している御主人様の部

屋を以前は近寄りたくもないと思っていたのに、今では自主的に抱かれに来ているなんて不思議なものだ。
妹の性交を見せ付けられながら、張り型を自分のおまんこに挿入していく。志貴さんのモノより大きく、御主人様のモノより小さいといったところ。柔らか目のシリコンバイブを翡翠ちゃんのピストンスクワットに合わせて出して、入れて、また出して。押し退けられた膣内の精液がこぼれ落ちていく。志貴さんには悪いけどこれだけでも志貴さんとのエッチよりも気持ち良いくらいで、知らず知らずのうちにどれほど御主人様に開発され快楽の閾値が高くなってしまっていたのか改めて自覚させられてしまう。
「ほッ♡♡　ぅおッ♡♡　っっぐぅ♡♡　も、申し訳ありませんご主人さまっ、あ、余りに気持ち良すぎて……少しピストン緩めさせて戴きま――ッッぐぅぉぉお!?♡♡♡」
翡翠ちゃんの泣き言をご主人さまが許すはずはなかった。
ごつん、とちんぽに子宮を突き上げられ翡翠ちゃんが絶頂した。それでも自分で決めた役割を果たすよう、ガクガクと震える膝を立たせてちんぽ扱きオナホ役を継続する。
「ふッ、ふーッ♡♡　い、いえ、駄目ではありません……♡♡　勿論ご主人さまのお好きに虐めて下さって結構で御座います♡♡　では、ピストンを再開――オッ♡♡　おッッほ♡♡　ふぐっ♡♡　ぅおお♡♡」
健気な様子に嗜虐心を刺激されたのか。にやついた御主人様がゴンゴンと腰を突き上げる。
……寄り目で喘ぐ翡翠ちゃんは、今まで目にしたことのない姿だった。大切にしていた、槙久さまや四季さまから身を挺して護った妹が中年男の肉穴になっている様は、崩れたわたしのプライドを更に粉々にした。
なんと言うか。ようやく理解した。
わたしの抵抗が実を結ばなかった、というよりは。初めから、御主人様に楯突くこと自体が間違いだったのだ。
ああ、こんなことならさっさと諦めていればよかった。

そうすれば、御主人様の手を煩わせることも、志貴さんのしょぼいエッチの相手をすることもなく、晴れて翡翠ちゃんと一緒に双子姉妹オナホになっていたんだから。

「おッおおおぉぉおおおお……♡♡♡　ご主人さま、申し訳……あ、ありまへっ♡♡♡　お、オナホの役目もまっとう出来ず……翡翠はわるいメイドで御座います……♡♡♡　そんな、よく頑張ったなんて、勿体ない御言葉……♡♡」

ついに翡翠ちゃんは腰を抜かして御主人様の胸元に倒れこんでしまった。

御主人様は大柄だ。翡翠ちゃんの身体はすっぽり収まってしまう。

御主人様に髪を撫でられて翡翠ちゃんが目を細めて笑う。志貴さんにだって見せたことのない表情。きっと最初は身体を篭絡されたことから始まった関係だろうに、子宮を堕とされ心を堕とされいつの間にやら恋愛感情までもそっくり寝取られてしまったのだろう。翡翠ちゃんだけじゃない。秋葉さまも、アルクェイドさんもシエルさんもきっとそう。それぞれ志貴さんとの間に積み上げたものがあったはずなのに、ちょっと大きなちんぽで突っつかれたらころっと傾いてしまったのだ。

そして、わたしも。

以前は皆を見て、女性とはここまで綺麗に心変わりするのかと戦慄していた癖に。ここまで丸ごと女の子たちを奪われるのを目の当たりにして、実際にこの身でエッチの違いも体験して、オスとしての格差を知ってしまうと素直に『志貴さんじゃ嫌だな』と思ってしまうのだから不思議だ。

お付き合いするのも、御奉仕するのも、子どもを授かるのも志貴さん相手はもう御免だ。

――御主人様じゃないと。

この人じゃなきゃ嫌だと、子宮がわんわん喚いているんだもの。

「はい……♥？♥？　御主人様、準備は出来ております♥？♥？　ちんぽを挿入するための穴、しっかり解しておきました♥？♥？　……え？　ああ、確かにさっきまで志貴さんに抱かれていましたけど、ア

レじゃあおまんこの準備運動にもなりません♥？♥？　今日はしっかり御主人様のデカちんぽをお出迎えしなければなりませんから、奥の奥まで拡げておきました♥？♥？」

わたしもベッドに上って大股開きで御主人様に股間を晒す。

ちょっとみっともないくらいに開いたおまんこは覗き込めば子宮口が見えてしまうかも知れないくらいだ。これでも御主人様のちんぽが挿れば拡張されてしまうだろうけれど。

「ああもう、姉さんったら。志貴さまの精液が垂れてしまっているではないですか。ご主人さまにそんな汚いモノを見せてはいけません」

そう言いながら翡翠ちゃんがわたしの膣口に唇を付ける。そのまま、『じゅるるるるるっ♡♡』と啜った。

「ひゃあああ♥？♥？　ひ、翡翠ちゃんっ!?」

「くちゅ……ぺっ。これで少しは綺麗になりましたか」

口に含んだものをゴミ箱に吐き捨てる翡翠ちゃん。おかげで精液の大部分は無くなったようだった。

それでもまだ完全に綺麗になった訳じゃない。おまんこの襞には志貴さんの精液がいくらか残っている。

でも――

「あとは御主人様が？　……はい♥？♥？　是非とも御主人様のちんぽで間男の精液をお掃除してください♥？♥？」

御主人様のカリ高ちんぽが膣口に当てられる。

ちんぽのカリ首のくびれは、他のオスの精液を掻き出すためのもの。自分以外のオスの遺伝子を奪い棄てて、自分の遺伝子だけを卵子に届かせるためのもの。

志貴さんのうっすい精液がこびりついていたって問題ない。そんなもの全部、御主人様が掻き出してくれるんだから。

つぷ、と亀頭がめりこむ。

来る。わたしはのし掛かってくる御主人様を見上げながら、少し腰を浮かせて挿入しやすいように――

ぬぶぶぶちゅちゅぶぷぷぷッ♥？♥？

「お――――ッほ♥？♥？♥？」

身構えた時にはもうちんぽが膣壁を抉っていた。
鉄の棒みたいに硬いちんぽが柔らかいおまんこを掻き分けていく。張り型で拡げた、なんて馬鹿馬鹿しい。限界まで弛めたおまんこでさえ御主人様のちんぽはきついくらいだ。これまでもそうだったけど、今回は数割増し。御主人様も種付けモードの本気ちんぽにしてくださっているのだと嬉しくなってしまう。
杭のように突き込まれたちんぽがやがてゴツンと子宮を叩く。
わたしはと言えば、挿入開始からここまででもうイキっぱなし。今の子宮殴打が既にトドメだ。待ち望んだちんぽがやってきたのを察知して子宮口がくぱあっと口を開けてしまった。
「んぐおッ♥？♥？　お〝お〝ッ♥？♥？　おうッッ♥？♥？」
予告通り、御主人様はわたしのおまんこに纏わり付いた志貴さんの精液を掻き出していく。
濃さも粘り気も御主人様の先走り汁以下の精液がぶちゅ、ごぽっと流れ落ちる。
原始的な、他のオスではなく自分の種の保存を優先させる為のエッチ。ただでさえ弛くなった穴が激しい抽送で更にガバガバになってしまう。もう御主人様の太い勃起でなければ満足に締め付けられないくらいに。
「は、ひぃ……っ♥？♥？　き、気持ち良いです御主人様っ♥？♥？　ガバマンで申し訳ありません♥？♥？　あ〝ッ♥？♥？　し、志貴さんの精液……全部奪ってください……♥？♥？　孕むのは御主人様の精液でなければ嫌ですからっ♥？♥？♥？」
ぶちゅっ♥？♥？　ぐちゅ♥？♥？　ぱつん♥？♥？　ぐりぃ……っ♥？♥？　ごっちゅん♥？♥？
「おオッ♥？♥？　子宮が潰れてしまいますっ♥？♥？　そんなごつんごつん叩き付けないで♥？♥？　卵子差し出しますからお許し下さいぃ～～っ♥？♥？　おひッ♥？♥？」
エッチは本来、男女がお互いに思いやって行うもの。等しい力関係で手をとってフィニッシュへ向かう共同作業のはずだ。
けれど、こと御主人様とわたしに限ってはバランスは一方的だっ

た。最初のエッチの時から分かっていたけど、ここに来て完全に骨身に染みていた。
わたしはただ、股を開いて御主人様をお出迎えするだけ。
本当なら志貴さん用に大事にとっておいたはずの卵子を気の往くまで貪って貰うだけの、孕ませ寝取りハーレムの五人目に過ぎないのだ。
「姉さん、酷い顔になっていますよ♡　でもそれでいいのです♡　発情すればするほど妊娠の確率は高まりますから♡　もっと子宮を下ろしてご主人さまのおちんちんとキスしやすくして下さいね♡♡
そうだ、ご主人さま、これを♡♡」
翡翠ちゃんが机の引き出しから何かを取り出す。
それは――――リボンだった。真っ白な、なんの変哲もないリボン。
でも、それはただのリボンじゃない。
それは、わたしが志貴さんにあげたものだ。
槙久さまに虐げられて、ただ窓から遊ぶ志貴さんと翡翠ちゃんを羨ましく眺めるしかなかったあの頃。
屋敷から去っていく志貴さんに、何か約束をしたくて渡したのが、あのリボンだった。
……持っていてくれたんだ。当たり前のように忘れられてしまったと思っていた、約束の証を。
その白色に、僅かに視界が晴れる。
志貴さんの笑顔が脳裏に浮かぶ。
これでいいのだろうか。
わたしはなにか、誤った道に進んでいて、まだ引き返せるんじゃないだろうか。
ふとそう思った時――
「ひ……翡翠、ちゃん？　なに、を」
「ふふ。見ましたよ姉さん」
しゅるり。と、喉に紐が絡む。
翡翠ちゃんが、わたしの首にリボンを回したのだ。うなじの下から

通して、ぐるりと一周。左右の先端をちろりと摘まんで。
「初エッチの隠し撮りで――ご主人さまに首を絞められてアへっていましたよね？　そうやって虐待されていたからって。……私、姉さんには感謝しているんです。だって、私を守るために槙久さまの言いなりになっていたんですよね？　だから、どうにかして姉さんの心の傷を癒せないかって思っていたんです。
だから――ご主人さまに忘れさせて戴きましょう♡　思いっきり苦しくして貰って、その上で頭がおかしくなるくらい気持ち良くして貰えば、そんなトラウマきっとどうでもよくなってしまいます♡　昔の苦しくて辛い記憶じゃなくって、苦しいけど気持ち良い、新しいエッチのプレイにして貰えば万事解決という訳です♡♡」
「――――――」
にっこりと笑う妹を引き攣った顔で見上げる。
翡翠ちゃんは、冗談でも脅しでもなく、ただ純粋にわたしを思って言っている。それでわたしが幸せになると確信してそのシチュエーションを整えている。
翡翠ちゃんか差し出したリボンの両端を、御主人様が握った。
文字通り生殺与奪の権を握られて背筋に悪寒が走る。おぞましい恐怖と抗いがたい期待が半々に胸中でせめぎ合う。
それでも――怖い。
やっぱり、取り返しがつかなくなる前にもう一度、もう一度だけでいいから志貴さんに会いたい。
「ま、待って下さい御主人様、わたし――――ぐっうぅぅいいいぃぃ……っっ!!」
制止の言葉を、最後まで言わせては貰えなかった。
わたしが正気に戻るのを潰すように御主人様がリボンを引いた。軽く絞めるなんて生易しいものじゃない、握り締めた紐を力任せに引く絞首。
「お、げっ……ごしゅじんざま、ぐるじ……おぐぉおおオ〝オ〝オ〝オ〝オ〝オ〝ッッ!!???♥？♥？♥？」
ごずん、と腰が潰れそうな殴打。肥満体の御主人様が体重をかけて

ちんぽを叩き付けたのだ。
ただでさえ苦悶で脳が破裂しそうなのに油断していた子宮を嬲られ、快感で頭がおかしくなりそう。どすん、ばすんと連続でピストンされ下半身がガクガクとおかしな痙攣を始める。完全に人間が受け止められる感覚情報の上限を超えている。くりん、と瞳が裏返った。
「駄目よ姉さん、喉を引っ掻いたら。ほら、ばんざい」
翡翠ちゃんがわたしの両手首を握る。反射的に喉のリボンに爪を立てていた両手さえ奪われ、もう本当にただ犯されるしかない。
御主人様の腰使いはさっきまでのとは別物で、あれでも精液を掻き出す為に丁寧な動きだったのだと分かる。今はただ、わたしの穴を『使う』だけ。膣でちんぽを扱いて、亀頭で子宮を殴って、気持ち良く射精へ向かおうというだけのオナホ扱いピストン。
「おげえッ♥？♥？　ぐげぉぁッ♥？♥？　いぎッ♥？♥？　う゛え゛え゛え゛ッ♥？♥？♥？」
段々と視界が狭まっていく。人間、首の絞められ方によっては一分かからず失神する。わたしも気絶がすぐそこまで来ている。
失神へ向かい、命の危機さえ感じながらの首絞めセックスは常軌を逸した快楽だった。
心と身体だけじゃない。
もはや命さえも御主人様の玩具。
ちんぽを扱く為の肉人形なのが、今のわたし。
「ぐぎぎいいいいッ♥？♥？　ぐうううううう……♥？♥？」
勝手に歯がガチガチと鳴る。
気持ち良さは勿論、苦しさだって槙久さまにされた時とは段違い。
新しい鮮烈な感覚の前に、以前の記憶が消えていく。
「ひ……っ♥？♥？　ひゅ……♥？♥？　ぶ……♥？♥？」

駄目だ。本当に、限界が近い。
死にそう。死ぬかも。
死ぬほど気持ち良い。
ブクブクと口の端から泡が零れる。

意識が明滅している。
ぶわり、と膣内でちんぽが膨らむのを確かに感じた。
――びゅっっっうううう♥？♥？♥？♥？　ぶびゅびゅびゅびゅびゅっ♥？♥？♥？　びゅるるるるる♥？♥？♥？　どぼぼぼ～～っ♥？♥？♥？　びちゃびちゃっ♥？♥？♥？
「――――♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？」
飛びかけた意識の中で子宮の熱さだけが鮮明だった。
ぴったり子宮口に密着した鈴口からどぷどぷと精液が注がれていく。膣道なみに弛くなっていた子宮口は亀頭さえも受け入れてしまった。ちんぽで栓をされ、逃げ場もなく卵子が精液の海に浸かる。
パチパチと脳裏がショートする。
臨死アクメで志貴さんへの想いごと脳細胞が弾けていく。
大切な感情も、過去のトラウマも、綺麗さっぱり消えていって――
御主人様に与えられる快楽だけが、鮮明に刻まれる。
――びゅくっ♥？♥？　びちちちち♥？♥？♥？　どぷどぷどぷっ♥？♥？♥？　びゅびゅびゅびゅ～～♥？♥？♥？
容赦のない第二波。便所扱いのおまんこにじょろじょろと小便みたいな量の精液が注がれる。流し込まれる。間違いなく、孕む。ただでさえ大部分を掻き出された志貴さんの精液は、最早あっても子宮に少しこびりついている程度だ。それも御主人様の精子との競争になったら勝てる訳がない。曳き潰されて終わりだろう。
頭蓋が御主人様の精液で浸かっていくみたい。
首絞めセックスの危うい快楽に溺れていく。
「げ……ぁ……♥？♥？♥？　おぉぉ……♥？♥？♥？」
ぶくぶくと泡を吹きながら。
わたしの意識は闇の中に落ちていった。

「あっと、いけませんよ姉さん。ほら起きて下さい」
「え……あれ」
――と思ったらあっさりと目が覚めた。

ぱちぱちとまばたきする。
時間は……どうやら経過していない。首絞めアクメで失神して、しかし次の瞬間には覚醒していた。
いや、全てが元通りじゃないけれど。口許は泡でべたべただし、お腹は精液で満腹だ。
でも……それこそ命の危険さえあったというのに、もう苦しさも何もない。息が上がってさえいなかった。
「あ、あれぇ……??」
何がどうなっているのかさっぱり分からない。
……いや、意識を集中してみれば、少し妙な感覚がある。何かと……誰かと糸が繋がっているような……
「よかった。姉さんとは初めてですけど、うまくいったみたいですね」
「翡翠ちゃん？　どういう……？」
「私の感応能力を使いました。普通ならここまでの効果はないと思いますが……お互いに同じ能力の姉妹だからか、効果は覿面のようですね」
わたしたち姉妹は感応能力を持っている。本来なら自分の生命力を分け与える程度のものだけど、二人ともの能力が作用し合った結果、失神するまで首を絞められたダメージが瞬時に消える程になったようだった。
「さて、そんなことはいいです。はい姉さん、どうぞリボンを」
両手を解放され、リボンの先端を渡される。
リボンはまだ首に巻かれている。引っ張れば再び首が絞められるだろう。さっきまでの首絞めセックスは、それはもう危険なまでの快楽だった。常人なら病み付きになってしまい、けれど身体への負担が大き過ぎてそのうち心身を壊してしまうような。
……けれど、いま翡翠ちゃんが見せた通り。
わたしに限っては、負担を憂う必要はまったくない訳で。
「っ……、は……♥？　御主人様、あの……出来ればもう一度……♥？」
「姉さん、ご主人さまにお願いするならはっきり言わないと。ちゃん

と目を見て。しっかり敗北宣言を致しましょう」
「……♥？♥？」
翡翠ちゃんに促されて左右の指で摘まんだリボンを御主人様に差し出す。
わたしの首にかかった――文字通り尊厳も命も明け渡す――絞縄を。
「御主人様――♥？♥？　もう一度……いいえ、何度でも♥？♥？
気の済むまでわたしを犯してください♥？♥？　もうわたしの全ては御主人様のモノです♥？♥？　志貴さんに捧げるはずだったわたしの人生、どうぞお好きなようにお使いくださいませ――♥？♥？♥？」
御主人様がリボンを掴んだ。
……その後は、よく覚えていない。
確かなのは、ひたすら失神窒息アクメと回復を繰り返して、わたしの脳みそごと、志貴さんへの想いが壊れたということだけだった。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦

久し振りに学校へ行くため、屋敷の旧館を出た。
ぐずぐすしていたらとっくに日は高く昇っていた。体力的にも精神的にも中々一歩を出掛ける気にならなかったのだ。
けれど、最近はとても良いことがあった。久方ぶりに胸が温かくなるようなことが。
ふと視線を感じて振り返った。
本館の窓から誰かこちらを見ている。いや、遠目でも分かる。それは、琥珀さんだった。
口許が綻ぶ。良い事とは、琥珀さんに、子どもが欲しいと言われたことだ。数日前、突然旧館に押し掛けてきた琥珀さんに押し倒され、半ば無理やり絞り取られたのだ。

琥珀さんは危険日と言っていた。そこに数回避妊具もなしに中出ししてしまったのだ、きっとかなりの確率で妊娠しているはず。

……いや、していなくてもいい。だって、琥珀さんは――琥珀さんだけは、俺のことが好きだと言ってくれた。

なら大丈夫だ。これから先、どれだけでもチャンスはあるのだから。

窓際でこちらを見る琥珀さんに手を振る。……そういえば、もう昼に差し掛かり暑いこともあってか、昔の記憶を思い出した。

琥珀さんがいるのは、子どもの頃彼女が庭で遊ぶ俺たちを眺めていた、あの窓と同じ窓だ。

あの頃の琥珀さんはただこちらを眺めるだけで、近寄ろうとはして来なかった。たまに見掛けたり、別れ際にリボンをくれた時もまるで人形のように無表情だった。そのせいで、最初この屋敷に十年ぶりに来た時は翡翠と琥珀さんを間違えてしまっていたんだっけ。

そんな思い出も今では懐かしい。

琥珀さんと俺の間には、そんな他の誰にも干渉出来ない思い出が、気持ちが、他にも沢山ある。

だから大丈夫だ。琥珀さんは大丈夫。

琥珀さんがいれば、俺は大丈夫だ。

大丈夫のはずだ。

琥珀さんに見守られながら、俺は屋敷を後にした。

「んぐおぉッ♥？♥？　おほっ♥？♥？　御主人様っ、廊下でこんな激しいエッチいけません……♥？♥？　家政婦にする悪戯なんてちょっと胸を揉んだりお尻を撫でたりする程度が普通ですっ♥？♥？　ちんぽムズムズしたからって即ハメしたら駄目ですよぅ♥？♥？♥？」

廊下の窓を拭いていたら御主人様に襲われた。

和服のお尻を捲られ、下着を捩られただけの露出で後ろから生ハメ。尻を振りながら家事をしてるわたしを見てちんぽがイライラし

てしまったのだという。いや、勿論御主人様に犯されるのは大歓迎なのだけれど、そんな破廉恥な家事はしていないという部分だけは主張したい所だ。

ばっつんばっつん腰を叩き付けられて悶えていると庭に人影があるのに気付いた。

背格好からして志貴さんだろうか。そういえば今日は数週間ぶりに頑張って学校に行ってみるよ、とか言っていた気がする。

気がする、というのは、最近はもうあまり志貴さんに構っていないからだ。

会話しても内容は聞き流す事が多くなった。志貴さんといても頭の中は御主人様とのエッチの事で一杯。正直世話係も誰か交代して欲しいのだけど、志貴さんの味方です、なんて事を言っていた手前ちょっと気まずくて言い出せないのである。思えば余計な事を言ってしまったものだ。翡翠ちゃんとか、交代してくれるならすぐにでもお任せするのだけど。

「ふふ、ええ勿論――♥？♥？　まだ分かりませんけど、きっとあの日のエッチで妊娠してると思います♥？♥？　だって凄かったですもの、朝まで何十回と中出しされて、失神して、でもすぐに治ってまた中出し……♥？♥？　これで孕んでなければ嘘ですよぉ♥？♥？♥？」

まあ、ほぼ確実に命中しているだろう。子宮がたぷたぷになるくらい御主人様の精液を注がれてわたしの孕みごろ卵子がレイプされない訳がない。

もし万が一外れていてもそれはそれで構わない。御主人様はわたしをオナホハーレムの末席に加えてくださった。なら大丈夫だ。これから先、毎日のようにこうやって摘まみ食いされるはず。何度でも何回でも、チャンスは沢山あるのだから。

「はいっ――、どうぞ膣内に……っ、あはあぁぁあああ♥？♥？　ま、まだ挿れたばっかりなのに、こんな♥？♥？　びゅーびゅー出てます……♥？♥？♥？」

本当に、ムラッときたから目についたわたしでぴゅっぴゅするだけ

の性処理セックス。性交と呼ぶのもおこがましい、便器に小水を吐き出すのと何ら変わらないコキ棄て射精だというのに、中も外も堕ちきったわたしには蕩けるような幸せアクメが訪れていた。
ぐりぐり、へこへこと自分からも尻を押し付けて精液を恵んで戴く。おまんこでちんぽを扱いているとすぐに元の硬さを取り戻した。まったく、昨夜だって今朝だって他の女の子をハメ潰しているのに、本当にエッチだけは人並み外れた御方である。
「はっ、はっ……♥？♥？　御主人様、まだ射精し足りなそうですね……♥？♥？　あの、宜しければ♥？♥？　この後わたしの部屋で如何でしょうか……♥？♥？♥？」
ベッドの上での本気エッチをおねだりすると快諾して貰えた。ここにいると邪魔が入るかも知れないし、御主人様も二人きりで抱きたいと思ってくださったのだろう。一対一でたっぷり愛して戴けることが決まって子宮が甘く疼く。
お尻でちんぽを拭われていると、志貴さんが正門から出ていく所だった。
御主人様に腰を抱かれ部屋へと連れられていく。
視線を外す瞬間、志貴さんが手を振っているように見えたけれど、きっと気のせいだろう。